
旅路のアルブラ

笑石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅路のアルプラ

【Nコード】

N0491H

【作者名】

笑石

【あらすじ】

『アルプラ』と呼ばれる世界を二人は旅をする、十年前に世界を巻き込んだ戦争が終わったばかりのその世界を。 出逢いはとある街、そこで起こった小さな一悶着から始まる二人の旅路——それは先の知れない物語。 †強き心は惹かれ合い、無限大の意志となる†
…… 譲れぬ思い。 現在、序章と一章を加筆修正中。 近い内に更新。

序章『プロローグライン』（前書き）

連載を書いてしまった……もう一つの連載もいつか更新再開します
ので…

序章『プロローグライン』

とある平行世界アルプラ、『魔法』『剣』『機械』そして『権力』といった様々な『力』に支配されるそんな世界。

三大大陸と呼ばれる大陸は『アルプラ』の陸地の大半を占め、それぞれに様々な国家が存在している。

その『アルプラ』は昔、統一時代と呼ばれていた時期からただ一つの言語に統一されており、国家間……どころか大陸間でも交流がスムーズに行えた。

しかし、言葉は通じるも文化の違いからか思想の大きな相違が生じ、三大大陸間で三つ巴の戦争がいつしか始まる。

その戦火は収まる事を知らず、大陸内でも国家間の戦争が始まってしまう。

まさに世界大戦と呼べようそれが終わったのは十年前、今になってようやく落ち着いてきたものの戦争の傷は深く、そして様々な厄を残した……

——戦代アルプラ史、序章第一節。

三大大陸が一つであり、その中で一番の面積を持つ『デスクライン大陸』。

他の大陸とは違い『デスクライン帝国』に大陸全体を統治されており、また大きく戦後の影響を受けていた。

＋＋＋

「ま、街だ……！」

荒れに荒れた獣道を通った末に急勾配の下に見えた中都市、すでにボロボロとなった服は見るに耐えない。

そんなボロボロの服を着た同じくボロボロで薄汚い十代後半だろ
う少年は街を見て歓喜の声を上げると急勾配の坂を一気に駆け降りる。

背中に背負った背丈程の『長方形の板』に剣の柄をつけた『ソレ』
をガツシャガツシャと揺らしながら走ると言うよりも、もはや落ち
る少年、彼はつるんと足を滑らすと——そのまま転がり段差で跳ね
上がり、街の塀をのり越えて街中に投げ出された。

「い、いてえ……」

周りの視線が集まるのを感じながら彼は痛む身体を起こす、そし
て周りをキョロキョロと見渡すと

「とりあえず、腹減って死にそうだ」

と、呟くと立ち上がり歩き出して

また倒れるのであった。

一話、轢き轢かれな二人。

「んふふ、何買おうかなっ」

トレギンスという街がある、その街の中央一番街道は人で賑わっていた。

その中央一番街道をスキップしながら進む桃毛の少女は手に財布を持ちながら満面の笑み。

「おっ、ハイリスちゃん。随分嬉しそうじゃないか」

途中、街道で花屋を経営している気の良さそうなおばさんが少女に話しかけると、彼女はショートカットの桃髪を踊らせながらそちらを見る。

十字架の紋章が左胸に刻まれ、白地に肩や裾などに金色がちりばめられたワンピースがやけに輝いていた。

「実はですねえ、初めての給料日なんですよお！」

えへへ、と頬を緩ませる少女に自然とおばさんも笑顔になる。

「それで何かすごい物買おうと思って」

鼻息を荒くしながら言うハイリスにおばさんは何かを思い出したのか指を立てながら口を開く。

「そついえばドリアのじいさんが掘り出し物をゲットしたとか喚いていたね、行ってみたらどうだい？」

「掘り出し物？……なんだろう？」

首を傾げながらも目的地を決めたハイリスはドリアのじいさんの方向へと身体を向けて

「ありがとうございます！行ってみますね！」

と、またスキップをしながら進んで行った。

＋＋＋

ドリアの機械屋、と書かれた看板を掲げる古風な一軒家の中に入れば、ハイリスにはガラクタにしか見えない物が床に散らばり、色んな機械も同様にそこらこしらに散らばっている。

そんな家の作業場辺りで黙々と機械をいじる背姿があつた。

「ドリアさん」

ハイリスがそう呼ぶと、ドリアと呼ばれた背姿の男は振り向く。
ハイリスの顔を見た瞬間笑顔になる男。

「おおハイリスちゃん！侯爵家での仕事はどうだい！？」

と、とても初老の男とは思えない豪快さで唾を飛ばしながら口を開く。

「ええと、まあまあ順調です」

少しその勢いに押されつつ返事を返すハイリス、そう言うとニカツと笑うのでハイリスも苦笑いで返す。

「ところで一体なんの用だい？」

「あ、掘り出し物を手に入れたって聞いたので」

打って変わってそう聞くドリア、ハイリスがそう言うつと

「ああ、ハイリスちゃんにも見してあげよう」

そう言いながら家の奥に行き奥から何かを出してくる。ハイリスはそれを見た瞬間にぱあっと目を輝かせ、ソレに抱きつく様に身体を近付けて

「こ、これ、スクーターじゃないですか!？」

「ああ、そうだよ、しかも機械大国アイティア製の中でも更にトップクラスのもんだ」

奥から出てきたのは白を基調としたスクーター、あまり機械が浸透していないスクラインではかなり珍しい物だ。そんなスクーターにかぶりつく勢いのハイリス。

「魔導連結式の――」

などと、誇らしげに性能を語るドリアの言葉なんて耳に入っていない様だ。

ガバツと突然ハイリスは顔を上げる、その勢いにドリアは一步後退る。

「これ売ってくださいっ!!」

その気迫に更に一步ドリアは後退る、ハイリスの眼はこれ以上無
いってくらい輝いていた。

「しかし、高いよ?」

ばっ、とその言葉にハイリスは財布を取りだしドリアの前に掲げ
る。

「給料日ですっ!侯爵からはたくさんお金もらいましたっ!更に貯
金もありますっ!」

ばっ、とまたもう一つ。次は紙包みを取りだしドリアの前に掲げ
る。

「……はあ、ハイリスちゃんがいくら持つてるか分からないけど、
多分それでも足りないよ」

ドリアが残念そうに言うを見ると見るからにシュンとするハイリス、目
には涙もにじみ始めた。

「す、スクーターを買うのが夢なのに……」

小さい夢である。

「お願いドリアさん!」

土下座でもする勢いのハイリスにドリアは頭をぼりぼりと掻くと、

ため息一つ。

「しょうがないな、こっちも商売だからとりあえずそのお金だけでももらうよ」

「えっ！売ってくれるの！」

「ああ、売るよ！男に二言は無いぞ！」

「ありがとうっ！」

ヘルメットを被りスクーターに跨がるハイリス、その背中を見ながら

（赤字だ…）

と、ドリアは嘆いていたとさ。

ところ変わって、中央三番街道。そこは一番街道とは違い人通りが少なめだ。

そこで買ったばかりのスクーターを動かすハイリスの顔はとても幸せそうだった。

（ああ、気持ちいいなあ。このまま旅にでも出たい気分だよ）

風を感じながらハイリスはスクーターを進める、ふとガコンと

車体が持ち上がったかと思つと落ち、後輪も持ち上がったかと思つと落ちた。

そう、まるで何かを轢いたかの様に。

キキィー！とブレーキ、ハイリスは慌てて後ろを振り返り見ると。

「ぎゃばーっ！轢いちゃったあ！」

ボロボロの少年が背中にタイヤの後をつけて倒れていた。

二話、ドイルとハイリス

「ごめんなさい！」

少年が目を覚ますと、小綺麗なベッドで味気のない白服を着て寝かされていた。

起きて身体を起こせば、白と金のワンピースを着た桃毛の少女が謝ってくる始末、なにがなんだか分からない。

「あつ！服は違いますよっ？あのっ、執事さんに着替えを、あとお風呂にも」

ぼけー、としている少年は目の前であたふたする少女をジッと見つめる。それに気付いた少女は首を傾げた。

—ぐぐううう……突然そんな音が響いた。
少女は自分のお腹を一度さすり、そして確認するように少年を見る。

「は、腹が減っ」

その頃にはそう言い残し盛大に腹を鳴らした少年はそのまま倒れていた。

「わわわ、ぱ、パンでいいかなーっ！」

一瞬きょとんとしたが、崩れる少年を見て少女の方はあわてて部屋を飛び出す。

ぐぐうう、ともう一度間拔けな音が響いた。

＋＋＋

「えーと、私の名前はハイリス＝クローシア。ハイリスと呼んでください」

パンを食べる少年に自己紹介をするハイリス、少年は最初こそガツガツと食べていたが今は腹もふくれてきたのかのんびりとなっていた。

「ふう、マジ助かったー！ありがとさん、えと、ハイリス？」

ひとしきり食い終わると腹をさすりながら少年は言った、そこま
で言ってから何かに気付いた彼はハツと顔を強張らせた。ハイリス
はそんな彼にハテナマーク。

「わりい！」

ぱん！と両手を合わせて頭を下げる彼。
なにが？とでも言いたげにキョトンとするハイリスに少年は続ける。

「俺の名前は Doyle＝ターニア、ハイリスが自己紹介してんのに俺
だけしない所だったよ」

どうやら少しズレているらしい。と、ハイリスは Doyle に対して
そう思った。

「それで、あのさ……」

「え？」

ふと、どこか気まずそうに何かを言いたげなドイル、ハイリスは
ピーンと閃いたのか目を輝かせる。

「大丈夫！あなたの荷物はしっかり置いてありますよ、ほら！」

と、興奮気味に壁に立て掛けてある『板』を指差す。

「あれって剣ですかね？四角の剣って私は見たこと無いんですけど」
どうやら剣という所に興奮しているらしい、密かに大剣を振るっ
てみたいと思っているハイリス。

「いや、あの、違くてー」

コホン、と咳払いをするドイル。

「トイレ行きたいんだけど」

＋＋＋

ドイルは少し長めの黒髪だ、癖が無く、そのまま下に落ちている
ので少しうっとおしいな、とドイルは前髪を摘まむ。

（それにしても、デケエ家だな）

桃毛の少女に教えられたトイレへの道はスタスタとゆっくりと進

みながらドイルは思う、そのドイルが歩く道も赤絨毯が敷かれています高級感たっぷりである。

（もしかして、ハイリスって良いとこの娘さんか？）

実際は良いとこの従業員である。

「……タは……く……か？」

「……え……を……った奴が……てね」

とある部屋の前を横切った時、話し声がドイルの耳に入った。チラリとそちらへ視線を向けると、ドアが少し空いており、そこから声が漏れている様だ。

「ハイリスは……」

無視してトイレへ向かおうとしたドイルだが見知った名前が出てきたのでつい足が止まる。

「……」

しかし、やはり盗み聞きはよく無いな。と思い直し、まあただの世間話だと納得してトイレへ急いだ。

しかしながら広い屋敷である。

トイレが済み、あの部屋へ戻ろうと道を歩いていると。

「おっ、ハイリス」

廊下をテキパキと掃除する桃毛の彼女がいた、廊下の至るところに置かれた壺などもピカピカに磨きながら進む彼女をドイルはしばらく見ていると。

「あ、ドイル。私仕事の時間になったので、えと、部屋は自由に使っていていいよ。一応許可はもらってあるから」

向こうに気付かれ早口で捲し上げられた、お、おうと素っ気ない返事しか返せないドイル。

しかし今戻つてもやることは無いし、パンとか風呂の恩もあるし、と思い掃除を手伝う事にした。

「ここって使用人とか雇ってないの？なんでハイリスが掃除を」

ホウキを借りて隅々を掃きながらドイルは話しかける、そこまで言うとはハイリスは手を止めてこちらを見て

「私が使用人だけど？」

と至極不思議そうに言った。

ドイルは勘違いしていた自分にかなり恥ずかしくなったので話題を変える事にした。

「ハイリスってまだ15、6だろ？」

「16だよ、ドイルは何歳？」

16か、まあ見た目通りか……ちょっと胸辺りの発育悪いけど、ドイルは内心そんな事を思いつつも真顔を貫き通す。

「17、つかなんで16で働いてんだ？まあ、珍しくはないけど」

ドイルのその言葉にハイリスは少し笑顔になる、ドイルがそれを不思議に思っていると彼女は口を開く

「私にはね、夢が三つあるの、一つは叶ったけど」

眼を輝かせながら、彼女は言葉を紡いでゆく。

「まず叶った夢は『スクーターを買うこと』、お父さんは機械が好きで、その中でもスクーターに乗るのが大好きだったんだ……小さい頃たまに一緒に乗せてもらってたなあ」

そう語る彼女の顔は思い出に浸る顔で、少し、寂しげに見えた。

「次は『魔法使いになる事』、お母さんは魔法使いだったんだ」

照れくさそうに、誇らしげに彼女は語る。

「そして最後は『お父さんとお母さんを捜す事』、まあつまり、魔法使いになるための勉強や、スクーターや、二人を捜す為に旅に出ることとか色々やろうとするとお金がいるでしょ？」

照れくさそうに笑う彼女が輝かやいて見えて、少しドイルはまぶしく感じた。

「あのね、スクーターで旅に出るんだ！お父さんと同じように」

彼女は燃えに燃えていた。

「こらっ！ハイリス！なにさばってんの！」

「うひゃあ！」

しかしその燃えたぎる炎は一瞬で掻き消える、ドイルとハイリスの二人が声のした方へ顔を向けるとツインテールのハイリスと同じワンピースを着た少女が仁王立ちしている、どうやら声の主は彼女の様だ。

「あ、アニータ」

ハイリスが恐れるように彼女の名前を口にする、その名前を聞いてドイルはふと気になる事が生まれた

（なんか、聞いた気がするな）

それもごくごく最近だ、どこでだろう？

「はあ、ハイリス？誰なの？この男は」

「えっ？ええと私が轢いちゃった人です」

チラリとドイルを一瞬一瞥し、ハイリスは答えた。ドイルはそれを聞き

（轢かれっ！？ハイリスお前っ轢いたの俺をつ！？）

と、驚く。つかなにで轢いたんだろう？やっぱスクーターか？などと考えていると、ガシッと首元を捕まれる。

「元氣になつたんなら帰ってもらいなさい」

ズルズルと首を捕まれ引きずられるドイル、首が締めまりパニックになっているがアニータは気付かない。

「あ、アニータ！とりあえずまって！」

ハイルスが止めに入るも、結局ドイルは追い出されるのであった。餞別として黒のスーツと靴、つまり正装に近い物を頂いたが。

大剣を背負った黒スーツは街でとても目立ったという。

三話、不穏な噂、冷たき怒り

「な、アニータ！あそこまで強引にしなくても！」

ドイルを追い出した後、後ろから抗議の声を上げるハイリスを無視してカツカツとヒールで音を立てながらアニータは歩く。

ふと、ぴたりと動きを止めると上品にハイリスの方へ身体ごと振り向いた。しかし眉間には皺が。

「あんな素性も分からないし小汚ない男をこの屋敷に入れる神経が謎だわっ！あなた住み込みで働かせてもらっている恩を仇で返すの！？」

ヒステリックに叫ぶアニータにハイリスは二歩後退るが唇をきゅつと噛み、覚悟を決めたのか口を開く。

「許可は取ったよ、それに、家は強制的に……」

「あたし達が働いてあげているんじゃない！雇ってもらっているのよ！」

ダメだ、この仕事バカには通じない。

ハイリスに背中を向け、またカツカツと冷たい音を立ててこの場を去っていく。

「はあ、大丈夫かな、あいつ」

（さてどうしようか）

ドイルは顎に手を添えて考える、しかしすぐに氣取っている自分が恥ずかしくなったのでやめる。

木にもたれかかる様に座り、もう一度考える。

綺麗な服は手に入ったものの……

「ごそそと懷から袋を取りだしその中身を手のひらにぶちまけた。

「143キルト……宿に泊まれっかな……」

意識せずともため息が出る、こんなはした金じゃあパン一個くらいしか買えない。

とりあえず、賑やかなところに向かうか。と、立ち上がったドイルは最後に先程自分が追い出された家を見る。

（でけーなー）

てっぺんが尖った柵の中に綺麗な庭園があり、その奥に豪邸が建っていて、まさしくお金持ち……といった感じだ、羨ましい。

「はあ、街に向かうとしますか」

ため息を大きく吐いて、ドイルは歩き出した。

自分に視線が集まるのを感じつつ、ドイルはキョロキョロと辺りを見渡す、一番街道と呼ばれているここには色々な店が通りに面しているからだ。

（それにしてもやけに見られるな）

そんなに黒スーツに剣はおかしいのだろうか？

ドイルは一度立ち止まり、考え込む。

（まあいいや、とりあえず、情報収集といえば酒屋だよな）

しかしすぐに思考を切り替えて、すぐ近くにある酒屋へ入っていく。

なにか飲もうか、しかし金はないし。と思いながら奥へ進んでいくと

「お、小僧！おめー、侯爵んとこで働いてんのか！？」

顔を真っ赤にした酔っぱらい親父が気さくに話しかけてくる。

ドイルは自分の着ている服をちゃんと見てみると肩あたりに何かの紋章が入っていた、おそらく侯爵の紋章だろう。

「い、いや、俺は別に」

「あそこはいいよなあ！働いてる女が全員美人だからなあ！ガハハ！お前が羨ましいぜ！」

聞く耳持たずか。ドイルは再びため息をつく。

「あの侯爵も好きだよなあ、美しい女しか雇わないからな。全くあんなに集めて何してるんだかつ！」

「あんなに？……そんなに雇っているのか？侯爵は」

ふと、ドイルは酔っぱらいの言葉にひっかかるところがあった。
ドイルがそう言つと、酔っぱらいは笑いを止めて不思議そうな視線を向けてくる。

「なあに言つてんだ？お前働いてんだからお前のが分かるだろうに。
あ、そうだ！サリアやアリーナは元気にしてるかい？最近連絡をよこさないんだ」

べらべらと喋りまくる酔っぱらいの言葉にドイルは反応しない、
考え込む様な仕草を見せているので酔っぱらいは喋るのをやめた。

「お前、本当に侯爵家で……」

酔っぱらいがそう言いかけると
バン！と大きな音を立てて酒屋のドアが開かれた。

「き、みんな聞いてくれ！」

ドイルを含め、酒屋にいた人々がドアの方を見れば、黒の……今
ドイルが着ている物と同じスーツを着ている男が息を切らして立っている。

「ど、どうしたね」

酒屋のマスターがおずおずと口を開くと、男は呼吸を少し整えて
口を開いた。

「ハインケルン侯爵は人売りだ！ハイリスやアニータ以外は全員奴隷として売られちゃった！！」

一瞬、シーンと沈黙する。ひそひそと耳打ちをしだす者が現れると、次第に皆が口を開け始める。

「そついえばウチの子は最近連絡をよこさないんだ！」
「うちもだ！」

ざわざわと酒屋が騒がしくなる。

（やっぱり……いくら屋敷を歩いていてもハイリスとあのアニータって女の子にしか会わなかったのはそういう訳か）

だとすれば、ハイリスは……。
ドイルはガタンツと立ち上がった。

（アニータって名前、どこかで聞いた事があると思えば）

トイレに行く途中に立ち聞きしてしまった話し声、あれにはアニータとハイリスの名前が出ていた、そして今ちゃんと思い返してみれば……

（あれは人売りの話だった！）

ぎり……と歯ぎしりを立て、ドイルは出口へ向かう。

しかしその足は止まる。

「貴様達全員つごくな」

突如、侯爵家の紋章が刻まれた鎧集団が酒屋にぞろぞろと浸入し

てきたからだ。

「は、ハインケルン騎士隊…！」

誰かがそう言った瞬間。鎧集団の数人が突然走りだし、酒屋にいる人間を腰に差しであった剣で斬りつける。

「ぎゃあああ！」

「うわああ！」

悲鳴が店内に木霊し、鎧集団は止まらず人を斬り裂いていく。

「お前たちは知らなくて良いことを知ってしまった、恨むならこいつを恨め」

先頭に立っていた鎧の男が、ずい…と血だらけになっている男を右手で掴んでつき出す。

そいつは先程酒屋に駆けつけてきた黒スーツの男だった。

ゆ、許してくれ！

痛えよお！

そんな言葉を見殺しして虐殺は進む。酒屋が血飛沫に汚れ、鎧は赤に染まる。

「ふん、ゴミが」

「だっ誰にも言わないから助けてくれ！」

命乞いをするマスターに鎧は容赦なく剣を振り下ろし――

「お前らさあ！」

ぴたり、と鎧集団は動きを止めて声の主を見た。
頃には一人、鎧を真つ二つにされている。

「なっ…！うああがぁ！」

何故か鎧だけを斬られ、身体には傷一つついていないのに斬られた男は苦しみ呻き出した。

「な、なんだ！」

「どうしたっ！」

じわり…と、その男の能天から真つ直ぐに股辺りまでに血管の様なものが浮き出て、男はそれを痛がっている。

「このガキだっ…！ぐがあっ！」

「ぎやぁあっ！」

また一人、次は側頭部を斬られそのまま横に薙ぎ倒され、また一人、今度は斜めに一閃されて前に吹き飛んだ。

それもまた鎧は斬られたものの、身体には傷がつかない。

「う、うがぁぁ！」

「いてええ！」

「ああぁぁ！」

しかし、悲鳴は止まらない。斬られた箇所を抑え、涙を出しながら痛みを堪える男達。

最初十人いた鎧集団はすでに三人戦闘不能となった。残りが身構える、その視線の先に立つのは少年。

長方形の板が刀身の大剣、それを背中の鞘から引き抜いて地面に刺している少年はゆっくりと口を開く。

「大丈夫、殺しはしないよ、『約束』しているからね」

シャコツ、と軽い音を立てて剣を引く抜くと両手でしっかりと柄を持ち下段で構える。

刀身はただ銀に輝いており、それが鎧の男達に恐怖を与えた。

「でも楽にこの場を去れると思うなよ」

そして Doyle ターニアは絶対零度の様な冷たき瞳で彼らを一瞥する。

四話、侯爵・ハインケルン

ハイリスの目の前を急いで走る騎士隊、彼女はポカーンと廊下の端で箒を握り呆然とそれを見ている。

「おいおい、今さら賊かよ」

「すでに何人がやられたみたいだぜ」

走りながらそんな話をしている騎士隊の男達。

（賊かあ、おつかないなあ）

街の皆は大丈夫かな？と少し心配になったハイリスだが騎士隊達の邪魔をしては懲罰ものなのでここから動けない。

「はあ、また掃除しなきゃ」

騎士達が去った後、埃が舞った廊下で一人ハイリスは呟いた。

——バン！

びくうつ！と身体を震わせたハイリス、今の音は何？と音のした方へ視線を向ける。

窓の向こうから伸びる手。

「ぎゃーー！」

またまたびつくりしたハイリスは悲鳴を上げた。
するとその悲鳴が聞こえたのかニュツと人の頭が出てくる。

「え？ドイル？」

窓に張り付き、鍵を指差して『開けて』とジェスチャーする黒髪の少年がそこにはいた。

＋＋＋

「じじつ、人身売買ーっ!？」

「ばかつ、声でけえよ」

事情を話したドイルは口元で人差し指を立てるがハイリスはそんなのお構い無しに声を荒げる。

「そ、そんな……嘘……」

信じられないと顔に出し、ハイリスは呟いた。

「……アニータって奴以外の女はどこへ？」

ハイリスの心中を察してか、自然と声のトーンが落ちるドイル。
その言葉にハイリスは何か考え込むと。

「他の……？なんのこと……？私とアニータ以外にここでは働いていないよ？」

は？とドイルは間抜けな声を出す、真面目な顔で言うハイリスが嘘をついているとは到底思えないが

ハイリスの答えでは街の人達の発言と矛盾する。

（一体なんだってんだ？ハイリスが嘘言ってる様には見えないけど……酒屋ではハイリス達以外にも働いているって……）

「ハイリス、今すぐそいつから離れろ」

冷たい声が響いた。

考え事にふけていたせいか、ぞくり、と背筋に寒気が走るまでその存在に気づけなかった。

「あ、ハインケルンさん」

バツ、とドイルが声のした方へ顔を向けると同時にハイリスがそう言う。視線の先には荒々しい金髪オールバックの男がそこに立っている。

獅子の様に鋭き眼光に逞しき肉体を青い軍服で纏う、ハインケルンと呼ばれたその男は冷笑を浮かべると。

次の瞬間、一瞬で間合いを詰めて業火のごとく剣撃をドイルに叩き込んだ。

辛うじて剣で防御したのか致命傷は避けたが、左肩を斬り付けられたあけく剣撃のあまりの威力に吹き飛ばされて近くの壁に叩きつけられる。

「……くあっ……！」

呻くドイル、だが叩きつけられ膝をついた瞬間
左に薙ぎ払う剣が彼に迫った。

屋敷全体が震えたと言っても過言じゃない程の轟音と共にドイルは壁を砕いた向こうに消えていく。
砂ぼこりがハインケルンにまわりついて、その手に持つ高貴な剣は血で汚れている。

「ハイリス」

びくう！と震えるハイリス、睨まれた小動物は膝を笑わせて今にもその場に崩れそうだ。

「今のガキは賊だ、危ないところだったな」

口を開けばそんな事を言うハインケルン。

——うそ？ドイルが？

どうにも信じがたい話だが、今のハイリスには目の前の男に対して言葉を発する勇氣は無かった。

「今日のところはもう部屋に戻れ」

有無を言わさぬ声だった、逆らうという言葉を忘れたかの様にハイリスは頷く。

ドイルは大丈夫なのだろうか。

彼女は震える足で、その場を去りながらそう思った。

（あれで大丈夫なわけがない）

ハインケルンはそう思う。
チラリ、と崩れた壁を見て。

「貴様……何者だ？」

轟！と、突風の様な剣撃がハインケルンを襲う、剣で防御しようとするが何か威圧感を感じてとっさに避けに転じる。

ハインケルンが立っていた場所に剣が突き刺さり瓦礫が飛ぶ、その破片でハインケルンは頬に傷をつくる。

そこから血が一筋、ハインケルンはそれを拭い剣の持ち主を鋭く睨んだ。

睨まれた当の本人は、地面に突き刺さる剣を引き抜き口から垂れる血を拭う。

身体中に傷を作っているにも関わらずそれを思わせない立ち振舞いの Doyle にハインケルンは顔には出さずとも、戸惑っていた。

「なかなかの剛剣だね。んで？あんたが人売りの主犯格かい？」

その Doyle の問いにハインケルンは答えない。

返事の代わりにまたも剛剣を一閃。

甲高い音が廊下に響く。ハインケルンの剣を難なく防いだ Doyle は歯ぎしりする。

「返事は無しかよ……！上等だ！」

眉を寄せる Doyle は大剣の柄をしっかりと両手で握みハインケル

ンを剣ごと押した、そうしてバランスを崩したハインケルンに対してドイルはしっかりと剣を構え

轟！轟！轟！！

三回の、嵐の如き剣撃で追い討ちをかける！床や壁、周りも切り裂きながらドイルは剣を振るう。

「ガキめがつ！」

「んなつ！」

しかし、その剣撃を全て避けていたハインケルンは軽やかなフットワークでドイルの後ろに回り込み縦に一闪、振り下ろしていた。全て避けられた事に驚きを隠せないドイルは辛うじてというところまでその一撃を避ける。

「くそっ！」

「ガキがちよこまかと……っ！」

二人の攻防により屋敷の一部はボロボロになっていた。

そのせいか。ジャリ、とドイルが足を踏み込んだ瞬間に床が崩れ、足を持っていかれて体制を崩す。

「んなつ……！」

驚きと焦りで冷や汗を流した頃には

ハインケルンの剣が掬い上げる様に迫っていた。

「うお……」

ドイルは剣を盾にそれを防ごうとするが、それを見てハインケルンは

「無駄だ」と冷笑を浮かべた

理由はすぐに分かった、剣と剣が触れあった瞬間にそこから発光したかと思うと

爆発を起こしたのだ。

何が起こったのかドイルが理解した頃には先程までドイルがいた場所は紅蓮の炎に包まれて、崩れかけていた一帯を吹き飛ばしていた。

「この剣には古代文字が刻んであってな、詠唱無しで炎の魔法が……まあ、もう聞こえていないか」

辛うじてハインケルンの立つ場所は耐えていたが、しばらく経てば崩れるだろうので足早にその場を去る。

最後にチラリ、とハインケルンは確認するように崩れ落ちた所を見た。

そこで動く人影は——無い。

五話、開戦の魔法

かつかつかつ、威厳を纏わせたハインケルンが足早に歩を進める。

「アンドラ、アンドラ！」

「へいへい」

歩きながら声を張るハインケルン、するとどこからともなく気だるそうな声が聞こえてきた。

びた、とハインケルンは足を止めると声のした方へ顔を向ける。

「この私になにか用で？」

そこにいたのは初老の小さな男、上流階級を思わせる上品なスーツに蝶ネクタイ。しかし、その見た目とはそぐわない軽薄な声色にハインケルンは苛立ちを隠せない。

「例の仕事がいつの間にか外に広まっている、記憶改竄は完璧だと言っていただろうが」

眉間に深く皺を作り怒りを声に乗せる、その迫力は子供がいたら泣くくらいだ。

それを、ふうつとため息一つで流したアンドラと呼ばれた男に緊張も恐れも無かった。

「ええ完璧ですよ、完璧。ただね、記憶を消したわけではなく変えただけです。ふとしたきっかけで思いだす事も稀にあります」

「……ふん、貴様の底が知れるな」

「ただ面倒臭かったただだ」

ん？と、そのアンドラの態度に怒るよりも不審がるハインケルン、アンドラという男はここまで強気な奴ではなかったはずだが。

ハインケルンが疑惑の視線を送り、口を開ける前にアンドラは喋りだす。

「まあそんな事は置いときましょう。人身売買の件が外に漏れたのは恐らく我々の会話が聞かれたからでしょうな」

「なんだと？」

何時の事だ、とハインケルンは続けた。今日ですよ、即答するアンドラにハインケルンは眉を吊り上げる。

「その会話を執事の一人が聞いていましてね、術が解けてしまったんでしょな。ハイリスとアニータ以外に女がいない事に気づいたのですよ」

「まさか貴様、気づいていたのか」

そのハインケルンの問いに答える前にアンドラは顔を背ける。いや、廊下の奥を見つめる。

にやり、と口角を上げアンドラは口を開く。

「さあ、どうでしょうねえ……アニータ？」

強気な吊り目は面影を無くし、目を見開いて頭を抱える。ツインテールは弱々しく垂れ下がって。

「え、え？…ハイルス以外の……皆…」

焦点が合わない瞳でアニータは呟く、相当混乱しているのか足下もおぼつかない様子だ。

「アニータ…！」

なんてタイミングだ、と噛みしめるハインケルン。すう、とアニータの元へアンドラはいつの間にか近づいている。

「大丈夫ですよ侯爵。すぐに忘れさせたらいい話です」

混乱しているアニータの目の前に立つアンドラ、何が何だかわからないと言った顔の彼女に冷笑を浮かべ。

アンドラはその頭に手をかざす様に近づけていく。

「この手が触れれば、お前は全て忘れているから安心しろ」

ぼそっと、ニヤリとしながらアンドラは呟く。アニータには、彼がまだ若く見えた。

まるで青年のような若々しさを感じたのだ。

その手が触れるほんの一瞬前に、それは起こる。

突然アンドラの腕に向かい何か飛んできたのだ、咄嗟に手を引
つ込めてアンドラが避けたのでそれは地面に突き刺さる。
そしてその場にいた全員がそれを確認する。

鈍く鉛色に光る杭の様な物、それが三個程。

それを見たハインケルンはチツと舌打ちをして

「『鉄の弾丸』……ハイリス、お前か」

「アニータから離れて、次は胴体を狙います」

ハインケルンが静かに言うと、それに答える様に彼女は言う。

皮張りの分厚い本を開いた状態で片手に持ち、身構えるハイリス
はまたアニータに近づくアンドラを見て口を開く。

『引用の35ページ』

ハイリスが響く声で唱える。すると、ふわつと本が軽く発光する。

『鉄の弾丸！』

ふわつ、と続けて光から記号の様な……いわゆる古代文字と呼ば
れる文字が一筋、連なり現れた。

ハイリスのかざす左手の前、横に並んだ文字はグニユツと形を変
え、弾丸を形成する。

風を切る音がして、その形成された弾丸は射出される。四つ作ら
れた弾丸は真っ直ぐアンドラの元へ飛んでいった。

「うわぁおっ！」

だがそれはやたら大げさな動作で避けられる、そのまま目標を失った弾丸は後ろにいたハインケルンの元へ飛んでいくが
一つ残らず、剣によって切り裂かれる。軽々しく弾丸を切り裂いた彼は険しい顔付きで鞘に剣を納めた。

「ハイリス……！」

「アニータに何をする気ですか……！」

苦々しく言ったハインケルン、ハイリスはギン、と彼女とは思えない眼光で二人を睨む。

「忙しない忙しない……侯爵、さつさと気絶させましょう」

睨み合う二人の間に割って入るアンドラ、先程から声の調子がコロコロ変わっている。

ハインケルンもそれに気付く、最初の頃は肝っ玉の小さい糞ジジイだったのになどどうでも良いことを考えていた。

「アニータ！早くこつちへ！」

ハイリスは一瞬の隙を突きアニータを自分の後ろへ行かせた、だがハインケルンはそれに見向きもせず、すぐ近くにあった部屋へ静かに入っていく。それにはアンドラも続いた。

「ハイリス……なんで私達は忘れていたの……？皆はどこに？」

涙を浮かべて、アニータは悲痛な声を出す。混乱しているのだろう、まだ瞳は焦点が合わない。

そんなアニータを見てハイリスは思わず齒ぎしりをたてる。ハイリスも弄られていた記憶が蘇って、ドイルの話もあり侯爵のしている事を全て理解した。

許せない。

（許せない……！）

今の今まで消えていた、恐らく売られたであろう彼女達との記憶が走馬灯の様に駆け巡る。楽しかった事腹が立った事、それらを思い出して、怒りと悲しみの涙が出た。握りしめた拳は震える。

「ハインケルンっ！」

バン！とハインケルンが先程入っていた部屋へドアを乱暴に開けて侵入する、鼻息を荒くしているハイリスは

「もう何もかも面倒くさくなってきた」と、心底面倒くさそうな顔をしているハインケルンの姿を見た。

「騎士隊共、ハイリスとアニータを捕らえろ」

そう言つて壁に書かれた魔法陣に手をかざすハインケルンを。

（連絡魔術！まずい、騎士達が…）

その行為の意味に気付いたハイリスだが時すでに遅し。いつの間にか屋敷に戻っていた騎士隊が地鳴りにも似た足音を響かせて近づいてきていた。

「アニータ！」

ドタドタ、とハイリス達が居る部屋の中へ十人程の騎士が入ってきて、ハインケルンが両翼を広げた様な陣形をとる。

「ハインケルン様、なるべく傷を付けない様に、ですよね」

ハインケルンへ確認をとる騎士、ハイリスはとっさに後ろを振り振り返るとアニータがぐったりと二人の騎士に支えられて立っていた。

「あ、アニータ！」

ハイリスは本を開き、口も開く。同時にハインケルンの横にいた騎士が勢いよく飛び出す。

それに気付いたハイリスは一瞬で近づく騎士へ左手をかざし。

「く、そ…お！」引用の35ページ！鉄の弾丸！」

鉄の弾丸を繰り出した、発動スピードを上げるため二発しか撃てなかったがその二発は見事騎士に直撃する。

ぐお、と呻くが着ていた鎧は厚く、またハイリスが手加減していた事もあり一瞬のけ反っただけで済む。

『引用の22ページ！水の槌！』

だがそののけ反った一瞬にハイリスはもう一度唱えた。

『鉄の弾丸』の時と同じ様に本から湧き出た文字。それがかざした左手に集まると形を変えて少し青みがかった水になる、その水が球体状に収束されると、爆発するように一部膨らみ騎士へ向けて放射状に水が噴き出す。

「ぐばあぁっ！」

水に吹き飛ばされその騎士は地面に倒れた。よし、とハイリスが
眩きアニータの方を向こうとした瞬間、何かに手を引かれるのを感じ
る。

え？とそれが他の騎士に引かれたと理解した頃には手首を反らされ
背中につけられて、首元に剣の切っ先を突き付けられていた。

「ハイリス、無駄な足掻きは止せ」

つう……と冷や汗が頬を流れ、ハイリスはゆっくりとハインケル
ンを見る。

「無…駄？」

「そう、無駄だ」

自分が地に立っているか不安になるくらい、身体から力が抜けた。
負けた、ただそう思い、これからの人生を想像して肝を冷やす。

泣いていた、気付かぬ内に、涙が溢れていた。

侯爵から働かないかと言われて、お金が儲けられると喜び。共に
働いた仲間が売られているのに、その仲間がいた事を忘れて。

惨めだった、悔しくて。

『引用の……！！』

ここで、退きなくなかった。

「ぐああ！」

「ああぐ！」

はっ、と我に返ったのはその時だ。

「首があ！」

「いてえよお！」

いつの間にか下がっていた頭を上げると、アニータを捕らえていた二人が首を押さえて苦しんでいる。

何で？ そう思いつつも、視線を上に向けていく。

アニータは気絶しているのか倒れていた、騎士の二人から遠ざけて寝かされている。

誰の手で？

それは、ハインケルンやハイリスの目を見れば分かる。

「くそガキが…！」

ハインケルンは苦々しい声で、そう口にしていた。

苦しむ二人を蹴り飛ばし、気絶させたドイルは一步、歩を進める。

「さあて、第二ラウンドといこうか？」

不敵な笑みで、元は白のはずが煤だらけでボロボロのシャツの袖をまくリドイルは言う。

黒のスポンは穴だらけで、その下に見える肌もボロボロ。

「よく、あれだけの攻撃を受けて立っていられるな」

すつ、とハインケルンは静かに剣を抜きながら言う。感心した、とても言いたげな顔である。

「まあね、俺は普通より丈夫だし回復力も高くてね」

そうか、ハインケルンはそう相槌をうつと
右手を軽く上げる。

「おおらあ！」

「せええい！」

その合図のすぐ後に二人、騎士が走り出す。

剣を構えて走る騎士達は二人同時にドイルへ剣を振るった。

——ガキイーン！

だが、ドイルのたった右への一振りで彼らの剣は碎かれる。思わず息を飲む彼らは一歩後退った。

その隙を突いたドイルの剣は一人の肩から脇腹を斬り、もう一人はそのまま腹を真つ二つに斬る。

だがその瞬間にはもう五人程の騎士がドイルに迫っていた、そして一人の一撃が首元をかする。

「くそ……おらあ！」

轟！

その五人をもドイルは一蹴した。

自分を囲む彼らを回転するようにドイルは斬ったのだ、その勢いで何人もが吹き飛ばされる。

首元から少し血を垂らしながらドイルはハインケルンの方を見た。だが視界の大半を占めて写ったのは鎧、つまるところ騎士の一人だ。その騎士は今にも剣を振り下ろそうとしている。

『鉄の弾丸！』

しまった！とドイルは冷や汗を垂らしたがその剣は届く前に失速した。

鉄の弾丸によってその剣の持ち主である騎士が地面に崩れたからだ。

弾丸で鎧は突き破られなかったものの、そのまま後ろへ吹き飛ばされた彼はその衝撃で気を失った。

「やるなあハイリス」

「感心してないで！もう一人来てる！」

ザン！ハイリスに対し感嘆の声を上げていたドイルは後ろから襲いかかってきていた騎士を振り返り様に切り払う。

残った二人の騎士は戸惑うがハインケルンの重圧に押され雄叫びを上げながらドイルに襲いかかる。

「どおらああ！」

『引用の22ページ！水の槌！』

その二人もあっけなく気絶させられるのであるが。

「くそガキ、一つ聞かせろ」

騎士達の半分が気絶、半分が苦しみ悶えている中、一人だけとなつたハインケルンは静かに問う。

「なんだよ」

ふてぶてしく言うドイルに顔色を変えず、また静かに口を開く。

「なぜ我々の邪魔をする？」

はん！とその問いにドイルは鼻を鳴らす。剣を床にざっくり刺し

「俺は人売りつてのが大嫌いだし、それにパンをもらった恩を返さにやらんからな」

当然だろ？とも言いたげにそう口にした、ハイリスはその答えにポカーンとしているが、ハインケルンはハッ！と鼻で笑う。

そのハインケルンの態度に少しムツとしたドイル、何がおかしいと言おうとするがその前にハインケルンが剣を構えだしたのでこちらも剣を抜き構える。

「そんな、人を斬れない剣で何ができる？言っておくが、痛みには普通の者より慣れている。そんな甘っちょろい剣でこのハインケルンに勝てるんでも？」

「しゅちゃしゅちゃうるせえよ」

二人がそう言い終わると同時に、剣と剣は飛び交っていた。
互いが互いの剣を避け、その後にもた斬りつける。その斬り合い
で先手を取ったのはドイルだった。

「ぬぐう…！」

見事ハインケルンの脇腹を斬ったのだ、だがやはり服はすっぱり
切れているが身体には痣と痛みしか残らない。

「なんかさ、勘違いしてない？」

素早い動きで距離を取り、脇腹を押さえて痛みをこらえるハイン
ケルンにドイルは冷たく言い放つ。

剣を肩にトンと置き、ニヤリとドイルはまた口を開く。

「この剣は人間を『斬れない』『んじゃない』『斬らない』『んだよ』

ドイルはそう言い、ゆつくりと剣を翼を広げる様に横へ持つてく
る。

「それに――」

そのまま剣を水平に構え、ドイルは言い切った。

「人間『以外』ならぶった斬れんだよ」

轟！

再びドイルは剣を振るう。

六話、宙駆ける二人の

「うぐあああつ！」

腕を抑えて苦しむハインケルン、肘先辺りに痣の様なものが浮かび上がりその先にあつたはずの袖は床に落ちている。

ハインケルンが立つ位置を少し過ぎた辺りまでの床に亀裂にも似た断面があり、それをハインケルンはチラリと一瞥して視線を前へ向ける。

「必殺“雲切り”。……かつこいー技名だろ」

その視線の先にはそう言ってニヤリと不敵な笑みを浮かべるドイルが居た。

「貴様……一体何を……！」

痛みのせいか歯を食いしばりながらもハインケルンはドイルに向かって聞く、返事が返ってくるまでの間に斬られていない左手で剣を握り何とか立ち上がりながら、ハインケルンは考える。

（奴の距離からは剣は届かないはずだ……！なのに何故、この俺は斬られている……！）

ドイルとはかなり距離を取っている、あの剣ではそこからどう振るおうとハインケルンが立つ場所まで届かない。
ならば、理由は一つしかない。

魔法。

「別に、おかしい事はしてねえよ。まあ……そうだな、雲を切るにはどうすればいいと思う？」

「雲を切るだと……？」

何を言っているのだコイツは。ハインケルンは一向に引かない痛みに耐えながらドイルが続けるのをジッと聞き入った。

「『空間』ごとスパツと斬るのさ」

こんなふうだね、と手刀で空気を斬る様な仕草をするドイル。『空間』を斬るとはかなり訳が分からないが、それよりその人を小バカにするような態度に怒りをハインケルンは沸かし、剣を握る手に力が入る。

痛みを堪え、ハインケルンが立ち上がるとドイルは口と手を止めて剣を構えた。

「この俺様が……！貴様みたいなガキにここまで舐めた態度をとられるとはなあ……！」

——ゴオオン……！地面を削る様に剣を振るうと、刀身に刻まれた古代文字が輝き地面を炎が走る。

それにより生じた熱と爆発で地面が砕けその破片を暖められた空気が持ち上げ爆発による衝撃も重なって辺りには砂埃が舞う。

「……ッ！」

「っ、ドイル！」

砂埃は視界を奪う、咄嗟に顔の前で腕を盾にしたドイルにハイリスは思わず叫んだ。

その後一瞬、ハイリスの顔のすぐ横を風のようなものが過ぎて行く。それはよく見れば剣の刀身。

視線を前に向ければ目を尖らせて剣を突き出すドイルの姿。

「ぬわあっ！なんでえ！？」

ハイリスがその場からサッと離れると疑問は解答された。苦虫を噛んだ様な顔でハインケルンがドイルの剣を防御していたのだ。

「侯爵さんや、ハイリスに何をする気だったのかなあ……！」

「チイツ！」

——ズガァン！粉碎音と共にその硬直状態は解かれる。ドイルの剣を押して地面を叩く様にしたハインケルンの一撃で二人の間に炎が暴れ、それをきっかけにまた二人は距離を取った。

ハイリスはと言うと炎の熱から逃げていた。

「雲切り！」

「小癩なあっ！」

距離を取ってすぐにドイルは仕掛ける、放たれた『雲切り』に対し真っ正面からハインケルンは剣をぶつけた。

ガラスが碎ける様な音がしたかと思うと炎と雲切りは相殺され、

衝撃波が周囲に飛ぶ。

「空間の裂け目をぶったたくってどんな化け物だよお前！」

目の前で行われた荒行に思わず叫ぶドイル、その叫びにいつの間にか近くに来ていたハイリスが答えた。

「侯爵は十年前にデスクライン軍でも二番目に強い軍隊『止まらぬメテオランス撃槍』に在籍してたの」

「『止まらぬ撃槍』？あの突撃部隊に？」

突然現れたハイリスに驚きつつもそう返すドイル。ハイリスが続けて口を開こうとするとそれを遮り

「そつだ、自慢じゃないがたった50人で編成されたあの部隊にな」

意外にもハインケルン自身が口を開いた。

ドイルとハイリスが思わずハインケルンを見るがその視線を無視して更に彼は続ける。

「その中でも俺はガキの中のガキだったよ、お前くらいのな」

歯を軋らせ、苦い顔をしながらハインケルンは言った。

そんな彼にドイルは目を尖らせて口を開く。

「だからなんだってんだよ、何が言いたい」

きつい口調のその問いをハインケルンは鼻で笑い、答えた。

「そんな俺はこの辺りを治める権利を頂いたわけだが……どうも調子に乗りすぎた様でな、遊びすぎて小遣いが無くなったのだよ。そんな時にうまい話が流れ込んできたのさ、もう予想つくだろ？」

無言になる三人、ドイルはハインケルンが続けるのをつい待ってしまっているがハイリスの方はどうやら違うようだ、小刻みに身体を震わせて何かに耐えていた。

「そう、人売りだよ。俺の小遣い稼ぎにはぴったりだったよ」

しまった！思わずドイルは呟く、ハインケルンの考えを理解した
が時はすでに遅かった。

『踊り狂う巨人よ！魔法名“アニエス”の名に置いて力を形現させよ！』

（上級魔法！くそ！ハイリスを逆上させるのが目的だったのか！）

魔法にはランク付けがある。初級、中級、上級の三つだ。

それは魔本に記されている魔法にだけ適用し、それ以外の魔法にはランク付けは無い。

魔本とは魔法使いが自身しか使う事の出来ない魔法を他人でも使える様にする物だ、本来魔法には決められた形はなく個人個人が自分で作る物なのだ。

ハイリスが持つ魔本は誰が作った物なのかは分からないが全ての魔本に共通する事がある。

『初級、中級までならば実力が伴えば詠唱を省略できること』

『上級魔法には詠唱の省略は無く、自身の“魔法名”が詠唱に不可欠であること』

その事から“魔法名”を使用したハイリスの繰り出す魔法が上級魔法だという事は見当がつく。

上級魔法が使える時点で中々の実力を持つ魔法使いであることは分かるはずだ、なのにハインケルンがそれを使う様に仕向けたのに理由はあらず。

その理由はすぐに分かった。

発動スピードが遅い事と、ハイリスの周りを囲う様に現れた古代文字がドイルの視界を奪うことだ。

(これが目的かよおっ…！)

『巨人の鉄槌！』

ハイリスの頭上少し上に古代文字がひしめきそれが巨人の拳を形成してハインケルンのいた場所へ叩きつけられる。

それと同時に爆発がドイルとハイリスの二人を飲み込んだ。

「甘いなハイリス。騎士と闘っている時にそれを“使わなかった”のは何故か思い出すべきだったのだ、感情に振り回されおつて」

鼻で笑いハインケルンは口にした。

ハイリスとて弱点は分かっていたはずだがどうしても我慢出来なかったのだらう、それが未熟な証拠だった。

「だよ、これを機にもっと精進したらどうだハイリス？」

「なっ！」

ハインケルンが背を向けた瞬間、どこからともなく聞こえてきた声が響く。

その聞き覚えのある声に驚きを隠せずハインケルンは辺りをキョロキョロと落ち着き無く見渡す。

「ここ、ここ」

その言葉が聞こえてきたのは少し上からだった、そこへ視線を向けると。

高い天井に剣を突き刺してぶら下がるハイリスを腰に抱えたドルの姿があった。

「あんたがどこから来るもんわかんねえから咄嗟に上に飛んじまったよ」

ズボツ、と剣が抜けてドルはハイリスを抱えたまま下に落ちる。ドシン！と高い所から降りたせいで床が少し揺れた、その衝撃で腰に抱えられていたハイリスは呻く。

「ドル！もう少しゆっくり降りてよ！」

「はあ？元と言えばお前が我を無くしたせいだろ」

そんな言い争いをしていてハイリスは気づく、自分を抱える男の様子が変わっている事に。

目や髪は少し青白く淡く光を放っていて、身体全体を魔力が覆っていた。

「不可能だ、貴様の身体能力ではあそこまでの跳躍力は無いはず……！」

確実に仕留めたと思っていたのだろう、戸惑っているのが声色だけでもわかる。そんなハインケルンにドイルは視線を向けると

「すごいな」

と、感嘆の声を漏らす。

なんだと？とバカにされたみたいでハインケルンは眉へ一層シワを寄せる。

「少し戦っただけでそこまで相手の能力を理解するなんてさ。まあでも……もうその情報は無意味だけどね」

自信満々とかではなく、さも当然の様に言うドイルにハインケルンは苛立ちを覚えた。

だがそこまで大口を切る理由はあるはずだ、そうおもうハインケルンの目が一点で止まる。

ボロボロのシャツを着ているせいで所々露出しているドイルの左胸、そこに刻まれている『齒車』の様な『刺青』。

「そうか……お前！強化魔法を身体に刻んでいるのか！」

「せーかい。その強化魔法は『マテリアル・ギア』。有名だから多分あんたくらいの人なら知ってんじゃないか？」

ドイルがそう言い終わった瞬間、先程まで立ち尽くしていたハインケルンは焦る様に斬りかかっていた。

「危なっ」

だがそれは軽々しく余裕で避けられ、ドイルに一瞬で後ろに回り込まれたかと思うとハインケルンは背中に蹴りを叩きつけられていた。

メキメキ、と自分の骨が軋む音を耳にしながら数メートル飛ばされて転がる。

「くっ……そがあ！」

呻きにも似た声を捻り出すハインケルン、だがすぐそれは絶句へと変わる。

轟！と、風のようなものが頭上をかすめたかと思えば尋常じゃない破壊音が辺りに響く。

回転する様に放たれた“雲切り”は屋敷を横に二等分するように壁を破壊した。その惨状にはハイリスにハインケルンはもちろん、放ったドイル自身も驚いてる。

「くそっ！まだ加減が効かねえ！」と、思わず叫んでいるのを聞くとそれは分かった。

——ゴゴゴゴガガ！

屋敷自体が震えているのか地震が起こる、上部分と下部分がズレ始めて天井から瓦礫が降ってきた場所もある。

闘っている場合でないと思ったのか三人共その場から退散しようとしていた、だがドイルは突然足を何かにすくわれてベチャツと顔から転んでしまう。

「くそっ！だせえ！」

原因は偶然ドイルの足元に亀裂が走ったせいだった、慌てて体勢を戻そうとするドイルだが自分に影が掛かるのを感じて咄嗟に上を仰ぎ見る。

おそらく天井の一部だろう、ちょうどドイルを潰せる程度の大きさの瓦礫が真っ直ぐドイル目掛けて降ってきていた。

チッと舌打ちをしてその場から逃げようとするが、身体が、軋む様に、激痛を訴えた。

（マテリアル・ギアの副作用！？やっぱ使っんじゃなかった）

口をポカーンと開けながら上をもう一度見て、ドイルは冷や汗を流す。

そしてその瓦礫は眼前まで――

『水の槌！』

来た所で水の塊がその瓦礫に衝突し、軌道が変わったおかげで何とかドイルは難を逃れた。

ぐいっと腕を強く引かれて仰け反りながらもドイルは立ち上がらせられる。

「ドジ！早く走りなよっ！」

ぐいぐいっと前を走るハイリスにドイルは引かれて走り出した。自分で走れる様になると手を離しハイリスに追い付いて並走する。とりあえず助けてくれた少女にお礼を言おうと口を開ければ砂ばかりを吸ってしまいむせた。

「ゴホッ！ゲホ！……ってどこいくんだよハイリス！」

ドイルは咳き込みながら涙目になりながら走っている、一方ハイリスは彼の状態には目もくれずそれどころか真っ直ぐ外に向かっていたはずなのにいきなり方向を変える。

廊下を走っていたので向かう先は突き当たりか階段。

突き当たりと言うのはドイルとハインケルンが戦って崩れた所でそこは飛び降りでもすればいいし、階段から下に降りればエントランスがありそこからすぐにでも外に出られる。だがハイリスの向かったのはドアが半開きの部屋。

ハイリスが何をしたいのかは分からないがこの屋敷はもう長い事保たないの是一目瞭然である、彼女には何か考えがあるのかもしれないとドイルは彼女に続いて部屋に入った。

——ブルルウン！と、同時に響くエンジン音。

（機械音！？）

「ドイル後ろに捕まって！！」

ドイルがその機械音を聞き心で叫んだ瞬間にはハイリスの声が耳を貫いていた。白い機械に乗る彼女が一瞬で近付いてくるので通りすがり様に彼女の後ろに飛び乗って腰を下ろす。

「お前っ！これのためにかつ！なんで部屋に飾ってんだよ！」

「整備してたのっ！……ほらっ！これ付けないと目が開かなくなるから！」

渡されたのはゴーグル、彼女もそれを装着する。

ドイルがあたふたしながらもゴーグルを付けたのを確認するとハイリスはニヤリと口角を上げ

「飛ばすよぉーっ！」と叫んだ。

グン——と後ろに引つ張られる様に仰け反るドイルは咄嗟にハイリスの腰に手を回してぐつと締める。

その行動は正解だった、風を切りながら機械——スクーターは加速していく。

「すごいでしょドイル！これがスクーターよ！いやーゴーグル予備買っというてよかった！これ無いとこの速さを感じさせられないからねえ！」

それと同時にハイリスのテンションもスクーターの様に加速していく。ドイルが絶句している事に気付かずハイリスは陽気に声を張り上げる。

「……ってハイリス！前！前！」

ぐんぐんと進むスクーターは確実に廊下を進んで行くが、階段を無視して真っ直ぐ突き当たりに向かう。

ドイルとハインケルのせいではばかりと外の風景を写してしまっているそこだが近づくにつれて瓦礫等でまともに走れなくなる。そもそも高度的にも相当なのでそこへ突っ込めばどうなるか

「って突っ込む気がよぉ！」 ドイルの悲痛な叫びが響く。

「大丈夫！小さい頃にお父さんに運転させてもらってたから身体が覚えてる！それにこれのタイヤは砂利道対応ーっ！」 きゃっほー、

とかなり楽しそうにハイリスは叫ぶ。

そしてスクーターは宙を舞う。

二人の旅は、この時すでに始まっていたのかも知れない。本人達
が気付かぬ内に。

空は静かに見守っていた。

終話、プロローグエンド

「あらまあぶつ壊れちゃって」

くくく、と喉から鳥の鳴き声の様な声を出しながら笑う。

笑いの主が見るのは無惨にも崩れ去ったハインケルン侯爵の屋敷跡。

屋敷の中にいた人間は気を失っているアニータと騎士達以外は避難しており、今は避難した数人が屋敷跡で色々と何かをしていた。おそらく自分の私物でも発掘しているのだろう。

騎士達はと言うと、自身が着ていた鎧によりなんとか全員一命を取り留めた、ただ数人は鎧が切り裂かれていたので死に至るまではいかずとも大きいケガをした者もいる。

アニータはと言うと、おそらくハイリスが張ったであろう防御魔法によりほぼ無傷であった。その魔法は局地的な物で移動している対象は守れないので戦闘中は使わなかった物だ。

アニータはその場から動かさずにした方が安全だとハイリスは判断したのだろう。それは正しく、アニータは屋敷が崩れた後もそこに留まりしばらくしてゆっくりとパラシュートを開いたかの様に着陸した。

「ああーあ、こんな事になんなら洗脳もしっかりやっとけば良かった」

そう呟くのは先程の笑いの主。

アンドラはその外見にそぐわぬ口調と身振りで屋敷跡に入ってい

く。

そして声一つ上げずに顔から倒れた。もう立ち上がる事は無い。

「何をしているの？探したのよ？」

窓際に腰掛けていた青年はその女の声に反応して外を見ていた視線を部屋の中へ移す。

青年は右眉に眉を象る様に金のピアスが連なっていて、左耳にもピアスが何個も付いていてそこがキラキラとやけに光を反射する。

「おお、いつの間に？さすがは神出鬼没^{エントラー}、突然表れるね」

おどけた様に言う青年に『神出鬼没^{エントラー}』と呼ばれた女は露骨に顔を歪める。

「あんたが言うとなんかむかつくわ、どうせさっきまで誰かを操って何かしていたんでしょう？ほんと、性格が出てるわね、あんたの能力」

「あはは、決めつけるなよ。俺がいつもそんな事してるみたいじゃないか」

違うの？と思わず『神出鬼没^{エントラー}』は言い掛けて口を塞いだ。今は言い争っている場合じゃないのか話を切り替える。

「とりあえず、今から会議だからすぐ来なさい。場所はいつもの所」

それだけ言うと『神出鬼没』^{エントリー}は背を向けた。
へいへい、と青年がやる気無さげに言うが、言い終わる一瞬前に彼女の姿は綺麗さっぱり消えていた。まるで最初から居なかった様に。

「はあ、ハインケルンと黒髪のカギの戦い……結局うやむやかよ」
立ち上がりながら彼は一人呟いた。立ち上がるとすぐに耳を指でほじりながら彼は歩き出す。

「なんか黒髪と……桃髪まで指名手配にしちまった様だし。残念だなあ、結局ハインケルンと黒髪のどっちが強かったのかは知れず仕舞いか」

キィ、ドアを開く音が静かに響く。

「とりあえず、すぐ面倒臭がる癖は直した方がいいかねえ」

「虚像！早く来なさい！」^{ダンサー}

一人溜め息をつく青年に『神出鬼没』^{エントリー}がどこからともなく現れて言った。

「へいへい」

『虚像』^{ダンサー}の気の抜けた返事だけがその場に残る。
二人の姿は跡形も無く消え去った。

＋＋＋

「んで？もういいのか？」

トレギンスを出る門の外、ドイルはそこでハイリスにそう聞いた。ボサボサだった黒髪は少し短くなり、クシを入れたのか綺麗に整っている。服はと言うと黒い長ズボンと茶色のノースリーブのシャツ、この辺りは暖かい気候なので問題は無い。

「うんっ。決心はついた！」

パンツ！と両頬を気合いを入れる為か叩くハイリスだが涙の跡はくつきりと残っている。

『ハイリスちゃん、いつか、また帰ってきてね』この言葉にはぐつと来て

『ハイリスちゃん、いつでも匿ってあげるよ』この言葉はクスツとして

『ハイリスちゃん——頑張ってね』この言葉には大きく頷いた。

涙は最後に流れた、街の皆から離れて、この門の目の前に来た時に。ドイルに見られない為にそれを全部拭いたけれど、跡はやっぱり残った。

それを隠すかの様にゴーグルを付け、スクーターに少ない荷物を載せる。

ハイリスの服は黒いノースリーブのシャツにクリーム色の多機能型半ズボン、このズボンはスクーターを売ってくれたじいさんがく

れたらしい。ドイルからしてみればやたらポケットが多いなと思えない。

この二人の軽装はいずれも街の人々から頂いた物で、他にも保存食やお金等ももらっている。

（それもこれも……ハイリスが旅に出るからくれたんだけどな）

クシャツとなった紙を広げながらドイルは思う。

ドイル＝ターニア（特徴、黒髪に長方形の大剣を背負っている）、ハイリス＝クローシア（特徴、桃髪魔法使い）。両二名を賊として指名手配する。

似顔絵と一緒にそんな事を書かれたこの指名手配書はおそらくデスクライン全域に行き渡るだろう、まだ対した知名度では無いがトレギンスではもはや生活はできない。

何故かハイリスまで一緒に手配されているので、ハイリスまでトレギンスを離れる羽目になってしまった。

「はああ、何で私が手配されるのよー」

「そんな俺もだよ」

ぐちぐち言いながらハイリスは前、ドイルが後ろ、スクーターに乗り込んだ。

「あ、ほんとに一緒にくるんだ」

「俺が旅する理由も人探しだからな、お前か俺の探し人が見つかるまで……な」

こんな事をドイルは言うが、本当の理由は街の人達からお願いされたからだ。

真剣に本当に真剣だったその街の人の目に。ハイリスをお願いと言われて頷いてしまったからには――

「守るよ、『約束だ』」

「……？何か言った？」

別にー、と返事をすれば、ふーんと素っ気ない返事が返ってきてドイルは思わず笑ってしまった。

「え、何？なんで笑ってんの？」

走りだしたスクーターは二人を乗せて、旅路に行く。

『旅路のアルブラ』

十序章、プロローグライン十

了

終話、プロローグエンド（後書き）

ここまで読んでくださった読者さん、ありがとうございます。
なんとか序章が終わり、二人が旅に出てようやく物語が動き出しました。

次章である第一章のタイトルは『エンジェルダスト』、この意味は読んで頂ければ分かってもらえるかと思っています。

それはさておき“ここはおかしいだろ”等の指摘は随時募集中です、誤字脱字に矛盾（これはかなり重要）はなるべく無くしたつもりなのですが——自分でも後になって気付く事があるので完璧という自信はありません。なので指摘等お願い致します。

さて、こんなダメな作者の長ったらしい後書きまで読んでくださった読者さん本当にありがとうございます。

あと、次話の前書きにドイルとハイリスのプロフィール的な物を載せようと思います。

それでは、ありがとうございました。

一章『エンジェル・ダスト』 一話、二人の主人公（前書き）

新章開始。今更ですがこの小説はバトルファンタジーです、てか序章でどれだけ戦ってんでしょか。やり過ぎ感……

さてはて、新章開始というわけで前回の後書きにて告知しましたが二人の簡単なプロフィールでも書こうと思います。

ドイル「ターニア

17歳

身長172センチ

少し長めな黒髪。

本編では表記しなかったが中性的顔立ち。

ハイリス「クローシア（魔法名“アニエス”）

16歳

身長163センチ

桃色の短髪、短髪理由は作者がリアルでショート好きだから（蛇足）。

まあ当然のごとく、顔は可愛い顔立ち。少し童顔か。

以上です、簡単すぎでしょうか？……あてか誰かイラスト書いてくれないかな……

まあそんな戯れ言は放って置きまして、本編どうぞ。

一章『エンジェル・ダスト』 一話、二人の主人公

パチパチ、木が爆ぜる音が夜の闇に響く。深い森の闇を照らす一筋の炎は綺麗に並べられた木の枝に宿る。

焚き火を囲う様に椅子にしていたのか大きな石が置いてあるが、そこに座る主はいない。

「嬢ちゃん、悪いが荷物全部頂こうか」

そんな焚き火の傍ら、木を背にした少女が三人の男に囲まれている。少女は苦笑いで両手を上げていて、男達はニタニタと剣を片手に少女を威圧。

どうやら山賊らしい男達、少女はあーやら、えーやら言葉にならない言葉を発しながら少しずつ横に移動している。

「へへ、俺的にはこの子も頂きたいんだが」

下品に笑いながら男の一人が後の二人に同意を求める、そしてその男が少女に手を掛けようとした。

そうして伸ばした男の手を少女はガシッと掴んで上に捻り上げると脇に潜り込んで姿勢を低くしながら男の足を後ろから払い、流れる様に男を背中から叩き落とす。

ぐえっ、と呻く男の胸を思いつきり踏み、そのまま驚きで口をポカーンと開けているもう一人の男に当て身を食らわし吹き飛ばした。

「く、くそ女っ！」

シュツと、最後の一人が放った突きを軽く避ければ男の剣は木に

突き刺さる。

男がそれを抜こうとした時、後ろから足がニユツと伸び出てきて男の脳天に踵を勢い良く落とした。

白目を剥いて男が倒れると、足の主に向かって少女が言う。

「ねえ、いつまで『強盗返し』するの？……悲しくなるんだけど」

心底嫌そうにため息を吐く少女、足の主……黒髪の少年は男達の懷を漁りながら

「仕方ねーじゃん、金無いんだし」と、財布らしき物を見つけ自分のポケットに突っ込む。

ハア……、と二人は同時にため息をつき

「元はと言えば」

ハモった。

互いが互いを睨む。

「あんたが」と少女

「お前が」と少年。

バサバサツ、と近くの木に止まっていた鳥達が羽ばたいていく。それを合図にして、夜の森には口喧嘩が響く――

「そもそもドイルが市場で長持ちしないのに大量に食料買ったせいでしょ！？数日前は吐く程食べて今じゃドライビーフしか無いってどーゆー事よっ！」

「はあ！？ハイルスっ、お前だって商人にやたら靴売り付けられてただろっ！」

「だってドイルのも私のもこの前落ちた沼でぐちゃぐちゃになったんだからしょうがないよ！つか今履いてるしっ！役に立ってるよ！」

左手には森、右手には牧場が見える綺麗に舗装された道を白いスクーターは走る。

運転するのは桃毛の少女ハイルス、その後ろに座るのが黒髪の少年ドイル。二人は昨夜からずっとこの調子に喧嘩を続けていた、結局不毛な喧嘩は良くないと今更気付いたのか二人は口を止める。

「そもそもお前なんであんなに体術使えんの？」

しばらく無言が続いたがその沈黙した空気を破る様にドイルが口を開く、ハイルスはと言うとその質問に対し

「んー」となにかを思い出す様に空を仰ぎ見て

「昔お父さんとお母さんから叩き込まれた……かな？」

なんとも歯切れ悪く言った。

「なんだかんだで戦える人だよなお前って」

右の牧場にはのんびりと歩く牛やらがいて、そいつ達が二人をみ

てなんとも気の抜ける鳴き声を響かせる。

行き先はしつかりとは決まっていない。ただひたすら進んでいる二人がお金には随分困っており、つい最近では三回程『強盗返し』を行っている。辛うじて明日を生きれる……と言っても過言ではない。

「そうだ、ドイルの探してる人ってドイルにとっての何？」

行き先は決まっていないが二人にはちゃんと旅をする目的がある、二人とも人を探しているのだ。

ハイルスは自身の両親で、それはドイルにも伝えてある。だがハイルスはドイルの探し人を聞いていない事に気付いて何気なしにそう聞いた。

「ああ、俺の師匠だよ」

へえ、何の？とハイルスは聞こうとするが間髪入れずにドイルが続けるのでそれは叶わなかった。

「おっ！結構デカイ街が見えてきたぞっ」

ドイルの言う通り、今進む道の先には建物が多く並ぶ街らしきものが見える。少し疑問が残ったが、まあいいかとハイルスは少しスピードを上げ街に向かう。

棄てられし魔法を起こす者、汝の愚かさを悔い改めよ。

それは忌まわしきもの、戦争の副産物。

否、戦争が副産物。

夢見るそれを起こすのは、愚者が勇者か亡者か。

禁じられし魔法、それを越えし棄てられた魔法。

創るは愚者、使つは勇者、棄てるは亡者、そして拾い上げるは廃者か。

十ある魔であり天を裂く程の光。

魔天裂光が一つ、『エンジェル・ダスト』
かつて人はソレをそう呼んだ。

二話、神隠しの街

「「おおおおっ!」「」

二人合わせて奇声を上げるのは眼前に広がる街模様に感動したから……らしい。特に別段美しい街というわけでもないのに二人がここまで興奮しているのはひとえに今まで進んだ道中の村が寂れていたからだ。

戦争が終わって間もないこの御時世、まだまだ復興していない所は多い。少なくとも二人は三つ程村と町を見かけたがそのどれもが活気を失っていた。

そのため、道路が綺麗に塗装されていてレンガ造りや小綺麗な木製の建物が立ち並ぶこの街は本来の倍くらいの輝きを二人に見せている。

「なんだあいつら」

「旅の芸者か?」

そんな二人は後ろ指をさされても気にしない。

「ハイルス、この街はなんて言う街だ?」

ドイルがデスクラインの地図を広げて横でスクーターを弄っているハイルスに聞く。

ん?とハイルスは顔を上げるとその場で立ち上がりドイルの持つ地図の一点を指差した。

「ここは『ガラス・ディアモール』っていつて、西の『港町ウォー
ターライン』や戦後にできた南の『ナインタール』への中継として
需要がある街なの」

へえ、物知りだなー。とドイルが感嘆の息を漏らすとエッヘンと
薄い胸を張ってまたスクーターの後方側部を弄り出す。

「さっきから何してんだ？」

「燃料補給よ、燃料補給」

ハイリスが弄る辺りには四角く型どられた小さな扉があり、ハイ
リスはそこを開けてスクーターの内部に手をかざしている。

彼女の方へ寄りその中を伺い見ると、手をかざしているのは微か
に発光している魔法陣だった。

「これはね、魔力を貯めて動くの。別に自分の魔力じゃなくて『魔
力石』とかを買えばいいんだけど……それじゃお金がかっちゃうか
ら」

魔力石とはその名から想像出来る通り『魔力』がある『石』で、
結構そこら辺で売ってたりする。

「結構簡単に聞こえるけどさ、足りんの？魔力」

「まあちよいちょい補充してたし、私って割と魔力持ってただよ？」

一人で修行したからねっと鼻息荒くするハイリスに、ふーんとあ
まり興味無さげに相槌を打ち周りをキョロキョロと見渡すドイル。
この街を探索しようとして周りを見渡したドイルだがふと視線の

先に何かを捉えた。

「おいっ！ハイリスあれ見てみるっ」

興奮してかバンバンと背中を叩くドイルに呆れながらも指差す先をジッと見るハイリス、そしてソレを捉えるとドイル同様に目を輝かせる。

「アイスクリームっ！？」

「アイスクリームですっ！たまには贅沢しよーぜ！」

ソレとはアイスクリームを作っている屋台の事で、二人はギラギラと目を輝かせてヨダレも垂らす。

「はっ！」

ハイリスは正気を取り戻したのかヨダレを拭う、そしてズボンの横に付けられたホルダーから“魔本”を取り出してペラペラと最初の方のページを開いた。

『華麗なり、巧みなりて片付けよ』

そして詠唱、それと共に古代文字が踊りハイリスが触れているスクーターを囲む。

『収納便利っ！』

「なにその魔法名っ！？」

思わずドイルは叫んでしまいがそれは置いておき、スクーターに溶け込む様に囲んでいた古代文字全てが消え去るとウニョウニョとスクーターが形をスライムのごとく変形させる。そして吸い込まれる様に“魔本”の中に取り込まれた。

「す、すげ……」

名前は置いて、その魔法の凄まじさにそう漏らすドイル。ところでスクーターの質量とか重量はどうなったのだろうと似合わない理系思考もしたりする。

「さて……私はチョコチップだーっ！」

「なぬっ！」

パチン、とホルダーに魔本をしまい、ふいふとハイリスは一息吐く。かいてもない汗を拭いやたら格好つけた彼女はそう叫んで走り出す。

突然の彼女の行動を読めず、出遅れたドイルは慌てて後を追いかけた。

「やっぱ抹茶だろー！」

そうして二人は恥ずかしげもなく幼児の様にアイスクリームを買いに走るのだった。

＋＋＋

「んで、宿どーするよ」

コーンの上に載った抹茶アイスを豪快にかじり、ドイルは隣でチョコチップアイスを笑顔で食べるハイリスに聞いた。

「とりあえずお金はいくらがあるから……せめてお風呂がある所がいいなあ」

それに洗濯もしなくちゃ、それだけ言うとまたアイスを食べるのに専念する。

確かに、たまにはゆつくりしたいなあ。ハイリスの意見には同感で、宿は風呂のある所にしようとドイルも思った。

偶然だが街の地図を『強盗返し』をした山賊達が持っていて、ハイリスがなんだかんだでそれをちょうだいしていたのが幸いだ。ドイルはこの街の地図と睨めっこしながらコーンをかじる。

「おや、君達宿を探しているのかい」

突然頭上から降りかかった声に二人は一度動きを止めて、前を見るが誰もいない。

上を仰ぎ見ると人の良さそうな紳士がニコニコと笑顔を浮かべている。二人は道の端に座り込みながら話していて、その紳士は通りすがりみたいだ。

「それなら良い宿があるんだが……どうだろうか？」

紳士の問いに二人は一度顔を見合わせる、そして紳士の方を見て「お願いします」と立ち上がる。

「えーと、この街の人ですよ？……何故勧誘紛いの事を？そのよくな方には見えないのですが……」

三人で歩き出すとハイリスが口を開いた、気になっていた事なのだろうその質問に紳士は苦笑いを浮かべ気恥ずかしそうに言う。

「いやね、ただのお節介なんだよ」

その答えにハイリスは首を傾げる、ドイルは街の様子が気になっ
てしょうがないのか先程から視線が忙しい。

そんなハイリスを見て紳士は口をもう一度開く。

「私が今から紹介したいと思っている所はね、たった一人の女主人
で切り盛りしているんだ」

紳士が話をしだすとドイルも興味が出たのか視線を紳士に向けた。

「宿屋をですか？」

ハイリスの問いに。ええ、と首を頷かせると紳士は続けた。

「何もずっと、ってわけじゃなくてね、彼女には夫も娘がいたんだ」

「いたんだ」……ね」

思わずボソツと呟くドイル。紳士は少し気まずそうに

「夫は戦争で死に別れてしまつてね、形見とも言える一人娘は……
ほんの半月前くらいから行方不明なんだよ。ああ君達も気をつけた
方が良い、最近この街では『神隠し』が頻繁に起こっているね」

「『神隠し？』」

紳士に言葉に思わず二人は声を揃えた。ハイリスがその事をもつと聞こうとするが、どうやら目的地に着いてしまったらしいので中断。

たどり着いた宿は少し年季が入っているが綺麗な木造建築で、どうやらお風呂はちゃんとあるらしい。その事に内心ハイリスはほっとする。

「じゃあ私はここで失礼するよ、小さな魔法使いさん。剣士の君はちゃんと彼女を守るんだよ」

優しい笑顔を浮かべ、去る紳士に慌ててお礼を言うハイリス。ふと横を見るとドイルが怪訝そうな顔で紳士の背姿を睨んでいた。その脇を肘で強く小突いてハイリスは宿に入ろうとドアに手をかける。

「んっ何すんだよ!」

「お礼くらい言いなさい」

ドイルは声を張り上げるがピシャツと言い放つハイリスにうっと言葉に詰まらせる。

「でもよ、あいつ俺はともかく……なんでお前が『魔法使い』って事知ってんだよ」

そっぴえばそうね……とドイルの言葉にハイリスも考えるが

「私が本をこんな所に付けてるからじゃない?」

と、魔本をパシパシ叩きながらどうでも良さげに言うとドアを開き中に入っていく。ドイルはため息一つ吐いて呆れ気味に後に続く。

「やあいらっしやい！お二人様かい？」

二人を迎えたのはそんな陽気な声だった、茶色の髪を後ろで纏め柔和な笑みを浮かべた彼女はまだまだ若さを感じる。

歳の頃としては三十路前半だろうが、少し痩せている印象を受けるが何があっても折れない樹の様な強さを持っていた。

恐らく宿屋の主人だろう彼女が座るカウンターの前まで行きハリスが彼女と少し話をしながら紙に何かを書き込んでいる。多分二人の名前だ。

「なんだいあんたら、駆け落ちでもしてんのかい？」

「へっ？そんなまさか」

HAHAHAと、同時に顔の前で手を振りながら言う二人に女主人は堪えられなくなっただのか腹を抱えて笑いだす。

「あつはははは！ハハハハ！あは……あー、ごめんね、あんた達があまりに面白くて」

お腹を少し抑える女主人、笑いすぎだろとハリスは突っ込もうとしたがそれよりも笑顔の彼女がチラリと見せた胸元を見て目を見張った。

肋骨が浮き出ている、ふと顔も見れば頬骨も少し目立つ。脳裏にはあの紳士が言った言葉が浮かんでくる。

放心しているハイリスをドイルは不思議がったがハイリスがすぐに気を取り直したので少し疑問に思いながらも理由を聞かなかった。

「ご飯は食堂があるから食べに来てちょうだい、お風呂は何時でも入れるから」

女主人はそれだけ言うと客室の鍵をハイリスに渡す、渡された二人が客室に向かおうと階段に足を置いた辺りで

「あ、風呂は一階にあるからー」と忘れていたのか女主人は付け足した。

「すみません、ありがとうございます」

ペコリとハイリスがその場でお礼を言って二人は客室へ向かう。

「いい人そうだね、少し苦勞してるみたいだけど」

ドイルはその言葉には同感なのか、そうだなと一言だけ言って頷く。

とりあえず、ついでに風呂で洗濯でもしようか。ドイルにはもう風呂に入る事しか頭に無かった。

一方ハイリスはと言うと、先程見た女主人の肋骨と頬骨の事が頭から離れない。

『夫と死に別れて、その形見とも言える一人娘は半月程前から行方不明』

やはり心労だろうか？ただの痩せすぎでは無いはずだ。

ハイリスは客室に入りドイルが風呂に行く準備をしていても女主

人の事ばかり考えている。

「俺先に入っとくぞー？」

「え？うん」

ドイルにそう言われてからようやく意識を現実に戻す。ハイリス自身、自分が何故ここまで彼女の事が気にかかるのか分からない。

（よしっ！私も気分転換しよっ！）

ベシツと両頬を叩いて思考を切り替えたハイリスはお風呂の用意をすると先に行ったドイルを追いかけた。

ちなみにお風呂はきちんと男、女は分けられている。

女側に入ろうとしたドイルがハイリスに叩きのめされたのはまた別の話。冗談だよ！でもお前あんまり凹凸ないじゅばっ！……という台詞を最後にぶっ倒れたのもまた別の話だ。

三話、穏やかな宿

「これでもBあるっつーの」

お風呂を上がったハイリスはそう憤りながら廊下を歩く、風呂を出てすぐの所で倒れている男が居たがそれはもちろん思い切り踏みつけてきた。

今までに汚れた服や下着を手に持ちながら階段を降りる、部屋に干すという手はあるがさすがにドイルもいるので“下着”は干したくない。

「おや？どうしたんだい？えと……そう、ハイリスちゃん！」

下まで降りるとフロントの掃除をする女主人の姿が、先程はカウンター影に隠れて全身が見えなかったが

想像通りと言うべきか、不自然に痩せ細っていた。

「あ、あの。服……干したいんですけど、良いところありませんか？」

その姿を見て少し戸惑いながらもハイリスは要件を伝える。

それを聞いて、視線をハイリスが抱える洗濯物に移した女主人はニコツと笑う。

「なんだ洗濯なら頼んでくれたらやつといたのに。私が干しとくよ、乾いたら持っていくからね」

それだけ言って女主人はハイリスから洗濯物を受け取る。それで

もジョーツと見つめてくるハイリスに女主人はなんだい？と笑顔で言うが、ハイリスはいえ何でもと少し苦笑い気味。

ハイリスのそんな様子に首を傾げる女主人だったがペコリと一礼してハイリスが去ったので仕事に戻った。

（おかしいなー…）

自分達が泊まる客室に向かいながらハイリスは考える、先刻からあの女主人を見るとこう……例えがたい何かを感じるのだ。それがハイリスを戸惑わせている、感じている本人でもよく分からない。

“同情”……だろうか？

「はぁ、なんだかなあ……」

客室に入り窓際で頼杖をつきながらため息を吐いた、外を見れば今日は良い天気なので広場らしき所で遊ぶ子供達がいる。

そんな10歳くらい子供達を見ているとふと昔を思い出した。自分があの子供達くらいの時はちょうど両親が居なくなった時期。

（ずっと、この魔本を読んでたなあ）

そしてあの頃と言えば、自分の三つの夢が確定した頃か。まだまだ“魔法使い”には程遠いなあ……ハイリスは魔本を擦りながら物思いに耽る。

ハイリスの夢の一つである『魔法使いになること』、これは叶っている様で叶っていない。

そもそも、“魔法使い”とは『魔本』等に頼る……つまり『他人の魔法』を使っている今の段階ではなく『自分の魔法』を使えて初めて与えられる“称号”だ。

昨今はただ魔本を使つていても魔法を使えば“魔法使い”と呼ばれているがそれではハイリスは満足できない、真の“魔法使い”がハイリスの夢なのだから。

自分だけのただ一つの魔法、それを見つける事ができればそこから“魔本”に書き残せる様な小さな魔法も作る事ができる。

「なにぼーつとしてんだ？」

はつとハイリスは後ろを振り返り見ると洗濯物を抱えたドイルがこの窓に向かって歩いてきていた。

おそらく窓の辺りに干す気なのだろう、ハンガーも客室の中にあつたし窓の外側上部にはそれを掛ける所もある。ハイリスは仕方なく場所を譲る為に立った

「ねえドイル」

あん？と窓に一生懸命干すドイルは答えた、その時後ろを見たせいでハンガーを引っかけ損ないバランスを崩して一人で慌てる。それを見てハイリスはクスツと顔を綻ばせ

「ちよつと街を観光に行かない？」

財布を手元でチャラチャラと金属音を鳴らさせながら弄ぶ。

「あと一個だけだから待ってくれー」

ドイルはその一つを干し終わると壁に立て掛けてある剣を背負う、ベルトで固定して準備オーケー。

あ、それはやっぱいるんだ。ハイリスが言うと、剣は剣士の命だ。

と胸を張り答える。

＋＋＋

「マスター主人、外に出られていたのですか」

ああ、少し気分転換にな。“魔白”、少し指を怪我している様だが……どうした？

「……ええ、怪我してますね」

……答えになっていないな、気付かなかったとでも？……まあ仕方ないかお前は少し異常だからな。
そつえば、“黒虚”は？

「クロちゃんならキッチンで夕食作りを、私がやると言ったのですが……」

慣れぬ仕事はさせるでない、あいつは怪我をしないとはいえない。

「はい、言っておきます」

ところで、また一人……頼めるか？

「……はい。今日はその為に出ていらしたのですね」

ああ、中々期待できそうなのを見つけた。どうやら旅人みたいだが。

まあついでに『お前達』のお礼も済ましてきた。

「今回こそ成功すれば良いですね。ところで私達のお礼とは何の事でしょう？」

仕事を頑張ってもらう事だよ。ただお前達は気にしなくて良いことだ。

お前達は私の言う事を素直に聞いていれば良いんだよ。

「分かっています主人」
マスター

＋＋＋

「あれ？あの人、宿屋さんじゃない」

ハイリスがそう言って指差す先には確かに言う通り宿屋の女主人がいる。どうやら野菜を購入しているらしい、先程から品定めのためにか両手で手に取ってそれらを見比べている。

時間帯的には夕方で、おそらく夕食の買い出しだろう。

ハイリスとドイルの二人は街に出た後ぶらぶらと街を歩き回り気になる食べ物があれば財布と店の前で相談したり、公園を見つけて見たことの無い遊具に釘付けになったり等のんびりとこの街を楽しんでいた。

少し日が傾き始め、空が赤みがかつてくると自然に足は宿屋へと向かっていてその途中に女主人を見つけたのである。

「あ」

野菜を買い、右手に持つぎつしりと詰まったバッグへ入れる女主人を見ていて突然呟く。呟いた本人はドイルが不思議そうな視線を送っても反応しない。女主人はバッグが重いのか少しふらつく。

（あれだ、“アニータ”と少し被るんだ）

そんな事を考えている自分自身が驚いた。アニータとはハイリスが『人売り侯爵』の下で働いていた時の同僚である。

ハイリスはその考えに至ってようやく、自分が何故あんなに女主人の事が気にかかっていたのが理解できた。そして脳裏には茫然自失になって鎧の男二人に抱えられたアニータが浮かぶ。

そのアニータの姿に、女主人が被った。

「手伝いますよ？」

気付けば女主人に近付いてそう言っていた、後ろからドイルが何かを言っていたが気付かなかった。

女主人は突然後ろから話しかけられた事と、話しかけてきた相手がハイリスだった事に驚いてか目を見開いている。

「何言ってるのよつ、あなたはお客さんよ？そういうわけにはいかないわ」

ハツと我にかえったのか笑顔でそう言う女主人からハイリスは奪い取る様にバッグを持ち、後ろから遅れて小走りできたドイルに押し付け笑顔で口を開く。

「力仕事は男の仕事ですよ、他に何か買う予定の物はあるんですか

「？」

当然の反応か。女主人はポカーンと呆気にとられてドイルは抗議の声を上げる。

「おいハイリスっ、なんだよいきなり！」

「あんたは男でしょう？女の人が重い荷物を持っていたら助け船を出す様な紳士にならなきゃね」

「は、はあ？……あれか、まだ怒ってんのか」

「——何の事を怒ってるって言うの？」

「むね——グハッ！」

ドイルが言い切るか言い切らないかというところで顎に綺麗に決まる足。少しドイルの爪先は浮く。

「んだよ！？やっぱりそうかよ——ってあぶねっ！」

また繰り出されたハイリスの蹴りをドイルは避け、宿屋に向かい走り出す。

その後を顔を真っ赤にしたハイリスが追いかける、残された女主人は目の前で行われた先程のやり取りに一人クスツと笑いその後を追いかけた。

四話、静かな夜

食堂。元々大きい宿屋では無いので宿泊客はここでご飯を取るらしい。

今日は Doyle と Hairs の二人しか客はいないらしく、夕食のまだった女主人——エマを Hairs が誘い三人で机を囲んでいた。

「あの〜失礼かもしれませんが聞いていいですか？」

Hairs が旅する理由など（例の三つある夢）、少し話をして盛り上がっているところで Hairs がいきなりかしこまって言い出す。それを言われたエマはと言うと笑顔で答え、Hairs はそれを見て

「今日は私達だけみたいですけど、いつもはどれくらいお客さん来るんですか？」

ほんの世間話のつもりだった、少なくとも Hairs にとっては。少し、エマの顔に陰が差した。

「……どうかしらね、最近は、閉めてたから」

しまった、Hairs は気付く。Doyle でさえ Hairs に目で「やっちまったな」と伝えてくる始末。

「マコが居た時は……少なくとも二、三組は来てたかしらね。あの子が勧誘に行ってくれてたから……」

最後の方はもはや一人言みたいな呟きになっていた。何とも言え

ないシリアスな空気になり、ハイリスは自分の失言を悔やむ。

「“神隠し”——って何です？」

そんな空気を裂くようにドイルが口を開いた。

「あら？知ってるの？」

エマはいつの間にか下を向いていた顔を上げる

「“神隠し”が始まったのは——そうね、一年前くらいかしら」

最初はこの街で占い師をやっていた男だった、突然——そう、突然商売道具も置きっぱなしに消えたのだ。

だからか、消えた事にすら最初街の人達は気付かなかった。占い師の家はつい先程までそこにいたみたいに生活感が溢れていたという。

「最初は、魔術に携わる人達が消えていったわ。次第に普通の人にも……だからこの街には外から来た以外に魔術関連の人はいないの」

エマがそこまで言うと思わずハイリスは聞いてしまう。

「じゃあ娘さんは……っ」

言っつてすぐに後悔した、先程と同じ様な失言を。バカか私は、と自分の太股をつねりエマの顔を見て更に後悔の念に苛まれた。

彼女は寂しそうな笑みを浮かべて瞳を動かす、その瞳はドイルでもなくハイリスでもなくその後ろの写真立てを捉える。

「マコは、普通の子だったのに……」

ハイリスとドイルはその視線を追ってそれを見る。写真に写っているのはエマと同じ、綺麗なセミロングの茶髪が印象的な少女だった。母親を少し童顔にした様な整った顔立ちで、まだ13か14だろう。

写真立てに飾られているマコの笑顔の写真。それを見てエマは写真の少女と少し似ている様で似ていない、悲しい笑顔を浮かべた。

「行方が分からないだけでしょ？」

ぼそり、ハイリスは呟く。

「エマさん、何ですかその顔は、何諦めてるんですか」

え？

エマが、ドイルもが思わず口にする。

「親が——子を待たなくてどうするんです？笑顔がつ、悲しすぎますよ……っ」

ハイリスはそれだけ言うと黙った、沈黙する空気の中ドイルだけがため息を溢し席を立つ。すると、ドイルよりも先にこちそうさまでしたとハイリスは言い足早にその場を去った。

「あゝ」

二人残され、ドイルは頭を掻きながら

「すいません、娘さんが神隠しにあった事知ってたのに……俺の失

言です。あと、ハイリスはちょっと熱くなって口調が厳しくなった
だけなので許してやってください」

ペコリと頭を下げる。

「いや、ハイリスちゃんの言う通りだよ」

エマはそれだけ言うとお食器を片付け始め、ドイルは客室に戻る事
に。

部屋には乾いたハイリスの洗濯物が、畳まれた状態でぽつんと置
かれていた。

＋＋＋

——はあ、やつちゃったなあ…。

ハイリスは宿屋から外に出て頭を冷やす為に外を散歩していた。
夜の風は涼しく、熱くなった頭は確実に冷えていき自分がした行為
を冷静に思い返してまた、ため息を溢す。

「なあに言っただが私は」

ぴた、と立ち止まり。一人言を呟きながら空を見上げ、またため
息を吐いた。

泣きたい……。恥ずかしさとか自分の愚かさに泣きなくなった、
何故エマにあそこまで言ってしまったんだろう。

もうちょっと言い方って物があつたはずだ、もう手遅れだが。

自分は昔からそうだ、熱くなるとすぐに歯止めが効かなくなる。

つい最近では先程以外に『人売り侯爵』の時。

まだ未熟なのに上級魔法を使おうとしてそれを逆手に取られて…
…結局ドイルに迷惑をかけた。

（まだ子供だなー私は。ドイルを見習わ——って、それは違うか）

心の中で自分に突っ込む。少し悲しくなったが気分はちよつと軽くなった気がした。

つつつ、それは足下を伝った。夜の闇でも映える凶悪な赤。

「え」

思わず漏らした呟きに、反応したかの様に赤は走る。
突然の事だ、ごくごく普通の道を歩いていたハイリスの足下を赤い液体が生きているかの様に動き回っていた。

「な、なにこれ」

その赤はハイリスを囲う様に魔法陣を形成する、ふと足が止まりハイリスはそれを凝視してしまう。少し綺麗な赤の陣。

「こんばんは」

その言葉に振り返るとそこには白い、白い少女が立っている。
髪が、肌が、服が、真っ白な少女。一見異様な出で立ちの彼女の顔は暗くてよく見えないが、そこ以外の白はやけに闇の中でも輝いて見えた。

「あなた……一体」

「『魔白^{ましろ}』、といいます」

白い少女の顔を覗こうと目を細めるハイリス、少女はにこりと笑う。

少しずつ彼女は歩を進めていた、無論ハイリスの方へ。何故か蛇に睨まれた蛙の様に動けない、彼女のどこか異様な空気に吞まれているのだろうか。

ぽつり、雨？

違う、彼女が一メートル程先まで来てようやく気付いた。

ハイリスを囲う赤は彼女の腕から滴り落ちている。今尚、それはのんびりと続く。

（これ……っ！血……っ！？）

ぞわりと背筋に寒気が走った、血が滴る彼女の左腕を見れば肘から手首にかけて一文字に切り裂かれていて、しかもその傷を作ったらしき凶器は彼女が右手に持っている。

見ているだけで痛々しく、あまり傷は深くないみたいだがそれでも充分痛みはあるはず。だが彼女の振る舞いから、痛みを感じている様には見えなかった。

風を感じたのはその時だ。しまった、と心の中で毒づいた瞬間には血でできた魔法陣から触手の様な物が伸びハイリスの身体を捕らえる。

「くっ、『引用の……』」

咄嗟に魔本を取り出すが詠唱半ばで魔法陣の外から伸びた手がその魔本を払ってしまう。少し離れた所に魔本が落ちる音を聞きながらハイリスはその手の主を睨んだ。

銀。そのハイリスの視線とぶつかったのは銀色の眼光。きらきらと宝石の様に輝く銀色の瞳が彼女の見えていなかった顔に二つ。もう顔が見える位置まで近付いていた事に今更気付く。

「ごめんなさい」

そう言っ、悲しそうな笑顔を浮かべる彼女の顔がエマそっくりだった。

抵抗を忘れた様にハイリスは血の魔法陣に捕らわれ、彼女の顔に釘付けになってしまった。白い眉、白い肌、それに比例して開いた口から生々しく見える赤い口腔。それら全てにハイリスは釘付けになる。

何故なら、彼女は

「あなた、何でっ？」

ぬぽんっ、水に何かが沈む様な間抜けな音が響く。もう、ハイリスの姿はそこには無い。

（『あなた、何でっ？』……何がだろう？）

一人立ち尽くす魔白は首を傾げさせる。月に照らされたその顔は、全体的に白いということ以外エマの娘と瓜二つだった。

魔法陣。

それは、簡単に言えば機械で言う自動制御とかその類いに似ている。

魔法は基本的に術者が行使した瞬間から発動するので、何日も後から……というのは魔法自体がその効果を持っていない限り“基本的”に不可能だ。

魔法陣は言うならばプログラムで、その不可能を可能にする為に人間が試行錯誤の末に完成させた物。

だが最近はおつばらその応用が使われている、例えばハインケルン侯爵が使用した連絡魔術（序章にて）などもその応用だ。

応用には他にもある。

まず魔法とはそもそも人の歴史の深さに比例するように発展する物なのである、真の魔法使いが一人増えればその者は自分の魔法を応用した物や簡単にした物など色々とな魔法が生まれるからだ。そしてその個人の魔法を何かに記せば他の者でも使えるのは有名であるが、そうして多くの魔法が世に出回る様になると『アンサンブル複数魔法』という新しい技術が生まれた。

その技術によって、二つ同時に違う魔法を使えば使い方によって変わるが大変便利かつ有能な効果を得られるのが判明したのである。しかし、『アンサンブル複数魔法』を出来る魔法使いは滅多にいない。

そこで白羽の矢が立てられたのは魔法陣、一つの魔法陣に二つの魔法を記せば『アンサンブル複数魔法』と同じ効果……いやそれ以上に細かい操

作も可能ではないかと。

そして、魔法陣はその予想をも上回る結果を見せた。
十だろつが百だろつが、どれだけ魔法を重ね合わせようが、ちゃんと綿密に設計すれば魔法陣は『複数魔法』^{アンサンブル}を可能にしたのだ。

（血でできた魔法陣のすぐ側に……ハイリスの魔本？）

ドイルが居なくなつたハイリスを探しに夜の街を歩いていると、ぽつんと残された皮張りの本と……やけに生々しい血の魔法陣を発見した。

ざらり、触れると血は乾いていて触れた所から風に流される様に砂になり消えていく。

「何なんだ？」

ドイルのその呟きに、答える者は一人としていない。
結局、ハイリスはその日帰って来なかった。

五話、魔法陣の館

朝、街ではドイルが情報収集を始めていた。朝になっても帰らないハイリス、脳裏に『神隠し』という文字がよぎる。『神隠し』なんて馬鹿馬鹿しい話だが、現に何人もの人間が犠牲になっているし、昨日の不自然に落ちていた魔本もあって現実味を増してきた。

「『神隠し』にあつた人間はどうなるんだ……？」

ふと、そんな考えが浮かぶ。行方不明になっている人間は、何処に行き、何をしているのだろうか。

いや、それよりも“誰”が“何のため”に……そこまで考えて気付く、そもそも人間の仕業なのか？

「坊主、ここだけの話だな」

何人かに聞き込みをしているとある男にたどり着いた、その男は真っ昼間から酒を飲んで酔っているが実に興味深い事を言う。

場所は人の喧騒から少し離れた路地で、昼間だと言うのに少し薄暗かった。

「この領主、一年前から少し様子がおかしくつてな……ちょうどその頃から『神隠し』が始まったんだよな」

周りを少し気にしながら言う男にドイルは少し眉を寄せ

「領主……って、そういやこれも領主がいんのか、時代錯誤だな」

「へっ、戦争ん時はお偉いさんだった奴が辺境に追いやられただけさ。まあ形だけ、誰も奴に縛られなんかしねえ」

ケケケと笑う男だが真つ昼間から酒を飲む様な奴に偉そうな事は言えないと思うが……ドイルは内心そう思うが表には出ない様に押し殺す、男が左手に持つ酒の瓶が空なのに気付いて懷からまた取り出したのにはさすがに呆れたが。

「様子がおかしいって……どんなふうに？」

げふつ、と酒臭いゲップを顔にかけられ思わずたたっ斬りそうになるのを抑えながらそう聞く。

「噂じゃあ“呪法”にのめり込んでるって話だ、人をさらうのも“生け贄”だ……ってな」

「呪法……か」

血の魔法陣。血を……身体の一部を魔法に使っている時点で尋常じゃない、思わず自身の左胸……歯車の刺青を押さえる、尋常じゃない……それはドイルの『マテリアル・ギア』でも言えるからだ。自然に身体に力が入り、ぎゅ……っ手に持つハイリスの魔本を強く握り締めてしまう。

「ありがと、おっさん」

「いいよいいぜー！お前も飲んでけよー！」

いや、いいです。と、たじろぎながらもその誘いを断りそこから急いで離れる、正直あの男は怖い。

「さて……領主んとこにちよいと行ってみようかな……？」

まずは領主の家の場所を聞き込みなくては、ドイルはまた情報収集の為歩きだした。

「ここか……ハインケルンとこよかデカくないんだな」

ガラス・ディアモールの領主の屋敷は、街の南門と西門からそれぞれ一直線に続く公道の交わる所にありとても目立つので聞き込みするまでも無かった。

領主の屋敷は戦争時代に、西のウォーターラインと南のナインタール二つの街の中継街として、商人にそれぞれへの通行証を発行するための場所として使われていたらしい。戦争が終わり、商人への規制も減ったためその必要が無くなったが商人がこの屋敷へ行きやすくなる為の、その時の名残りでこの様なすぐ目に付くような所に屋敷があるらしい。

「にしても――」

そんな領主の屋敷を敷地の外から品定めする様に見ていてドイルはとある事に気付く。窓という窓のカーテンが閉められていて、話し声はもちろん人影も無い。そう、とても……人が住んでいるとは思えなかったのだ。気のせいかこの屋敷の周りだけこの街の一部じゃない気がする。

そんな、印象を受けて尚更ドイルは怪しいと思った。『呪法にのめり込む領主』なんて話を聞けば当然だろう。

——ガシャツ！金属音が響いてドイルは誰かに聞かれていないか周囲を見る、どうやら人通りは皆無らしい。

先程の金属音はドイルが屋敷内に入ろうとして鉄でできた柵をよじ登って下りる時に剣を柵にぶつけた為に生じたものだ、身体がどこかに引っ掛けてないかを確認して屋敷を見る。

さて、何処から中に入ろうか。

（むしろ真っ正面から入った方がいいかもな）

そう考えて一番大きい扉を開けようと力を入れるが鍵が掛かっている。躊躇無く剣で鍵を壊した。

中に入ると、何も無い空間がぼつかりと。何も無いというのは、まさにその通りで、戦争当時はこの街の受付として機能していたはずなのに床から上には何も『無い』。外から見れば二階建て、しかし中に入ると床と壁以外『何も』『無い』

（なんだこの空間……）

その異様な光景に周りを見渡して、ふと、気付く。微かに……微かに床には何かがあったのだ。いや、『刻まれていた』。

大きな魔法陣。それがこの何も無い空間の床に——いや床だけでなく壁など至る所に小さい物から大きい物まで色んな魔法陣が、よく見れば床の一番巨大な魔法陣にも大小様々な魔法陣が何重にも刻まれている。

この空間は魔法陣に囲われていた、魔法陣の機能は分からないがどれもが難解で複雑だろう事はドイルでも分かる。

その中でも、一際目立つ床の巨大な魔法陣、これに重なる様に刻まれた魔法陣もまるでこの魔法陣の一部の様な——いや、この魔法陣は重なっていて始めて力を発揮するのだろう。もしかしたら他の

——この空間の魔法陣全てがこの巨大な魔法陣の為に存在しているのかも知れない。

ごくり、とこの異様な空間に生唾を飲む。巨大な魔法陣は、見れば見る程——『異様』だった

もしかしたらではない、この魔法陣が正常に機能する為に他の魔法陣が存在するのだ。そんな根拠も無い自信が出来る程、その魔法陣は偉大だった、そこまで来てやっと余裕が出来たのか気付く。少し興奮していたのだろう、魔法陣をよく見ていなかった。

巨大な魔法陣の中心にはまた円があり——その中での上方には天使の様な物が書かれてあった、下には雫の様な絵。古代文字がひしめく魔法陣の中、一際目立つ魔法陣の中で更にそれは目立っている。そして、ドイルはようやく——ようやくそれが『何の』魔法陣なのかにたどり——着こうとした所で

「君が、侵入者……か？玄関から入るとは……なんとも大胆不敵……な」

全身真っ黒な、黒髪に黒い帽子から顔に垂れる黒のベール、黒の半袖のワンピースは膝まで覆い隠していて黒のブーツも膝まで、そして肘まである黒の手袋。まさに真っ黒な、声と体型からして少女だろう謎の存在が現れた事によりドイルは結局たどり着けなかった。その異質な少女は、明らかな敵意を持って近付いてきたからだ。辛うじて見えている肘から肩先の肌は他とは正反対に真っ白で、それが更に彼女の黒さと異様さを際立たせている。

「君は——排除……決定。……目的は、何かは、分からないけど……君は、主人の味方じゃ……ない気がする」

ずずっ……、黒のワンピースの両方の袖口から黒い液体の様な物

が湧き出て意志を持っているかのように腕に巻き付きながら下に伝っていき、それが手にたどり着くと鋭利な爪を形成しながら指先まで同化していき、手袋に巻き付いていた部分は堅固な籠手になる。最終的に両の手に大きな黒い爪を形成させた彼女は、その黒い爪をぶらんと肩から脱力させながら

「ぼくは――『黒虚』。……主人の盾……であり……剣」

「……はっ、もしかして呪法って奴か？」

脱力しながらも、目に見えそうなくらいの敵意を見せる『黒虚』にドイルは剣を構える。

「雲、切りい！」

轟！空気を切り裂き黒虚に向かう雲切り、ゆらりと実体の無い煙の様な滑らかな動きで彼女はそれを避け接近してくる。避けられた雲切りは壁に当たるが、壁どころか魔法陣さえ傷をつけられなかった。そこにたどり着く前に……魔法陣にたどり着く前に膜の様な物にぶつかり消滅したのだ。

（なんだ、あれ）

その不可思議な現象に一瞬油断し、間合いを詰めていた黒虚の爪が迫る。それをしゃがんで避け、がら空きの腹を斬った。これで大人しくなるだろ、と少し乱暴だがそう考えていたドイルは……完全に虚をつかれた。

まるでダメージが無いように攻撃を繰り返してきたのだ、怯みもなく、正直ドイルはこんな事は初めてである。左の爪はドイルの脇腹を切り裂く。

「うぐっ！」

咄嗟に身体が反応して黒虚から距離を取るが、ドイルは内心焦っていた。この剣は確かに切り“分ける”事は出来ないが、斬る事は出来るのだ。そして痛みしか残らないと言っても、じゃあ無痛症の者にダメージは無いのかと言われれば、それは違う。この剣で斬られれば例え痛みを感じない身体でも関係なく苦しむのだ、それがこの剣の力と言っても良い。

なのに、何故この目の前の女は――

――ヒュオン！

「ぬわっ！」

予想外の事態に動きが止まったドイルを見逃すわけは無く、辛うじて避けたが爪は頬をかすった。

もう一度、剣を振るい彼女を斬ろうとするドイル、だがそれは避けられる。横の一閃を避けた黒虚は両の爪ですくい上げる様に――めりっ、と顔にドイルの膝が食い込んだ、その一瞬後にいつの間にか振り上げていた剣を真っ直ぐ振り下ろす。

膝を入れられた黒虚は風のように振り下ろされた剣を避ける為ドイルの脇へ潜り込む、そのついでと言わんばかりにドイルの腹を三つに切り裂いていった。だが、黒虚の足はドイルに捉えられていた。

ズガン！と振り下ろされた剣はまたしても魔法陣に触れる前に止まったが、確かに黒虚の左足を大腿部から斬ったはずだ。

「お腹……真っ二つの、予定……だったの、君……強いね」

少し離れて拗ねる様に言う黒虚、平然と立っている辺りからどう

やらダメージは無い事が分かる。

切り裂かれたせいで、傷は浅いとはいえ血が垂れる自分の脇腹と腹を見てドイルはため息を吐く。

「さて、かなり困ったな」

黒虚の顔を覆うベールが揺らめいた。

＋＋＋

ハイリスが目を覚ますと、すぐに目に入ったのが廃れた天井。もちろん見た事が無い天井で、どうやらベッドに寝かされていたらしいハイリスは上半身を起こし自分の身体がちゃんとどこも欠けずに存在しているかを確かめた。上半身を起こした際に、ベッドが軋む音と共にチャリン……と『金属音』。

五体満足だったので安心。と言いたい所だが、先程の金属音の正体……両手両足に鎖の付いた『鉄枷』があるのである意味満足ではない。

「うそーん」

自嘲気味に笑い、鉄枷の鎖の先を辿って行く。鎖はベッドの下まで続いていて、どうやら床に繋がれているらしい事が分かる。まあ分かったところでどうにもならないが。

どうしようか？力任せに引っ張ってみようかな？等々の無駄な脱出方法を考えていると、ハイリスが寝かされていた部屋のドアが軋みながら開かれる。そういえば目を覚ましてから鉄枷に注意が行きすぎて周りを見ていなかったな。

「お目覚めですか？随分寝ていましたね」

開かれたドアの方を見て、思わず『あ』と間抜けな声を出し間抜けな顔をしてしまった。

真つ白な少女、そして宿屋の女主人エマの娘と瓜二つな顔。そしてハイリスをここに拘束した（のだろう）少女、確か名前はマシロ。

「覚えていますか？私は魔白^{ましろ}。魔法の魔に、白色の白です。——すいません、手荒な真似をして」

ペコリと頭を下げる魔白、ハイリスはと言うと自分をさらっっておいて謝罪する魔白を謎に思う。正直、ハイリスは自分にはさらう価値は無いと考えている、貧乏だし旅人だし。

そして、とある事をようやく思い出す、この街で起こる神隠し。

「まさか……神か……」

「はい、神隠しです」

「えっ……！？さらっと言っちゃっ？」

言うか言わないかのところで、キツパリと言い放つ魔白にたじろぐ。増々、この少女を謎に思う。

「ねえ、あなた……何者なの？」

とうとうハイリスはそれを口にした。問われた本人は、何を言っているのか分からない……とても言いたげだ。やはり、エマに似ている。

質問の仕方が間違ってるか……と、もつと良い言い回しを考えようとするハイリス。だが、先に口を開いたのは魔白だった。

「あの……私の顔に何か付いてますか？」

……露骨にじろじろと顔を見すぎたか？

返答に困り、黙り込むハイリスに首を傾げる魔白。まあ、黙っていてもしょうがないか——そう思い口にした。

「あなたが似ているんだよね、知り合いの娘さんに」

その言葉を聞いて、一瞬彼女は動きを止めた。そして、今までのローペースな動きからは想像も出来ないくらい俊敏さと強引さでハイリスに詰め寄る。血相を変えた魔白に思わず身体が引けてしまった。

その突然の変化に内心びくびくしながらなるべく平静を装い、魔白が口を開くのを待つ。

「——私を、知っているのですか？」

それは、ハイリスにしては意外……も意外で、まさかそんな言葉が出てくるなんて——魔白の顔は真剣で、徐々に顔が近づいてきており鼻先がぶつかる所でハイリスは咄嗟に離れた。

「どういうこと？——魔白……ちゃん？の言ってる事がよく分からない」

「……ごめんなさい、少し、熱くなりました」

悲しそくに顔を俯かせる魔白。白く綺麗な髪がさらさらと重力に

引かれ、彼女の顔を隠す。辛うじて見えている口元は、続けて言葉を紡いでいた。

「私は……“私達”は、つい半月程前からしか記憶がありません、主人は記憶を無くしたのでは無くその時に私達が“生まれた”……と言うのですが」

『半月程前』、その単語に心臓がドクンと大きく跳ねる。偶然じゃない、半月前・瓜二つな外見——だが、“私達”という言い回しも気になった、それに写真での『マコ』はエマと髪と眼の色は同じだったが目目の魔白は銀眼に白髪……話を聞く限りでは彼女が主人と呼ぶ人物がその謎を解く鍵だろう、一体全体なんなんだろうか。

「それには、いくら主人の言う事とは言え納得出来ないのです。生まれたというには身体が成長し過ぎていますし、“記憶”は無いはずなのに“知識”がある……こうして話す事が出来るのが証拠です」

そこまで言い終わると、きゅつと薄い桃色の唇を軽く噛みしめ

「——時折、何かを思い出しそうになります。暖かい……暖かい……記憶を」

そして、彼女は顔を俯かせながらも寂しそうな——笑顔を浮かべる。ハイリスには髪の毛で見えていないはずなのに、何故か彼女の笑顔をそこに見た。

ハイリスが何かを言おうとして口を開けようとするが、魔白が俯かせていた顔を上げて

「お願いします、私の事を——いえ、私に似ているという人の事を教えてくれませんか」

また言葉を続けるので口をパクパクと金魚の様に開閉するだけで終わる。

「で、でも私、あんまり知らな——」

魔白の必死な姿に戸惑うハイリスの声は喉に詰まった様に途中で止まる。

「どうしたの魔白ちゃん!？」

突然、ベッドに手をついていた魔白がヨロヨロとおぼつかない足取りで少し遠ざかったかと思うと膝が砕けた様に崩れ、お腹を押さえて消え入る様な呻き声を出し、玉の様な汗を浮かべ苦しみだしたのだ。

様子がおかしい魔白に慌てて近付こうとするハイリスだがガチャツと身体に付けられた鎖がその邪魔をする。

——ぱたっぱた。雫が床を叩く小さな音が響き、魔白を見ると鼻を押さえてそこから溢れる赤い液体がやけに際立って見えていた、彼女が白すぎるせいだろう……赤は彼女の白い服や白い足に跡を残す、やけに生々しくハイリスには見えた。

「うつ……ぐ……!ああああ……!」

次は左足。彼女は左足の大腿部辺りを押さえより一層痛みで顔を歪める。彼女の異変に鎖に囚われているハイリスは苛立ちで舌打ちを一度し、おもむろに右人差し指の腹を手錠の尖った部分で切り裂く。

その嫌な感触に少し顔が歪むが、彼女はその行為により出た血を

指先まで垂らすと両足と左手の手錠にその血で素早く古代文字を何個か刻み、口を開いた。

「バーブ
ン
砕！」

ゴバツ！と古代文字が発光し、そこから衝撃波が生じて手錠を砕く。これはハイリスが魔本無しに使える数少ない魔法の一つだ。

残る右手の手錠も鎖部分に文字を刻み破壊して、ハイリスは魔白に駆け寄る。

「だ、大丈夫……です…」

「どこがっ！……病院につ、治療しなきゃ」

髪の毛は汗で顔に張り付いていて、その顔は更に真っ白に。小刻みに痙攣している左足にハイリスは触れようとして右手の手錠と鎖が重く邪魔だなと内心舌打ちをする、だが魔白がそれどころではないので今は彼女を医療機関に連れていく事が重要だ。

「ほんとに、大丈夫ですから……本来なら、ここまで痛まないはずなんです、クロちゃんの手錠は何か特殊な武器を使っているのかな……」

もはや最後の方はハイリスにも聞き取れない程の音量、それを不審に思いハイリスは更に慌てふためく。

そっ……と、魔白はハイリスの手に触れた。

「もう、本当に大丈夫です。……手首、ひどい事になっています……私のせいで…」

先程の『^{バーブ}砕』により、ハイリスの手首は傷付いていた、足首の方も同じだ。砕いた時の衝撃と砕けた破片による物だろう、魔白がそこに触れた瞬間ハイリスは電気が走ったかの様に身体をビクツと跳ねさせる。

「ごめんなさい……っ」

「……目の前で人が苦しんでいるのに助けようとしらない理由は無いですよ？」

あまりにも申し訳無さそうに言う魔白に、少し笑みを浮かべてハイリスは答えた。そのハイリスの笑みに、魔白は痛みで顔が歪みながらもぎこちない笑みを返す。

未だに魔白の苦しみは続いていて、ハイリスはせめてこの家の人を呼ばうと立ち上がり

「シロは……大丈夫、なはず……これに斬られても……死なない」

気付かなかった、魔白の様子に気が回りすぎていたせいか部屋の入り口に人が立っている事に全く気付かなかった。

バツと、思わずその声のした方を見て、ハイリスは文字通り、固まった。

その部屋の入り口に立っていたのが全身真っ黒だったから……とかでなく、見知った四角形の剣を引きずる様に持っていたから……でもない。というかその剣を持っている事に、ハイリスは気付いていない。

「……？ぼくの……顔に、何か？」

その、黒い、黒い少女は――黒髪と黒目と黒い服以外、それ以外の“造形”が……ハイリスの足元でうずくまる白い少女と、宿屋でみた写真の少女と……瓜二つだったのだ。

六話、白黒の連鎖

人の全く居ない路地を抜けて、ガラス・ディアモールの寂れた一角をドイルは歩いていった。そこは廃墟と例えるのが相応しく、ここだけは戦争が終わって間もないかの様な印象を見た者に与える。

——ビュツ、と。風が強引に切り裂かれる音が静かに響く、そして同時にドイルが今まで立っていた所に大きな斧が突き刺さり、それは破壊音と共に地面を砕いた。

その一撃を右へステップして避けたドイルは、大斧を振り下ろした二メートル強程の大男に向けて剣を抜こうとして気付く

(やべっ今、剣ないんだっ)

背中にあるのは収める物を無くした四角形の鞘だけ。大男はその一撃の後、薙ぎ払おうと丸太よりも太い腕を振り回す。

そんな大振りな攻撃に易々と当たるわけがなく、ドイルは大男から距離を多く取った。

『縛』

『封』

そのドイルを挟む様にして突然現れた二人の細身の男が両手をかざす。すると挟まれていたドイルは光で出来た紐の様な物に囚われ動きを封じられてしまう。

「——ッチィ！」

大きくドイルは舌打ちをして前を睨む、ゆつくりと、先程の大男が近付いてきていた。その大男も、ドイルを囚える二人の男も、顔には表情が無く目は不気味に光っている。

「ガアア！」

身動きの取れないドイルに対し、無慈悲にも大斧は振り下ろされた――が、その刃を止めたのは、他でも無いドイル自身であった。マテリアル・ギア。ドイルは自分にしか聞こえない声でそう呟く。表情が無かった男達も、拘束を力付くで破り更には斧を素手で掴み止めたドイルに驚愕して顔を歪めた様だった。

バゴツ…と、ドイルが大男の太い腕を蹴り上げるとそんな間拔けな音と同時に九の字に腕が曲がる。呻く暇も与えず斧を奪い腹を殴り付け数メートル吹き飛ばし、自分を拘束していた二人組は振り返りざまに斧で殴り付けた。

刃の付いていない側で殴ったとは言え、ばきつ、みしつ、と何かが砕けながら二人の身体はゴム毬の様に跳ね転がる。

そうして全員を戦闘不能にするとすぐにドイルはマテリアル・ギアを解除した、ガクンと膝を付き呼吸を整え

(……追い詰められるとすぐ“コレ”使っちゃう癖直さなきゃな)

そんな事をぼんやり考えながら、何故自分がこの三人に襲われる事になったのかを思い出す。

真つ黒な少女黒虚との戦いは激化し、何度か交差した時だった。

「くそつたれ！」

最初に腹、次に鼻つ柱に膝を入れ、左足大腿部も確実に斬ったはず。しかしまるで何も無かったかの様に振る舞う黒虚にすっかりドイルは参っていた。

そう言っている間にも黒虚は両手の爪を煌めかせて接近してくる。

「ばいば……い」

ガキン！派手に金属音が響くと黒虚とドイルの双方から舌打ちが鳴る。余った片方の爪で黒虚は追撃するがドイルはそれを腕を捻る事により剣の柄で防いだ。

一瞬。硬直状態になり、その次の瞬間には黒虚の顔をドイルの蹴りが捉えていた。

「っ……！はあ！？」

その蹴りは黒虚の顔に掛かっていた黒い布をかすっただけだったがドイルは黒いベールの下に隠されていた意外な素顔を見て力が抜けてしまう。それを黒虚が見逃すわけが無く、ドイルの剣を両手の爪で絡めとって後ろに投げ捨てた。

「しまっ……！」

ドスッ！間髪入れずドイルは腹に蹴りを食らう。

ドイルは少し呻くが齒を食い縛り、その場から離れ黒虚を睨み口を開く。

「お前、なんて名前だよ」

「……黒虚。^{くろこ}色の……黒に、虚無……の虚……。」

黒目に黒い眉、唇はさすがに普通だが……ドイルが油断してしまったのは黒虚、彼女が全体的に黒いという事を除けば自身が今利用している宿屋の女主人“エマ”の一人娘と瓜二つだったからだ。写真と違い黒い方は無表情だが、それでも一目瞭然であった。

「マコ、——じゃないのか？」

その単語に、無表情だった黒虚に変化が表れた。眉をひそめただけだったが何かを考えている様な……何かを思い出している様な素振りを見せる。

「……なん……か、響きが……マコ。か、なんかいいな……」

懐かそうに、頬を緩める黒虚。そんな彼女を不思議がつてドイルは何も出来ない、先程まで戦っていたのが嘘の様な空気になってしまっていたからだ。

そんな時だ、何も無い空間の端の端。そこには階段があったらしく、地下らしき所から大きな体躯の男がゆらりゆらりとこちらに歩いてきていた。その男の後ろから風のように二つの影が黒虚のすぐ近くまで来て口を開く。

「「黒虚様。^{マスター}主人からの命令により、侵入者の排除は私達『スリーエフ』が担当します。黒虚様は儀式に備えてください」」

「……そ。……シロの……所に行こう……」

二人の男が無表情にそれだけ伝えると、黒虚の爪は溶ける様に液状になり今度は逆にワンピースの袖に潜っていた。ふらふらとドイルの剣を拾い、三人の男が出て来た階段に向かって黒虚は歩いていく。

「つて待て！俺の剣！」

今更気付いたドイルは走り出そうとするがすぐ側に二人の細身な男が来ていた、殺気を感じそちらを見るとドイルに対して手をかざしている。

「「ここで暴れられるのはとても困る。儀式に支障がでるかも知れないのでな」」

「圧」

「排」

ゴッ！！と謎の斥力せきりょくがドイルの身体を襲い、空気の壁に押されるかのようにドイルは後ろに飛ばされていく。後ろを見れば、先程の大男がドアを開いていた。

そこから屋敷の外に飛ばされ、しばらくいった所で突然自身にかつていた力が無くなり自然に下に落ちる。

三人が追ってきているのに気付くのにあまり時間が必要としなかった。

街中で戦うわけにも行かないだろうと、人のおらぬ所へ向かい――
―今に至る。

「ウグアア！」

細身の男達は完全に沈黙した様だが大男はまだ動けるらしい、腹が異様に凹んでいるがしつかりと地面に立つ。

一方、マテリアル・ギアにより跪いていたドイルだが発動時間が五秒程だったのが幸いしてか調子は戻っていた。

「アウオアア！」

ドン！猪突猛進してきた大男はその岩の様な拳を振るってくる、地面に当たれば地鳴りと共に地面が陥没する。

だが、そんな一撃を持っても、当たらなければ意味は無い。ドイルはその拳を易々と避けて腕を踏み台にして顔面に足を叩き込んだ、それによりよろめいた大男の足元に着地すると同時に足を払う。いとも容易く大男は地面に倒れ伏せ、大男の体重により砂ぼこりが舞う中ドイルはとどめと言わんばかりに腹の拳型に凹んだ部分を蹴り上げた。

「グギヤアアア！」

「ふん、俺は剣とマテリアル・ギアが無くてもお前一人くらい余裕で倒せんだよ」

先程マテリアル・ギアを使ってしまった自分に言い訳する様にドイルはそう言つて口からヨダレか胃液か分からない様な液体を垂らす大男を一瞥し領主の屋敷がある方角に歩き出す。

「くそつ、時間は食っちゃまうし、剣はとられちまうし、散々だよ」

「あ、あわわわっ、ぶ、分身っ!？」

「…落ち着け……ハイリス」

魔白と黒虚を忙しく交互にブンブンと首を振りながら慌てふためくハイリスに黒虚は無表情かつ冷静に言い放つ。

「って、何で私の名前知ってるの？」

ぴたっ、と馬鹿みたいな動きを止め、さりげなくハイリスの名前を呼んだ黒虚にそう聞く。一瞬、沈黙が部屋を支配して。

「……^{マスター}主人が……言ってた」

ぼそりと小さく呟き手に持っていたドイルの剣を入り口近くに立て掛けて、たったたつと小走りに

何をしてるんだらう?というハイリスの疑問はすぐに解けた。

「げふっ!」

黒虚は体当たりをしてきた、ハイリスに。乙女にあるまじき呻き声で、体当たりの勢いで黒虚と共にベッドに突っ込む。一連の動作の時、黒虚は無表情であった。

(え……何この急展開……)

このような凶行を微塵にも予測していなかったのでハイリスはベッドに仰向けになったままりアクションに困っていた、黒虚はその間

も無表情でただハイリスのお腹辺りにしがみついている。

「ク、クロちゃん……一体何を」

意外にも沈黙を破ったのは今も尚苦しんでいる魔白だった、少しは痛みがマシになったのか微笑を浮かべている。

魔白の言葉に首だけぐりんと回転させ、魔白の方を見た黒虚は無表情かつ冷静に

「シロの……独占は許さない」

大真面目に言った。

「うえ？ごめんなさい」

「……分かれば……よし」

咄嗟にハイリスが謝るとすんなりと離れ、立ち上がる黒虚。変わった子だな、と今更ながら思う。

黒虚は立ち上がるとごそごそとワンピースの胸元に手を突っ込み皮張りの本を取り出しハイリスの方へ投げ渡す、ハイリスの魔本だった。ドイルがベルトに挟んでいたものの戦いの最中に落としてしまい、それに気付かずというよりすっかり忘れていた物を黒虚が拾い上げたのだ。

「……多分、ハイリスの……か？……なんか拾った。……名前、書いてあるし」

文脈的によく分からないがとりあえず

「ありがとう」

お礼を言っておいた、というより“武器”を渡していいのだろうか？一応捕らわれの身の様なんだが……

「手首……治療魔法…使えるか？」

ああそういう事、なんだ良い子じゃん。この程度の軽傷ならば治せるので魔本を開き、傷を癒した。

「なんかオセロみたいだね、あなた達二人」

「オ……セロ？何だそれは……」

盤上ゲームだよ、と適当に答える。多分あっていると思う。

今現在、魔白は痛みが退かない為ベッドで休んでおりお腹を鳴らしたハイリスと黒虚は部屋にあった机を囲んでパンを食べていた。パンは黒虚が部屋の外に出て何処から持ってきた物であり、ハイリスもどさくさに紛れて部屋の外に出ようとしたが『ハイリス…は、ダメ……主人の…命令』と特徴的なローテンション口調で黒虚が言うので断念する。

入り口辺りにドイルの剣があり、何でこんな所にあるんだ？と内心不思議でしうがなかったが今は気にしない事にした。

「ねえ、私って何で誘拐されてるの？」

魔本も手元にあるのにハイリスか本気で逃げようとしなのは、この白黒の少女達が気になるからである。エマの娘に瓜二つという

のもあるし、魔白と黒虚二人ともが半月前に“生まれた”と言うからだ。怪しさ満点である。

「……主人が、必要……って。……魔法使い、久々……だから、喜んでた」

疑問符。いまいち言っている事が伝わらないな……とそこまで考えて思いした、そういえば『神隠し』は魔法に携わる人を優先して起こっていたのだっけ。

「えーと、主人さんは人をさらって何をしているの？」

「儀式」

即答。

「なんか……大魔法を、主人が手に入れる………為の。あ、それで……ぼく達は生まれた」

大魔法？生まれた？何で？

疑問はまるで枯れる事を知らない泉の様に、謎は底なし沼の様に…

「ぼく達は……異例なんだ………って」

「——異例？……あなた達以外の人達はどうなったの？」

突然深刻そうな顔をするハイリスを、黒虚は不思議そうに見る。

「……消えた」

その、一言は、ハイリスの心に重く響いた。突然口を開くのが、難しくなった様にハイリスは聞く。

「その、大魔法……って、何？」

その問いに、黒虚は数秒硬直して何かを思い出そうとしていた。そして思い出したのか、それを、口にする。

「……『まてんれつこう魔天裂光』、だった……気がする」

まさか、そんな答えが返ってくるなんて……。ハイリスは手に持っていたパンを、自分が気付かぬ間に自分の膝へと落としていた。

——魔天裂光。かつて人々からそう呼ばれ——棄てられた十ある魔法。いつ生まれたのかは分からず、遙か昔から伝説として伝えられていた。

禁じられた魔法——禁法でさえが可愛く見えると言われる程の力を有し、かの大戦下においてたった一つの魔天裂光で戦局が大きく変わったと言う。

だがそんな魔法をまともに使える者は皆無に等しく、かつて七大魔術士と呼ばれていた七人しかそれを扱えず、その魔術士達はまさに決戦兵器であった。

十年前の世界大戦が終結したのも、その七大魔術士達の力だと言われている。

大戦が終わり、棄てられたはずの魔法が、こんな所で——ハイリスは、黒虚の言っている事が正しいならばそれは大変な事だ。と、息を呑む。

「……そ、んな、あれは簡単に人が扱える物じゃ——七大魔術士でさえ、あれのせいで命を落としたのに……」

「そう、そんな魔法だからこそ私は求めるのだ」

愕然と、声を震わせるハイリスに言葉を返したのは聞いた事の無いようで……聞いた事のある声だった。

バツと突然現れた者を見る為にハイリスは部屋の入り口を見る、そこに立っていた人物を見てハイリスは少し驚きながらも内心どこか納得していた。

「あれは、人にたどり着けない領域にあるもの。自分の物に、なるわけがないっ」

眉を寄せ、噛み付く様に口調を強めるハイリス。視線の先には、先日宿を紹介してくれた初老の紳士が立っていた。

七話、魔天裂光エンジェル・ダスト

「十ある『魔天裂光』の中でも、私が所有しているものは性質、発動時の形体から見てまさしく『魔天裂光』と呼ぶに相応しい」

そう言つて、紳士は懷から分厚い紙の束を取り出した。それをヒラヒラとさせながら続ける。

「魔天裂光『エンジェル・ダスト』、君も魔法使いの端くれなら聞いたことくらいはあるのではないか？」

聞いたことない……わけが無い。大戦が終結してから十年程しか経っていないのだ、魔法としては最強レベルの兵器の名を……聞いたことが無いはずが無かった。

紳士が手に持つ紙の束には、ハイリスから覗ける部分だけでもぎつしりと図形やら文字がひしめいている。

「この紙の束は『エンジェル・ダスト』を発動させる為の魔法陣の情報……それと人体に禁法として刻む為の魔法陣——様々な事柄が積み重なりこれだけの量になった——これを手に入れてから三ヶ月かけてようやく形にできたのだよ、それが一年前」

「何？……自慢がしたいだけ？」

熱く饒舌に語る紳士に向かいピシヤリとハイリスが言い放つと、紳士は少し驚いた様に

「自慢……？ああすまない、魔法について語れる相手は久方ぶりだ

ね。ついつい熱くなってしまった」

ふふ、と自分自身を笑い紳士はこちらへ歩を進める。近付く紳士に言い知れぬ不安をハイリスは感じ、片手に持った魔本を構えた。その行為に動いたのは、横に立っていた黒虚だった。一瞬の内に魔本を弾き飛ばされ、しまった！と慌てて黒虚から距離を取ろうとして

『留めよ、地を這う鎖』

紳士がそう唱えた瞬間手に持つ紙の束の一枚が発光し、地面から幾つもの鎖が飛び出てハイリスの身体に絡まりバランスを崩した。地面に倒れ伏せたハイリスはキツと鋭い眼光で紳士を睨んだがその視線を無視して紳士は魔白と黒虚に歩み寄る。

「儀式を始めるぞ、その娘を連れて部屋を出なさい」

そう言つて、ドアを開け放したまま紳士は部屋を出た。

魔白はまだ少しダメージがあるのかふらつきながらそれに続く。黒虚はと言うとハイリスの所へ向かい、どこにそんな力があるのだろうかと見た者に思わせるような細腕でハイリスを肩で担いで二人を追いかける。

ハイリスを担いだ黒虚が入り口辺りまでたどり着くと、ボソッと小さくハイリスが呟いた。

「ごめんね」

その言葉を黒虚が不思議に思ったと同時に

肩からハイリスの体重が消え去った。

「……え…？」

ガシャン！派手に金属音が鳴りハイリスは入り口のすぐ横の地面に文字通り落ちる。身体をよじって黒虚の腕と肩から脱出していたのだ。

「……抵抗、しても……無」

無駄、と言おうとした所で

手が黒虚の首元に伸び、その手は服を掴むと足を払うと同時に思いつきり下に引く。べちゃっと黒虚の身体が地面に叩き付けられた。

「ごめんね」

もう一度、ハイリスはそう言って、ドイルの剣を左手で持ち部屋を飛び出した。

ハイリスの身体を拘束していた鎖は複雑に絡み合っていたわけではなく、ただ単純に肩下あたりから両手ごと、そして足首に少々巻き付いていただけだった。

ハイリスは入り口近くに立ててあった『人を斬れない』ドイルの剣の上に思い切り落ちて鎖を切り、解放された両手で足の鎖も切ったのだ。

倒れた際に刃が突き立てられた右腕は結構痛むが予想していたよりは上手くいったのでそれだけの痛みで済んだと言える。

それにしても、服は切れるだなんて、知っていたが少しショック。

「……ハイリス…っ！」

後ろからすぐに黒虚は追いかけてきたが、ハイリスは思わずそんな事がどうでも良くなるくらい

目の前の『儀式場』に見とれていた。

大きな魔法陣が地面に刻まれていて、その中心に大きな魔法陣で出来た“天秤”が形成されていく。

紳士の詠唱に答える様に、天井に刻まれた魔法陣と地面の魔法陣が共鳴するかの如く光を明滅させる。すると魔法陣が上下から新たに湧き出てくるとそれが“天秤”を形成したのだ。

「これ……は」

天秤が完成し、その片方の魔法陣……秤に紳士は乗る。

ふと、ハイリスの視線がとある部分に集中する。天井と床の魔法陣を繋ぐ小さな魔法陣が連なった天秤の柱があり、その中心部分は少し膨れ上がっていてそこには

人の白骨が、全身まるまる浮いている。

その白骨の心臓部分には神々しい光の玉が。

「あれが、エンジェル・ダスト……」

ぼけーっと呆けるハイリスに、黒虚は何を思ったのか追撃を止めた。

「さあ、始めるとしようか。今回は黒虚、魔白も儀式の中に取り入れる——お前達にはエンジェル・ダスト『本体』と『不要部分』を

分ける際に発生する弊害を減らすパイプ役を担ってもらっ」

びきびきびき！耳障りな音が響き、黒虚と魔白は天秤の下辺りにある魔法陣に包まれ柱に固定される。

それと同時に見えない力に引き寄せられて、ハイリスはもう片方の秤へ強引に載せられた。

え？と口にする間も与えてもらえず、魔法陣の光は強さを増す。

「今度こそ、今度こそ……っ！」

両手を広げ、顔を不気味に歪ませ悲痛に叫ぶ紳士——もはや紳士と呼ぶに値しないが、彼がまた詠唱をすれば天秤はゆっくり傾き……は上がりを繰り返し回数を重ねる事にスピードを増していく、魔法陣の光もまた、強さを増していく。

「……ねえ！魔白と黒虚は……っ！あの宿屋の娘なのっ！？」

ガクンガクンと揺れる秤の上でハイリスは叫ぶ、だが詠唱を続ける彼には聞こえていないのだろうか？返事は無かった。

キイイイン！甲高い、耳鳴りの様な音が響く。天秤は秤同士がまた水平になった所で激しい動きを止めた。

耳鳴りの余韻が残る中、空間を妙な緊張感が襲う。

変化があった。

天秤の柱に浮いていた白骨から神々しく輝く心臓部分が分離し、白骨と心臓部分両方共が柱に溶け込んだ。

その変化にハイリスは驚く、それはもちろんの事、口を呆然と開

いた男は今にも叫びだしそうなくらい顔を輝かせていく。

「ああ、そうだ。質問に答えてやろう」

突然、男が口を開いた。

「魔白と黒虚はな、“マコ”という少女で儀式をした際に……本体は消滅したが、新たに生まれた分身だよ。君の察し通り……私が紹介した宿屋の娘のね」

あんたっ……！なんて事を——そう言おうとして、怒りで血が沸き立ちそうになった時。

何も言わず、ハイリスは動きを止めた。

「……つく！」

一瞬、空間を沈黙が支配した

ハイリスは突然右眼に鋭い痛みを感じ、手で押さえると同時に呻く。沈黙を割いたのはその呻き声だった。

「がああああぐああ！！！」

痛みは鋭く、強く、脳髓が破壊されると勘違いするくらい右眼を襲う。思わず膝を突き、腰を丸め痛みに耐え——れるレベルでは無かった、喉が焼けつくくらい叫び、痛みに身体をよじらせる。

軽く過呼吸になりながらハイリスは腰を一層丸め、ピタリと何かに気付いて動きを止めた。

どろりとした物が手に触れる、ぽたりと指の隙間から液体が落ちる。

え？は？と口からはそんな言葉しか紡ぎだされない、理解が追い付かない。

手をゆつくりと右眼から離していく、ぼちゃりと間抜けな音と共に赤い肉塊が秤の上に落ちる。

今度は絶句した。動きを数瞬止め、恐る恐ると手を震わせながら右眼に触れ——ようとした先には何もなく、ただ穴が空いていた。

しばらく言葉と思考を失い、ようやく理解が追い付いた。
納得はできなかった。

「……眼が……っ！溶け……！」

気が狂いそうになって、ハイリスは腰を抜かし情けなくも這いずりながら肉塊から離れる、怖かった。自分の身体の一部だったはずなのに、どうしようもなく異質な物に見えたからだ。

「ふふ……ははは」

いつの間にか天秤は消えていて、ハイリスは地面にいた。雨に打たれたみたいに汗が噴き出しており、顔は恐怖戸惑い不安といった様々な感情を写しだしている。

そんな状態でも、その笑い声を聞いていた。

「成功……？力が、湧いてくる、本当に湧いてくるようだ……」

ポツリと、奇妙なくらい静寂に包まれた空間にそんな呟きが響く。反対側に立っていた男は、ハイリスのように苦しみに悶える事も

無い様だ、狂った笑顔で自分に酔っている。

「くそ……お」

怒りに、沸き立つ怒りに引かれる様にハイリスは立ち上がった。今は無い右眼を押さえながら、彼女は左眼で睨みつける。

右眼を覆う、指の隙間から、光が漏れていた。彼女の右眉が、震えるように毛先から小さな光を放つ。

「……………そうか、不要部分にも力があるのか」

そのハイリスから出る小さな光を見てしばらく呆然としていた男だったが、納得したように頷いてハイリスから視線を離す。

男が次に見たのは、放心している魔白と黒虚だった。先程の男の言葉が、彼女達に響いている様だ。

「主人……？私達は、一体……？」

混乱しているのだろう、二人共男を見る焦点が合っていないかった。それも仕方ないか、と男は考える。自分が何なのかを知らずに過ごしてきて、気になって主人に聞けば満足いく答えはもらえなかった。だが、突然自分達はただの残りカスにすぎないと知ってしまったのだ、マコの……姿形を真似た偽者だと。

いや、そこまで考えられないか。せいぜい自分が何者でも無い事を知り、呆然としているだけ……と、そこまで思考をして

横から振るわれた剣に薙ぎ飛ばされた。

「まったく、いきなり館中の魔法陣が光り出したと思ったら——何を

地下でこそしてんだよ」

「つーかよ、そう続けて

「人の旅仲間は何してくれてんだ糞野郎」

すまん、地下への入り口見つけるのに時間食っちゃった。笑いな
がらドイルはハイリスに言う。

「ばか、おっそいつつの」

それに、答える際にハイリスは痛みで歪んでいた頬を緩めた。押
さえる手の隙間から光は尚も漏れ続ける。

＋＋＋

ドイルが異変に気付いたのは領主の館に再び侵入しようとした時
だった、それはもう館が光ったとしか言い様が無い。

なんだ一体と慌てて館に入れば魔法陣という魔法陣が光っている
始末、床の巨大魔法陣なんか歯車のように様々な部位が回転してい
た。

とりあえず地下に行こうと入り口を探したが、結局光が消えるま
で見つけられなかったのだ。そのせいか、もう色々な事が終わって
しまったらしい。

ドイルが地下にたどり着いた頃には既にハイリスは苦しんでいた。

「全く野蛮だねえ」

「……鉄で出来てんの？」

ドイルの不意打ちをモロに頭で受けて領主は平然と立ち上がる。そういえばやたら硬かったなあいつ、とドイルはまた剣を構えた。

動いたのは、黒虚。

「てめっ！」

いつの間にか爪を形成しており、それを振るって襲いかかる黒虚。剣で防御して反撃をしようとするが、黒虚の顔を見て少し躊躇。というか、こいつ攻撃効かないんだった。

「クロちゃん！」

その声に黒虚は動きを止める。つばぜり合いの様な状況で黒虚は声のした方へ顔を向け、戸惑いの表情を浮かべた。

なんとなく黒虚につられて声の主を見たドイルも戸惑いの表情を浮かべる。

「……もう一人いる……」

「魔白、何故止めた？」

ドイルの眩きを無視して、領主が突然口を開いた。その言葉に魔白は目を逸らして答えない。

代わりに口を開いたのはハイリスだった。

「あなたが、信じれないからじゃない？

だって、あの子達も……結局あなたの為の生け贄にすぎなかったのでしょう？」

右眼を押さえながら、汗をびっしょりとかきながら。ハイリスはしっかりとした口調で続ける。

その左の瞳は怒りの炎を写しだしている。

「彼女達は、記憶も何もないから今まではあなたを信じるしかなかった」

痛みで震えていた足はしっかりと地面を踏みしめる。

「……私は助けてあげたのだぞ？記憶が無く、どう生きればいいかわからないこの二人を」

「そうだったのはあなたのせいでしょ！？……っ自分が力を得たいが為に何人の人を犠牲にしたっての！？」

一歩、その足を進め、強い意志を宿した瞳は領主を捉える。

「何かを得る為には犠牲はつきものだ」

「私は認めない！そんなのっ……あなたにとって都合のいい戯れ言だ！」

指の隙間から漏れる光は、強さを、増す。

「図に乗るなよ！まだ私の半分も生きていない分際で私に説教をす

る気か！」

ぶあつと、魔力の風が領主の身体から吹き出した。それは領主の右手に集まり、今にも放出されようとしたその時。

「力を得る為に他人を犠牲にしているくせに――。その力を他人に誇れると思うなっ！」

ハイリスの激昂と共に、右眼から神々しく光が溢れる様に湧いて出た。

ゴツ！と光の風が吹き荒れて、周りを纏っていた魔力ごと領主を吹き飛ばし壁に叩きつける。

叩きつけられた領主は

「ぐお……！何故っ」と唾を撒き散らしながら呻く。

そんな領主に影がかかる、思わず上を見上げ

「ハイリスは間違っていないと思うぜ」

今にも剣を振り下とそうとする、ドイルを見た。

「つてわけで、おら！」

バガン！と派手な音が鳴り、今度は確実に頭を斬った。

先程は斬れなかったが、マテリアル・ギアを発動した状態だったので斬れたのだろう。それでも領主の身体は硬く、手は少しビリビリと痺れていた。

ゴシャツ、と人の身とは思えない音を立てて崩れ落ちる領主を背にドイルはハイリスを見る

（マテリアル・ギアが勝手に発動した……？それも、ハイリスの右眼が輝いた瞬間に——まるで）

まるで——ハイリスから放たれた神々しい光に“共鳴”したように。

右の眉は毛先から細かい光の粒子を散らし、神々しい金に。

右の眼は瞳孔の輪郭に沿う様にして白い眼の中心に金の輪を形成し、それは未だ神々しい光を淡く放つ。

右の眉はまるで天使の羽の様に。

右の瞳はまるで天使の輪の様に。

「ハイリス、お前……眼……」

「え？あれ？……見える……？」

ドイルが言うと、ようやく気付いた様にハイリスは自分の右眼に触れる。瞼の上から触れてみて、ちゃんと中身があるのを確かめて……感激に顔を輝かせながらプニプニと感触も確かめ、左眼を押さえて右眼がちゃんと見えているかも確かめて。

「おおおお！何でっ！？確かにさっき溶け……」

ギョロリと右眼が突然ハイリスの意識無しに動き、“ソレ”を捉えた。そして視界に、身体を強張らせるドイルと黒虚を見る……今

向いている方向的には真っ正面にドイル、真後ろに黒虚達が位置しているのだがハイリスは何故かドイルと黒虚・魔白を同時に視界に入れていた。

今はそんなあり得ない事にさえ気が回らなかった、ドイルが剣を構えるのを見てハイリスも身構える。

「うぁオオオがアあ!!」

ビリビリと空気が震えるのを肌で感じ、思わず耳を塞いでいた。それはこの場にいる全員がそうらしく、魔白と黒虚も耳を塞ぎその『音』に耐えていた。

本当ならば『叫び声』だったのだろう、だがすでにそれは声の域を超えていたのだ。

「——っ!!アアアイアア!」

もはや超音波、皆耳を塞ぐ。それでもバキメキシバキヤ!と、耳障りな破壊音が皆には聞こえている。

数秒もせず、声は止んだ。だが、

「なんなんだよっ!一体!」ドイルが叫び

「これが……、エンジェル・ダスト?」ハイリスは呟く

バキバキミシメキ!『ソレ』からは、未だに骨が碎ける様な音が。

その場にいる全員が、耳を塞いでいた手を取り去り目の前で今尚“変形”する『ソレ』を凝視した。

「うおお……！バカな、バカな、バカなあ！」

『ソレ』は領主の声で悲痛に叫ぶ。

元の原型は面影も残っていない。身体中から黒い何かが噴き出してそれが毛皮の様に全身を覆い隠し、骨は太く巨大に狂暴に変化する。

「なんだこれはああ！」

そんな、叫びを最後に、彼は完全に人で無くなった。

バキヤアアア！派手に館は爆発し、ぽつかりと空いたそこからは『黒い何か』が這い出てくる。

体長五メートル程、六本足で地面に這い出たソレは爬虫類の様な真つ黒な体表のソレは元が人間とはとても思えない。

「ガアアア！」

一鳴き。口から噴き出す黒い魔力の波動が街の建物を吹き飛ばす、一撃で半径30メートルほどが瓦礫の山になった。

「なんつーデタラメな」

「なんて事をつ！ドイル、止めるよ！」

黒の化け物に続いて穴から出てきたのは魔白を抱えたハイリスと黒虚を抱えたドイルだった、二人は化け物の足下に立つ。

「……どうやって？」

ズドン！二人に気付いた化け物が六本の内の一本で殴りかかる、一撃で地面は砕け陥没する。

それを難く避けた二人は魔白と黒虚をお互い抱えながら化け物から距離を取る為に走った。

当然、追いかけてくる。

「雲切りでは？」

ハイリスがそう言い、ドイルは一旦黒虚を下ろし思いつきり“雲切り”を放つ。

パキヤアアン！と派手な音が響くが――別段ダメージは無さそうだ。

「おいおい、マテリアル・ギア発動中なんだけど」

背中に冷や汗が流れるのを感じながらドイルは言う、隣のハイリスも絶句しうっかり魔白を落としそうになっている。

そうこうしている内に、黒い化け物に追い付かれてしまった。目の前には蒸気機関車のような息を吐く黒虚よりも真つ黒な生物

それは、領主の声で話しかけてきた。

「何故なんだ、何故。何故、エンジェル・ダストが私の所ではなくお前なんかの所にあるんだっ！」

轟！その叫びと、破壊の波動は同時にハイリスとドイルの元にたどり着く。

八話、貫く光と切り裂く光

―― 苦しい！

―― 出たいよ！暗いよ！

―― ここから出して！

―― 誰か！

―― 誰か助けて！

「うああがアああああ！」

大小様々な、“声”が頭に響いてくる。身体の中から、這い出るように響くその声は

かつて、エンジェル・ダストに飲み込まれた人間達のもの。彼らは肉体も魂も飲まれて今尚苦しんでいる。

その彼らの苦しみを直に感じて一番理解しているのが、皮肉にも彼らをその状況に追い込んだ張本人だった。

―― 何で私が！

―― 何で！

―― もう嫌だよ！

彼らは形を失ったエネルギー体として、常に消費されている。今も、もはや人間の面影が無い領主の身体から湧き出る様に力を放出しているのだ。

それが、
“彼ら”の苦しみ、原因である。

何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で。

「ウーワアあアあア！！」

黒い体表の下から、力と共に、その問いが。

何で私が

何で俺が

彼らは領主の身体に力を与えると同時に苦しみを与える。

チカツ、と。光が見えた。

自分が放った“叫び”を受けて、“消えた”と思ったのに。

黒い衝撃波により陥没し、砂煙が舞っていたそこからその光は姿を現す。

「あれが、不要な部分」を取り除いた、純粋な力……」

それを心の中で呟いたのは自分か、それとも自分の中で蠢く彼らか。

「どうして、私達はこんなに醜いのに——何で、」

何で、あれは、あんなに綺麗なんだっ！

怒りは慟哭として、辺りに振り撒かれる。

＋＋＋

ぶわっと、辺り一面に舞っていた砂煙が晴れる。

光の破片。ひし形の、ガラス片にも似た光が幾つも連なり盾となっていた。

「ハイリス、これは……？」

魔白に黒虚は先程の衝撃波で尻餅をついていた、二人の前に剣を構えていたドイルは思わずそう呟く。

そんな三人を守る様に、片手をかざすハイリスの手の先には、例の光の盾。

「エンジェル・ダスト。これが、本当の姿？」

「エンジェル・ダストだと！？どうゆ……って、んな事言ってる場合じゃねえな」

ゴン！領主の口から黒い衝撃波が噴き出して、こちらに向かってくるのを見てドイルは剣を再び構える。だが、そんなドイルを手でハイリスが静止させた。

ドゥ！と、光の盾が砕け細かいガラス片となり、それらはハイリスの手の動きに合わせて動き出す。

ゴバン！黒の衝撃と光がぶつかり、周囲に余波が吹き乱れ地面を剥がした。

地面が剥がれている間に、ハイリスの姿は消えている。領主がそれに気付き、周りを見渡そうとした時には

『穿て！』

ドドドドドドド！領主の真上から光の矢が雨の様に降り注ぐ！その矢を操るのは空高くで右眼を光らせるハイリス。矢が領主に突き刺さり、その表情が勝ちを確信した様に緩むが

「うアがガアああ！！」

それに対抗する様に領主が叫ぶと、身体中から黒い魔力が大量に噴き出して全方位を破壊し始めた。その攻撃に対応出来なかったのは、空中で重力に引かれるハイリス。

「しまっ！」

「しまったじゃねえ！」

魔力の風が辺りを飲み込み、ハイリスをも飲み込もうとしたがドイルがどこからともなく文字通り飛んできてハイリスを掴み領主の攻撃の当たらない場所に着地する。

「なんで魔天裂光がお前ん所にあんのかはわかんねえけど！エンジンエル・ダストがあつたらあんなの楽に避けれただろ！」

「うっさいな！まだ制御できないのよっ！」

着地早々、口喧嘩を始める二人に何だかんだでドイルに担がれて

いた魔白と黒虚は呆れ気味にため息を吐く。

「つか何でエンジェル・ダストが……」

「あの野郎が自分の物にしようとしてただけど……何故か私の方に本体が来ちゃったみたい」

「そもそもあれは師匠が……つくそ！こんがらがって来た！また後で事情聞かせてもらうからな！」

「ちょ！ドイル！今なんて……！」

ゴバアツ！黒い衝撃波が再び二人を襲い、二人のいた地面にはクレーターができる。

「二人共、離れててね」

魔白と黒虚にそう言つて、ハイリスは領主の方を睨む。するとそんなハイリスに答える様に地面から光の欠片が湧き出して、彼女を守る……まるで翼のように収束する。

ハイリスが戦闘体制を整えると横にドイルが立ち、剣を肩で担ぎながら口を開いた。

「足止め、してくれ」

「何？なんか考えがあんの？……あいつかなり硬いし、本体なんてあるようで無いし」

ハイリスの光の矢をあれだけ食らっておいて、着弾して剥がれた部分はすぐに黒い体表に覆われてしまった。すこしダメージはある

のか動きが鈍くなったが……

（魔天裂光なんだよね？この力）

あの大魔法の力を受けておいてあの程度？まだ制御出来てないのかも知れない、というかそれが一番の理由か。そもそも、この力が魔天裂光エンジェル・ダストでは無いのかも知れない、本末転倒ではあるが。

「その力がエンジェル・ダストなのは多分間違いない。だからその力を使えば……俺が思いつきり必殺技を叩きこめる隙を作れるはず」

「は？」

ゴバア！ドガン！そうこう言っている内にも領主の猛攻は続いている、さっさとやるぞとドイルが言った。

ザッ！と立ち止まり、ドイルは剣を水平に構え

「ほんとはマテリアル・ギアと併用したく無いんだけど……」

そう愚痴を溢して

『己は斬る対象を選ぶ者、今の己が望むは魂をも切り裂く最強の剣！』

ドン！一度大きな波動が響き

『魂狩り式』

ブワツとドイルの剣が淡い光に包まれる。

「よっしゃいくぞ！俺が飛び込む隙を作れ！」

その淡い光に溶け込む様に刀身が、そして全て溶け込むと淡い光で構成された刀身に。

ちよっ！とハイリスが文句を言う暇も与えず走り出すドイル、そのドイルに黒い衝撃波が向けられるが難なく避ける。だが、領主の手数が多い。背中から黒い触手のような棘が何本も飛び出し、ドイルを狙う。

「もう、いきなりすぎるっの」

そう呟いて、ハイリスが指揮者のように手を広げれば光の欠片が領主の周りを取り囲む。

領主の棘が、ドイルに向かおうとした瞬間に、ハイリスは全てを叩き潰す。

光の欠片の側面が、水面のように波立つと

その中心から、光線と言うに相応しい光が一筋。それは全ての光の欠片から射出された。

光線は何度も何度も射ち出され、さすがに耐えきれなくなったのかあれだけ硬かった体表をも砕く。光線は領主の武器となる部分全てを叩き壊し、領主自身をも貫く。

この力の使い方はハイリスが本能的に思いついたものだった、エンジェル・ダストが自分に“思い付かせた”のかどうかは分からないが。

ともかく、この様に使えば先程の“矢”の時みたいに自分の手札

が無くなる事は無い。

「よくやったハイリス！……んじゃあお待ちかねの、必殺技披露だっ！」

ハイリスの助けにより、懷に潜り込んだドイル。すでに、射程距離内だ。

「くウあアあアあ！」

ゴッ！と風を引き裂きながら領主の拳がドイルに向かう、ハイリスはそれを見て思わず表情を強張らせたが当のドイルはニヤリと口角を上げる。

『魂、狩りいつ！』

轟ッ！

ドイルが叫びと共に剣を振るえば、まさに斬撃と言えよう一筋の光が領主の身体を真つ二つに。

その一撃によって切り裂かれた空気……いや、空間から耳を震わせる音が辺りに響く、雲切りとは比べものにならない、正に、一撃必殺。

「別次元、魂をも……つまり、たとえ幽霊だろうがぶった斬る一撃だ。実体ある奴じゃそうそう止められねえ」

「……貴サマ……っ！……何故“アの女”と同じ！」

ブバアツ！領主の身体を半分に分ける断面から、溢れる様に何か得体の知れない物が吹き出だした。

それは、まるでカメラのフィルムのように、幾つもの“情景”が写し出されている。

「これ、記憶？」

領主から吹き出たモノには、様々な風景や人物に状況が写しだされていて、ハイリスはそれを見てすぐに領主の記憶だと気付いた。ふと、ドイルの方を見て。ドイルが領主のとある記憶に釘付けになっているのに気づく。

写し出されているのは、領主と、一人の女性。

『こ、れが、エンジェル・ダスト？……本当に、本物なのか？』

『当然。まあ私が何者なのかを知っていれば、理解が早いと思うのだが』

その女性は領主に何かを渡している、背負っていた大きな棺桶に分厚い紙の束。

エンジェル・ダストか。ハイリスは棺桶を見て天秤の中心で浮かんでいた白骨を思い出していた。

『い、いや。あなたがあの高名な“死神”だという事は承知ですが、しかし……何故私にこれを？』

『お前があの“改造人間スリーエフ”を作った魔法使いと見込んで

だ、戦争当時は随分と活躍したんだろう？禁法博士よ』

その女性は、がちやりと音を鳴らしながら続ける。音の発生源、それは左手で掴み肩に預けている大鎌。まさしく死神に相応しい大鎌。

ドイルの元に近づくが、ドイルはハイリスに気付かず、領主の記憶を凝視している。

『そんなお前にはぴったりだろう？エンジェル・ダストは禁法として身体に刻んでこそ力を発揮する、お前ならば解法できるだろう』

『しかしだな……魔天裂光に人間の身体は耐えられん』

『エンジェル・ダストの力の副作用、それを無くす魔法を開発したと言ったら？』

『な……』

パアアン！

んなっ！と隣でドイルが叫ぶのを聞く、理由は領主の身体が記憶の触手ごとチリになったからだ。

さらさらさら、と。砂が零れるような音を耳にしながら、ハイリスは領主の身体が黒い砂に変わるのを見る。彼の身体は例外無く全てチリになった。

「なんで……」

ぼそっ、とドイルが口にする。

「なんで……『師匠』が——」

それってどうゆう意味？ハイリスはそう聞こうとして、思い留まる。ドイルが、すまなさそうな顔をしてこちらを見てきたからだ。

「ハイリス、俺は……エンジェル・ダストを戦争後に保護していた人を知っている」

「ドイル、その人って……ドイルの……」

そこまで言っつて、ハイリスは喉に何かがつまったように言葉を区切った。

目の前ですまなさそうに口を開いていたドイルが、突然糸が切れた人形のように地面に崩れ落ちたからだ。

「ドイルっ！」

慌てて起こすと、意識はあるが息絶え絶えで汗をびっしょりとかいている。

一体どうしたの、そう口にしようとして

「ぐ、副……作用だ」

ドイルに先を越されて喉で止まる。

ドイルはハイリスの肩を掴む様にして上体を起こすと、うぎっと全身を襲った激痛に一度身体を震わせた。

「これが、俺の、マテリアル・ギアの副作用、」

びき、みし。身体が軋む度に呻き声を食い縛った歯からドイルは

漏らす。

「そ、そうだ！前から聞こうと思ってたんだけど、何でドイルは禁法を？危険なの……に」

「気付い、たかよ？」

ハイリスは自分の台詞でようやく気付く。

「お前も、禁法を……、しかも強烈な奴だつ。禁法はその力が強ければ強い程、それに見合った代償が、いる」

そつと、右眼に触れて、汗を一筋垂らした。
びきつとドイルの身体に不自然に力が入る。

「俺の代償は痛……み……」

がくん、とドイルは脱力し、地面に再び崩れ落ちた。
次に、苦しみで呻き声を上げるのは

「いぎつ！がああつ！」

当然ハイリスだった。

ドイルと同様、痛みをもって副作用を与えられたハイリスは、右眼の異様に広がった視界が元に戻るのを感じ

あまりの激痛に、身体をよじらせ、いつしか視界は暗転していった。

終話、形の違う幸せ

瞼を開けると、少し見覚えのある天井が目に入った。

「いつつ…」

上体を起こそうとすると、身体が嫌に軋んで痛みを訴える。それでも筋肉痛にも似たその痛みに耐えて上半身だけを起こして周りを見渡した。

「宿屋？」

呼吸をすると、やけに胸元がベタつく。いや、よく確かめてみると全身がベタベタする事に気付いた、汗だろう。

前髪もやたら引っ付いて気持ち悪い、身体が汗臭い。お風呂、入りたいな。

汗を吸って濡れた髪の毛が額に引っ付いている不愉快な状態に嫌気が差して、前髪を上げた時に手に変な感触が……

（あり？何だろこれ）

自分の顔の、右側。何て言うか布の様な……絶対に皮膚とは違う物がある。

（……？）

おかしいな。そう思い右眼を手で塞いだりしてみたが、手で防ぐ

と当然見えない。視力には異常は無い。
が、その眼の上に何かが……確実に何かがある。具体的に言うと、
触感的に上質な布。

立ち上がり、お手洗いに向かう。そこには鏡があるからだ。

「な、ナニコレっ!？」

鏡に写る自分を見て思わずデカい声で叫ぶ。少し大きい瞳、髪と同じ色の眉、というか少し童顔、そして短めの桃髪、ここまでは今まで生きてきて慣れ親しんだ自分の顔。

だが、だが。

なんだこの、顔の三分の一くらい隠れるような黒い眼帯は。てか、むしろ何で気付かなかったんだ私？

(あ、右眼が普通に見えてるからか)

ああ成る程。と一人納得……？

(そうゆう問題じゃないだろ……私よ)

「ハイリスちゃん？」

びくっ!とお手洗いで一人自分の顔を見つめていたハイリスは突然聞こえたその声に驚く。

声が聞こえてきたのは部屋の中からで(客室にはトイレが付いている)、ハイリスはトイレの扉を開いて顔を覗かせた。

「ああ!良かった……目、覚めたみたいね」

扉を開く音に反応して、こちらを見たエマが心底ホツとした様な顔でそう言う。その顔を見てどこか心が暖かくなり、自然と頬が緩んだ。

「三日も寝込んでたんだ、汗気持ち悪いだろう？風呂へ……」

「み、三日あ!？」

大口開いてエマに詰め寄るハイリス。エマの言葉を遮ったハイリスの大声を聞き付けてか、どたどたと部屋に向かって慌ただしく誰かが走ってくる。

がちやつ、ドアが開く音。思わずハイリスがそちらを見ると、そこに立っていたのは意外な人物だった。

「……起き……たか、ハイリス……」

「く、黒っ、黒虚ちゃん？」

ドアの所で突っ立っている黒虚を見て、ちらりとエマを見るハイリス。

ずかずかずかと黒虚はやけに機械的に部屋に入ってきて、ハイリスの目の前に立つ。

「……これ」

そう小さく言って、黒虚はおもむろに右手を突き出してきた。右手に持つのは、すこし汚れた皮張りの魔本。

「あ」

ぐい、と魔本を押し付けられる。そういえば、魔本の事色々あったせいですっかり忘れていた。

黒虚から渡された魔本にごめんねと心の中で呟き、あの崩れた領主の家に忘れていったのか……これだけの汚れで済んだ事が幸運だと思う。

「この子ね、あんたの連れと一緒に探してくれたんだよ」

「え？ありがとうございます」

反射的ではあったがお礼を黒虚に言つて、エマの言葉にハイリスはふと疑問を覚える。

「あの……」

それを口にしようとして

「クロちゃんとシロちゃんの事だろ？……話は、この子達から聞いたよ」

そうですか……、ハイリスはそう口にする事しか出来なかった、そんなハイリスの背中をエマは叩く。

「そんな辛気臭い顔しないでくれよっ！マコは、帰ってこない……でも、この子達がいる。この子達はちよつと常識を知らないから誰かが教えてやんなきゃだろ？」

ニカツと清々しい笑みを浮かべて言うエマに、ハイリスは少し呆

然とした。笑みを浮かべながら、エマは続ける。

「孫みたいなもんさ、新しい、私の家族だよ」

そう言い切ったエマの笑顔は、あの時の、悲しい笑顔では無かった。

「よしっ！ハイリス、うまい飯作ってやるよ！食堂にや連れもいるから。なんか色々と話がしたそうだったぞ！？」

豪快に笑いながらエマはハイリスの手を強引に引いていく、途中黒虚の手も掴みエマは二人をずるずると引き摺って食堂へ向かった。

「エマさん」

ハイリスは、自分にしか聞こえない様な声で呟く

「幸せになって下さい」

＋＋＋

「領主のせいで、街は至る所が破壊されてる。男は救助活動やら復興活動に駆り出されてるよ」

「ご飯今から作るから待っててな！とエマが言って姿を消すと、ハイリスは食堂で魔白と座っていたドイルと今回の騒動について話をする。

互いが知らぬ間に起こった事を報告し、まとめる。

「簡単にまとめれば、魔天裂光を手に入れた領主がそれを自分の力にするための儀式にこの街の人を使っていて、それが神隠しと呼ばれていたわけだ」

「そして私に白羽の矢が立った時、成功したけど何故か私に本体、向こうに不要部分がいつてしまった……と」

「まあ、魔白と黒虚の話もまとめるとそんなもんか、結局一番謎だったのが『マコ』が……なんて言やいいんだ？」

そう言っ言葉に困るドイル、そんなの誰も分からない。

「まあとりあえず、すごい騒ぎになってたんだぞ？黒い化け物が街を破壊したーってな」

「あはは、あれがこの街の領主だなんて知ったらどうなるんだろ」

「つか、領主の家半壊だから気付いた奴は気付いたんじゃないか？呪法に身を染めてるって言う噂は広まってるみたいだし」

そんな会話を続けていると、エマが沢山の料理を持ってこちらに来る。

手伝いに行っていた黒虚と魔白も両手いっぱい抱えている。

「あ、あとな」

色々な料理が机に置かれ、ハイリスがそれに気を引かれている時にドイルは言う。

「なんか俺達、化け物倒したヒーローになってるぞ」

「は？」

ハイリスのそんな間抜け声に、ドイルは大真面目な顔で無言になる。

その顔を見てハイリスは確信した。どうやら、本当の事らしい。

だが、事態は二人にとって最悪であろう展開に転んだ。

「ああ、何も悪い事をしていないのに」

くしゃつ、と。ハイリスは手の中にある紙を握り潰す。はあ……
とため息をつき、ハイリスは隣を見る。

隣でドイルは怪訝そうな顔をして紙切れを睨んでいる。

その紙には

『ドイル「ターニア、黒髪黒目の四角い大剣を背負う。ハイリス」
クローシア、桃髪眼帯の魔法使い』

『二人の罪状——反逆罪、テロ行為』

あはは、とハイリスは悲しみを声に乗せた。

「ま、まあ、私達はあるあなたがヒーローだって事知ってるからっ
！」

そんなエマの励ましも

「……あの、街の人の手のひらを返した態度……てかテロって」

ネガティブモードのハイリスは受け流す。

さて、それはさておき素性がバレて街にいられなくなった二人は逃げる様に街を出る事に。

街の人に見つからない様に数日間匿ってくれたエマの見送りの中、二人はスクーターに乗る。

「ハイリス、色々と……ありがとうね」

「い、いやこちらこそ……本当に迷惑かけて」

ハイリスがそう言うと、エマは優しい笑みを浮かべ

「ハイリス、多分あんたがいなかったら『形の違う幸せ』を掴めなかったよ」

両脇に魔白と黒虚を抱いてエマは言う。その言葉の意味をいまいち理解できなかったハイリスは疑問符を頭に浮かべながらエンジンを入れた。

「じゃあ、またいつか」

その言葉を最後に、ハイリス達は振り返る事なくスクーターを進めた。エマ、魔白、黒虚はその背中を見送って

「さあっ！あんた達にも仕事を教えないとね！」

笑顔で、彼女達の家に戻るのだった。

「あーそついやつやむやになってたけどその眼帯さ」

二人が街を出てしばらく経った頃、おもむろにドイルが口を開いた。

「なんか分かんないんだけど、勝手についてたんだよな」

「私の顔に？てか自然すぎて風呂の時も存在を忘れてたな」

そつえば手配書にも眼帯って増えてたな、と呟くハイリス。

「多分、それエンジェル・ダストを封じる為の物だろうな」

「ということは、取ったらエンジェル・ダストが発動するの？——
当分使いたくないな」

俺もだよ。ドイルがそう言うって

「「あの痛みは勘弁」」

二人で合わせてそう言うのだった。

十一章、エンジェル・ダスト

了

終話、形の違う幸せ（後書き）

まず、ここまで読んで頂き本当にありがとうございます。
ぶっちょやけ後書き長いですが、読んで頂ければ幸いです。

無事一章を終わらせる事が出来ました、途中かなりめちゃくちゃだと思いましたが……と、とりあえず、ようやくハイリスの外見を固定できました！

え？何故眼帯かって？……エンジェル・ダストを目に付けよう（どう言えいいか分からない）と思った時に突然思い付いたからです。

あ、あと終話でかなり最後の方無理矢理になってしまいましたね……笑えません。まとめるのが上手いきませんでした。

言いたい事は以上です、批評はもう気にせず辛口でしちゃって下さい。

では次回の話を最後に。

次章からメインキャラが二人追加されます、男と女です、バランス良しです。

この小説のメインは五人の予定ですので、一気に四人まで行きませんが一人余ってます、まあそいつはまた後に。

二章タイトル『謳姫と鐘の鳴る街』

それでは、こちらの方もよろしく願います。

ちなみに『形の違う幸せ』とは別に深い意味は無く、『マコにいる幸せ』がエマにとっての『幸せ』で

黒虚達との幸せが『マコはいないが幸せ』つまり『形の違う幸せ』

もう良く分かんないですがそんな感じの事を格好つけて伝えたかったのです。

それでは最後と言って最後でなかった作者のくそ長い後書きはこれで終わりです、本当にありがとうございました。

章間、二人と森の中の村（前書き）

まだ二章には入りません。予告しておいて……入りません。すいません。
これは一章と二章の間の物語です、この話が
終われば二章です、絶対です誓います。

章間、二人と森の中の村

十歳のぼくはその時——天使を見たんだ。

二桁の年齢になって少し大人に近づいたと思っていたけど、ぼくはまだまだ子供だと思い知らされた。

ただ、もう少し

もう少しぼくが、背伸びしなくても良いくらい成長したら

ぼくも、あの二人の様に旅に出ようと思った。

見聞の旅ってやつ？

＋＋＋

ガラス・ディアモールと言う街とウォーターラインと呼ばれる港町を繋ぐ大きな街道がある。途中に大きな鐘がある事で有名なチャイムベルと言う街があったり、大陸でも三本指に入る大きさの川があったりする比較的有名な街道。

その街道沿いに隣接する大きな森があり、しばらく森が続くと大きな山がひょっこり顔を出す。

その森の中、森と山に挟まれる様にぼくの村はある。街道から何本か森を通る村への道があるにはあるが、森の中にある村には基本

的に余所者は来ない、誰もがこんな村に行くくらいならさつさと70から80キロ先のガラス・ディアモールに向かうだろう。

だからこそ、その二人の旅人はとても目立つたし、小さい村だからすぐ噂は広まった。

「……あのなあ、やつぱりあの大量にいた商人の馬車達と一緒に草原突っ切った方が良かっただろ、こんな辺境で何をするってんだよ」

「だってさ、気になった道を進みたくするのはしょうがない事だよ？」

「とりあえずウォーターラインに向かうっていう話になったよな？」

「うっさいわねえ、別に急ぎじゃないんだし」

「お前っ、俺がそんな感じの事言った時怒ってきただろ！『時間は有限っ！』とか何とか言ってる！」

村の入り口で言い合いになっているそいつらを一番初めに見つけたのは、実はぼくだった。二人組の旅人らしきそいつらは『機械』に乗ってきたらしい、見慣れない乗り物を脇に言い合いを繰り返している。

なんだあいつらは？とその時はそう思っただけでそこにそこから離れた、別にさほど興味があるわけではなかったのだ。

「マルっ！大変大変」

幼なじみのフウが慌ただしく走ってきたのはあいつらを見て数十分経った頃だった。だからぼくは『ああ、あの旅人達の事かな』と、

てつきりあの旅人二人の話がフウの口から出ると思っていたんだ。
でも実際はそんな悠長な話でも無かった。

「またっ、土砂崩れだよ！」

またか、ぼくはそう思う。フウが手を引っ張り急がすのでぼくは
小走りに付いていく。

最近、と言っても三日程だが、村のすぐ横にある山がよく土砂崩
れを起こす。原因は、雨。

最近の天気は昨日も雨、そのまた昨日も雨……そのまた昨日も雨。
今日は久しぶりの晴れだったのだが……それでも緩んだ地盤は限界
らしい。

「良かった良かった、怪我人は誰もいないみたいだ」

大人達がそう話をするのを聞いて、ぼくはホッと胸を撫で下ろす。
小さな村だからこそ、村の皆は家族同然だ。

「君達のおかげだよ！」

ん？と、大人達の台詞に違和感。

その声のした方へ顔を向けると

「い、いやっ、たいした事してませんよ」

先程の旅人が大人達に囲まれていた。桃髪という目立つ髪色に黒
い眼帯、しかもやたらでかい、おそらく顔の三分の一は隠れている
んじゃないだろうか。という感想の女と黒髪で背中に剣を背負って

いる男。

男の方は面倒臭そうに立っていて、基本的に受け答えは女の方がしている。

「母さん、一体あの人達何したの？」

大人達から離れた所に泣いている妹にすがりつかれている母さんを見つめ、ぼくはそう聞いた。

「ああマル、実はね、シユマが土砂に巻き込まれそうになったところをあの二人が助けてくれたのよ」

シユマとはぼくの妹だ。そのシユマの頭を撫でながら母さんは言う、シユマが泣き止む様子は無い。

「へえ」

「へえ、つてあんなね。てかあの二人すごいだよ？なんか桃髪の女の子の方がシユマを抱えて黒髪の男の子の剣を踏み台にして土砂から逃れたらしいの、男の子はちょっと土砂に飲み込まれたみたいだけど大丈夫そうね」

ペラペラと饒舌に語る母さんの話を聞いてもいまいちリアリテイーが無いのだが、それは母の語り方が悪いのかそれともぼくが悪いのか。

とりあえず、そんな事があってもぼくはあの二人を得体の知れない人間達として警戒していた。

だから、家に帰った時に二人が家に泊まると聞かされた時は驚きで口すら開かなかったのだ。

「ありがとうございます、雨続きで困ってた……こ、これ！洗濯機じゃないですかっ！アイティア製！？すごい初めて見た」

おそらく旅で溜まったんだろう洗濯物を抱えて最近母さんが買った自慢の機械を見て目を輝かせる桃髪女。

「あらーわかるー？」

と、まんざらでも無いというか思いつ切り嬉しそうな顔の母さん。魔力で動くんですか？そうなの、補充には魔力石を使ってるねえ。とかぼくにはいまいち理解できない会話をする二人、母さんに文句を言いに来たが割り込む気にはならなかった。

「ここっこれは、鉄砲？すげえ、本物だっ！これ、アイティア製のあの遠距離武器？」

「おっ！分かるかい！？アイティア製の六弾装シングルアクション……」

ペラペラと昼間の母さんを思い起こすくらい饒舌に黒髪の男に語る父さん、武器マニアの父さんは武器の価値を分かってもらえた事が嬉しいのだろう。ぼくには全く分からない。

結局、ぼくは両親に何も言う事が出来ず夕飯になった。

「おねえちゃんは何でドウルとたびしてるのぉ？」

「ドイルだよ」

夕飯の席にはすっかり妹になつかれた桃髪女と黒髪が。桃髪は妹の質問に首を傾げている。

「何でだろうねドイル、なんかもう成り行きだよな？」

「あら？恋人同士で駆け落ち中なのかと思ったんだけどねえ」

「違います、有り得ません」

（息ぴったりじゃねえか）

ぼくは、顔の前で無い無いと手を振る動作まで同時にする二人に大してそう思った。

母さんはあらそうなの、と少し残念そうな顔をする。母さんはそうゆう話が好きなのだ。

「うん？また雨か」

父さんがそう言って窓の外を皆が見る、言った通りまた雨が……このまま雨がずっと

「また土砂崩れを起こしそうだな」

黒髪がぼくの考えを代弁するように言った、いやぼくだけでなく妹以外の全員が考えていた事だろう。

「また誰か巻き込まれっかもな」

黒髪は続けてそんな事を言う、ゴスツと直後に桃髪が肘で黒髪の脇腹を突く

「ちょっと、不謹慎な事言わない」

「……本当の事だろ？」

バキッ！うわぁ…と思わずぼくは目を閉じた、黒髪の頭を桃髪が思いつ切り殴ったからだ。母さんはびくりした顔に、父さんは哀れみの……というか共感してる。

「んだよいきなり！」

「あんたの空気読めなさが悪い」

もしかして妹の事気にして……まあ当の妹はあんまり土砂崩れの事気にしていない様だけどな。

「はぁ？何がだよ」

「普通はそんな事言わないって言ってるの」

少し涙目に頭を擦りながら桃髪を睨む黒髪だけど、桃髪はそれよりきつく睨み付けていて、何て言うか

「将来、尻に敷かれるな……」

ついついぼくは呟いてしまった。やばい聞こえたかな？と黒髪を見ると、やはり聞こえていたのかこちらを見ている。

「少年」

黒髪が口を開く、怒ったかな？と心配したが

「こいつの尻は胸同様薄いから……」

ゴキヤッ！

「何？」

「……ごめんなさい」

間違えた、敷かれてるな。母さんはあらと少し楽しそうに笑い、父さんは……哀れみの表情で同情している、気持ちは分かるよとでも言いたげに。

確かに……出るべきところが出ていないな、まあ良く言えばスリムだけど……心の中ではそう思っても絶対口にはしない。

口に出したら——黒髪みたいに顔面へ右ストレートが決まるかもしれないからだ。

「きゃははドウルいたすお」

「痛い……手加減を知らんのか」

頬っぺたを押さえながらしゃがみ込む黒髪の肩をぺしぺし叩きながら楽しそうにしている妹を見ながら、ぼくは妹にはおしとやかに育ってほしいなあと母さんと桃髪を見ながらそう思った。

「マルウ、ちょっと山に遊びに行こうぜえ」

ぼくの悪友がそう言ってぼくを山に誘ったのは黒髪と桃髪の旅人達が来たその次の日の事だ、その日も朝から軽く雨が降っており山は連日の雨で地盤が緩んでいるから危険だと大人達は子供に言い聞かせていた。

雨が降っているのに家に来て、何を言い出すかと思えば……。

「何だマル、怖いのか？」

もちろん断ると言おうとして、友人がぼくより先に言ったその言葉に少しムツとしてつい

「行かないなんて言っていないだろ？行くよ」

強がってそんな返事をしてしまう、まあ大人への反抗心が全く無かったわけでも無いけど。

ふと、視線を感じてそちらを見る。

「起きろドウルー！トランプで遊ぶのーっ」

妹にそう言われて叩き起こされた黒髪がぼく達の会話を聞いているのかこちらを見ている、黒髪以外は今ぼくの見える範囲には居ないので（妹は除く）おそらく話を聞いていたのは黒髪だけだろう。さっさと行くぞ、と友人の背中を押して外に出る。雨は少し弱まっただけで、ホッと胸を撫で下ろしてぼくは歩きだした。

隣には反抗期真っ盛りの友人、多分山で遊びたがるのは大人が禁止したからだろう。一体山で何をしようと言うのだ。

「ねえマル、やめとこおよ」

山へ入ってぼく達は何をしようか話をしていた、途中でぼく達を止めようとフウが付いて来ていたが友人は止まらない、だからぼくも止まらない。

「雨……ひどくなってるよお、二人共かえろうよお」

ぐいぐいとぼく達二人の袖を引っ張るフウ。友人は少し思い直してきたのか、どうしようとして葛藤しているのが顔を見ただけで分かった。

はあ、結局何しにきたんだが。そうため息を溢して、ぱらぱらと顔に何かが降りかかっているのに気付く

雨か？にしては――

頬を拭って気付いた、土だ。

「マル！」

そんなフウの叫び声が聞こえて、ぼくは土が落ちてきた方向へ視線を向ける。

ゆっくりとしていた、視界に入る物全てがスローモーションとなつて写っていた。たとえば、顔を驚きの表情へと変えていく友人、目を見開いて今にも泣き出しそうなフウ、今尚降り続ける雨粒、目の前を通る泥、そしてぼくを潰そうとする巨木。

ゆつたりとした視界に反してぼくの心の中は嵐の様だった、よけるよけるだとかヤバイ死ぬだとか手綱を離された猛獣のように様々な思考が頭を占める。

もう、ダメだ。死を覚悟して、目を閉じた。

数秒経って、衝撃が来ない。

「こんの、くそガキッ！何してんだよッ！」

目を開いて驚いた、まるで……まるでぼくを守るように黒髪が巨木を支えているのだ、四角い剣を盾にして、ぼくや、フウ達の前に立ち塞がっている。

「え……なん……？」

震える足を何とか立たせ、ぼくは顔をしっかりと上げた。そして、見たんだ。

「ドイルツ下がって！」

ぼく達を守ってくれたんだらう黒髪を突き飛ばし、黒髪が支えていた巨木——そしてその後から大量に流れ落ちてくる土砂に立ち向かうように、桃色の髪をなびかせて彼女は立っていた。

右手は、右眼を塞ぐ眼帯を引き剥がし、そこから漏れた綺麗な光が尾を引いて——軌跡の残像を残す様はとても、とても美しかった。

後になってこの時を思い出すといつも真っ先に、天使の羽のような眉と天使の輪のような瞳から光を帯びさせ気丈に立ち向かう彼女の姿が瞼の裏に写るんだ。

指揮者のように彼女が手を振るえば、その動きに沿うようにして

光の群衆が土砂を吹き飛ばす。

あまりに呆気なさすぎて、現実味が無かった。まさか遠目に山の形が変わっているのが分かるくらいの土砂がぼく達へ向けて降り注がれていたなんて――。

はっと気付けば、ぼく達の周りだけ避ける様に土砂崩れが起きていた。その凄まじいさまと言ったら、何て言うか……凄いのよ。

「さあどうしようか」

「ハイリス……お前副作用……」

横を見ると、既に桃髪は眼帯を付けていて、咳き込みながら何故か苦しんでいた。

立ち上がった黒髪はしょーがねえなあとか言っつて、剣を叩き付ける様に振るって土砂の壁を破壊して道を作っている。なんかもう、めっちゃくちゃだ。

土砂を吹き飛ばす桃髪も、掘削機のように土砂の壁を削る黒髪も。

でも、なんか――格好いいと思った。

少し、憧れたんだ――

騒ぎを聞き付けた大人に怒鳴り付けられたばく達、フウには悪かったなあと思う。両親には叩かれたけど、そんな事より両親の涙は少し心に響いた。

ああそれと桃髪と黒髪は次の日、旅の行商人が持ってきた新聞とすれ違いになるように村を出ていったんだけど……まさか、あの二人がねえ？

「黒髪に四角い剣、桃髪眼帯……あの子達だよな？」

今日の新聞はいつもより売れて商人は驚いていたよ。

「ドウルとハイリフはトロリストだったのぉ？」

二人がまた旅に出て一番悲しかったのは妹で。妹はそんな風に色々単語を間違えながら、寂しそうにしていた。まああれだけ妹はなついていたしな。

ふと思う。今ごろ、また二人はお節介を焼いてるのかな？つて。

「うおー良い天気だー」

「人が運転してる後ろで疲れた声出すのやめてくれる？」

最近続いていた雨は何処へ行ったのだろうか？思わずそんな考えが浮かぶドル、空を見上げれば綺麗な青。

「よっしゃ、さっさとウォーターラインに向かいますかぁ」

「運転するの私だけだね」

しょうがねえだろ、俺は運転できねえし。そう言うドイルに対し、
じやあもつと私に感謝したらどう？と軽口を返すハイリス。

「あー、ありがとうございます」

「棒読みすぎ。心がこもってない」

綺麗な青空の下、二人の口は止まらない。

二人の旅は——止まらない。

了

章間、二人と森の中の村（後書き）

お読み頂きありがとうございます、今回は他人から見た二人の物語でした。次の話から二章です、絶対です。

二章『謳姫と鐘の鳴る街』 一話、いずれ交差するもの（前書き）

設定が自分の中で確定してきたので、改訂版……というより完全版を書こうと思います。

二章『謳姫と鐘の鳴る街』 一話、いずれ交差するもの

「パルっ……！パル……どこにいるんだっ……！」

ナインタールと呼ばれる街に一際目立つ城がある、それなりに大きいその城は今――血が舞う戦場となっていた。

そんな城内を走りまわりながら金髪の青年は誰かを探している。色んな部屋を探し回り、ようやく目的の相手を発見して焦った表情でその手を引く。

「パル……いえ、姫！急ぎましょう、この辺りにもそろそろ……」

金髪の青年に手を引かれているのは、同じ金髪の女性。背は女性にしては高めで細身な身体も彼女を細長く見せている、たがスタイルは悪いわけでは無く女性的な所は充分自己主張していた。

「くははははっ、男と女の逃避行……っ、実に心踊る展開だよなあっ？」突然そんな声が、二人のいる部屋に。

カツン。その足音は二人の耳にやたら大きく響いて聞こえた、青年の方が慌てて音の主を見る。

「どうだい？自分の味方達が敵になる……そんな愉快な状況の感想を聞かせておくれよ」

両手をポケットに入れながら楽しそうに言うのは派手なオレンジ色の髪をした男、左耳と右眉がやけに金色に光るのはピアスのせいだ。

そんな全体的に派手な男はイヤらしく口角を上げ、口を開く。

「おや？だんまりか、まあ得体の知れん奴とお喋りしている場合でも無いからなあ君らは」

そこまで言つと、目の前の男は下卑た笑顔をより一層深め

突然後ろから斬りかかってきた剣を振り向かず軽々と避けた。

「団長！」

派手な男に斬りかかった者を金髪の青年はよく知っている、この城と街を守る騎士団の団長だ。白髪が増えてきた頭髪やその頬の傷も今はとても頼りになる男の象徴である。

「ウルっ！姫さん連れて逃げろ！こいつが仲間や街の人を操つ……！」

「おお、大正解だよ。よく分かったな、渋い旦那よ」

パシンッ、そんな音が響くと先程まで口を荒げていた団長が糸の切れた人形の様に地面に崩れ落ちる。

「……何を、何をした貴様あ！」

金髪の青年は一瞬きよとした顔で動きを止め、ようやく理解が追い付いたのか額に血管を浮かび上がらせながら目の前で余裕綽々に立つ男に向かって叫ぶ。

「……ふう、説明がめんどくさいな。というかやはりこの男——
やれやれたまに出るんだよなあ……」

だがそんな怒声を無視して男はブツブツと何事かを呟いている。
金髪の……ウルは少し冷静になり、姫と呼ばれる女の手をぎゅつと握って今がチャンスか——と覚悟を決め走り出した。

「やはりめんどくさがっていては……おいおい、どこに行くんだ」

走った先は今の時期には使われない大きな暖炉、そこに向かって走っていく二人を不思議に思いながら派手な男は歩いて追いかける。

（間に合うかつ……！）

派手な男が手をこちらにかざし何かを仕掛けようとするのを感じながらウルは懸命に暖炉に向かい、そして中に入って床を思いつき叩いた。

翔べ、とウルが唱えると暖炉が青く光を放ち、二人はその光に溶け込んでいく。

「っ！？しまったな、まさか転移魔法なんて大掛かりなものがあるなんて——」

口ではそう言いながらも顔には満面の笑み。出し抜いたとも言いたげな顔をして消えたウルを思い出しながら城内を歩きだし、同じ鎧を着た者同士や、平民から貴族まで様々な服装の者達が斬り合う戦場の中心を平然とした顔で歩きながら、男は笑った。

「くははははっ、あはははははは！」

他の部屋にある暖炉から姿を表した二人はその笑い声を背に城から逃げ出す、もう聞こえない場所まで来たはずなのに——まるで耳元で笑われているかの様にあの笑い声は二人から離れなかった。

†第二章、謳姫と鐘の鳴る街†

「あの……二人なんですが、泊めてもらえませんか？」

とある小さな町のはずれにある教会、そこをドイルとハイリスは訪ねていた。早い話、寝床の確保である。

旅する二人は絶賛指名手配中ではあるがそんなに有名なわけでも無いのでよっぽどの事が無い限りバレない、そういうわけで普通に宿屋には泊まれるのだが……お金が無い。

「ええ、よろしいですよ。主は困った子羊を決して見捨てませんから」

につこりと、気持ちの良い笑顔でハイリスのお願いに答える神父、丁寧に貸し出してくれる部屋まで案内してくれた。まあ仕方の無い事ではあるが、部屋の中には二段ベッドが二つと人が一人通れるくらいの隙間しかない。

（ふう、私も神父っぽくなってきたな）

この神父、実は新人であり。今、先生にあたる老神父は大きな街へと出かけていて留守なのだ。

桃髪に、眼帯に隠されていても可愛らしい顔立ちだと分かる意志の強そうな瞳を持つ少女に黒髪で比較的中性的な顔立ちだが少女同様に意志の強そうな瞳を持つ少年……眉は不機嫌につり上がってはいるが。そんな二人組を疑いもせずに教会へ上げた神父は椅子にドカッと座り込み、ふて寝を始めた。

その姿を陰からドイルは見ていて、色々と心配になったと言う。

「まあ一応通報は無さそうだが、なんかダメな神父だし」

部屋に帰ってきて意味不明な事を言い出すドイルにハイリスは頭の上に疑問符を浮かべた。

「そんなことより、どうするの？ お金。……また強盗返し？」

「へえ、考え方が随分野蛮になったな」

「誰のせいかな？」

はあ、と溜め息をついてハイリスは今までの旅を思い返す。

「なんか、ろくな目にあってないんだけど、眼もこんなになっちゃったし」

また溜め息をついて右の眼帯に触れる、こんな布に塞がれているのに視界はしっかりと確保されているのが本当に不思議だ。というか、この眼帯は一体なんなのだろうか？

「別に俺のせいじゃないだろ？つか、お前と一緒に俺も巻き込まれてんだけど」

「本当、武術の鍛練していて良かったよ。なんか旅をして痛感した」

ベッドの横に荷物を置くと二人はベッドに横になる、ドイルが上でハイリスが下だ。

「……………女らしさの鍛練は怠ったようだけだな」

「おいこの野郎、今ボソツとなんて言った？」

ドカドカドカドカドカ！

「おまつ！あんま下から蹴ると板が割れるだろうがあっ！」

「私だつて料理くらいなら（多分）できるんだよっ！……………（まあ、裁縫とかは出来ないけど）」

「なんか所々小声になってんぞーっ」

二人がそんな会話をしていると（その間もハイリスは下から蹴り続けている）突然、バキヤ！そんな破壊音が部屋に響き

「「あっ」」

その一瞬後、二人は同時に間抜けな声を出した。

二話、出逢い頭の歌と剣

桃色の髪を指で弄んでいるハイリス、横で腕を組むドイル。二人の額を何筋もの汗が伝っていく、顔色も少し青ざめていた、まるで悪い事をして親に怒られるのを恐れる子供のよう。二段ベッドが二段じゃなくなった。説明すれば十五字程度。

「どうしようか？」

ぎこちなく笑いながらハイリスが問うと、ドイルは首を傾げ

「逃げる」

一言。

……………。

『——まあ、そういうわけにはいかないよね……………』

しばらく沈黙し、二人同時にため息を吐いてそう呟いた。

ベッドの二段目を支える板は二枚あり、一般的な二段ベッドと同じだ。真ん中に二枚の板を支える木が横に一本あるのだが、ハイリスが蹴り壊したのはその真ん中の木。支えが無くなった二枚の板は上に乗っていたドイルをまるで落とし穴にはまったかのように下へ、ハイリスには腹を狙うように板二枚が。

『うわあっ！』とドイルは叫び。

『ぎゃーっ！』とハイリスは慌てて避ける。

しばらくして我に帰った二人が見たのは、変わり果てた二段ベッドだった。

「まあ、そんなわけで……教会に寢床を借りとして、破壊行為を行ってしまった私たちは超常識と言うわけだ」

「何を今更ぶつぶつと、桃髪眼帯のテロリストさんや」

「待つて？テロリストはともかく、反逆罪まで何故つけられてるか分かる？あんたが“無駄”に暴れたからでしょ？」

「何故テロリストがつけられたか分かるか？お前が情けなくもあいっ（ガラスディアモールの領主）に捕まったのが根本的な理由だろ？」

「……………。黒虚ちゃんに負けたくせに」

「……………。白いのに負けたくせに」

そこまで互いに言い終わると再び、二人の間に沈黙が流れる。心なしか不穏な空気になってきている。

すーっ、と息を吸って、二人が口を開こうとした時。
この静かな空気の中響いたノック音、そして

「今よろしいですか？同室になってもらいたい方々がいらっしゃるのですが」というあの神父の声。

中からの返事を聞かずにドアを開いた神父が一番最初に目にしたのが、土下座をする桃と黒の二人だった。

『すいませんでした！』

「ええ……っ？」

状況をいまいち飲み込めない神父は困惑した表情を浮かべて土下座する二人から視線を逸らし、ベッドを見る。

変わり果てたベッドを。

（先生、この場合はどうすればいいのでしょうか）

神父は苦笑いを浮かべながら今は留守にしている先生に教えを求めた。

＋＋＋

「よし、直った」

「おつかれ〜ドイル」

「……いい笑顔だな、てめえ」

結局、ベッドは神父から工具箱を借りて修理する事になった。普通は二人で協力するのだろうが、互いに楽をしたいと言う考えからジャンケンで負けた方が一人で頑張るという案が採用され、負けたドイルは小一時間かけて何とか元の形にベッドを戻したのだ。

「それより……ちょーっと怪しいよね、さっきの二人組」

道具を神父に返すかーとドイルが工具箱にまとめ始めた時にハイルスがそう言いながらベッドに横になる、横になるとドイルが直した支え木の強度を確かめるように足でぐいぐいと押し始める。

その際に半ズボンを履いているハイルスの白く細い脚がいつもより表わになっているのだが、見慣れているドイルはときめきを感じる事は無い。そしてハイルスもドイルに対して恥じらいが無い。

「あー、同室になる二人組か。フードで顔は見えなかったしなあ、あの格好からして俺達のような旅人だろうな」

工具箱にガチャガチャと工具を仕舞い込みながらドイルは答える、全部仕舞い終わると工具箱の蓋を閉めた。

「なんかねー、変だと思わない？ 犯罪者かもっ」

「……。それは俺達だろ」

「……萎える事言わないでくれるかな」

ドイルとハイルスが貸してもらったこの部屋は最大四人まで寝る事が可能で、二人が寝る分を差し引いてもまだ二つベッドが余る事になる。

その余ったベッドをそのまま無駄にするわけがなく、二人のような宿にすら泊まらない不憫な子羊達へ貸し出しているのだ。

その結果、見知らぬ二人組と相部屋になったドイルとハイリスなのだが

「確かによく考えると怪しかったよな」

ドイルがそう切り出して、ハイリスが少し顔を輝かせる。

「でしょ？フード付のマントで全身を覆ってるなんて、よっぽどのわけありだと思わない？」

「片方の男が持っていた剣、マントの下に差してたから鞘の先しか見えなかったけど……あリや高いな。ハインケルの剣も装飾で高貴に仕立ててあつたろ？あんな感じに」

へえ、と。語るドイルに対してどうでも良さげに相槌を返すハイリス。

工具箱を神父に返しに行くためにドイルが立ち上がるとその背中にそっぴいばとハイリスが口を開く。

「剣を持って無かった……体格的に多分女の人だけど、その人の立ち振舞いがなーんか……お嬢様というか高貴な人って感じだったよね」

そうなのか？と返事を返すドイルは案外観察していたハイリスに少し驚きながら部屋のドアを開き神父の元へ向かった。

……。――。

(……何だ？何か、何か聞こえてくるぞ？)

――……。ドイルの耳が“それ”を拾ったのは部屋を出てしばらく歩いた頃だった。思わず聞き耳を立てて音の発信源を探る、どうやら“それ”は礼拝堂から聞こえてきているらしい。

歌……だろうか、細く透き通る様な……それでいて力強く凜としている――何らかの感情が込められている、美しい歌声。

正直、ドイルは聞き惚れてしまっていた。それほどなのだ、ドイルが声の持ち主を一目見たいという気持ちに駆られるのも仕方ないと言えよう。そうして工具箱を返す事を後回しにして足早に音を頼りに教会内を歩いた。

「おや、黒髪くんじゃないか。ベッドは直ったみたいだね」

歩いているとバツタリ神父と出会ってしまう、神父はドイルが手にもつ工具箱をチラリと見てからそう口にする。

どうやら神父も歌声を求めてきたらしい、礼拝堂の扉の前で木のように立ち尽くしていた。

「いい歌声だよ」

神父がそう言う

「俺もそう思います」

とドイルは工具箱を神父に渡す。

「ほら見てごらんよ——美人なんだよ、完璧じゃないか」

そして鼻を伸ばしながら礼拝堂を覗く神父……そんな彼を見て若干あきれつつもドイルは礼拝堂を覗き込んで歌声の主を探した。

肌の色は淡く褐色、腰を越える辺りまである滑らかな光沢を放つ髪は金。女性にしては少し長身に思われるが、さすがに170前半はあるドイルより高いようには見えない。

そして、清楚さを感じさせる端正な顔立ちにスラッとした体型に凛とした立ち姿、しかし自己主張をそれなりにしている胸元——マントの上からも分かるスタイルの良さにその顔立ちの良さ、これらが神父の鼻の下を伸ばした理由か。

だが——ドイルの目に留まったのは——。

「赤い、瞳」ぼそりと呟く。

まるでルビーの様に綺麗な深紅の眼、表情を窺えないその赤は、とても異質な様で、美しい。単純にドイルはそう思った。

——。

歌声が止まる、なんだ終わりと神父が落胆の息を吐いたが。数秒すると再び礼拝堂に歌声は響き始めた、先程までのデスクライン大陸では有名な日常を題材にした歌だったが——次に彼女の口から紡がれたのは、おそらく

（子守唄……か？）

へえ、子供の頃にも親に歌ってもらった歌なのかな。そう考えたドイルに突然異変が訪れる。

ズンツ、と何か重い物が頭に乗った感覚がしたかと思えば身体から少しずつ力が抜けていき瞼がじわじわと落ちそうになるのだ。

強大な眠気。ドイルを襲うのは危険ではないが強力な三大欲求の一つ。その圧倒的な眠気に耐えながら横を見れば神父も同じだったのか地面に倒れ伏せ寝息を立てている。

そんな彼を見てドイルが思うのは

（ちくしょうが、更に眠くなるだろうがっ）

まずい、このままじゃ——ドイルの我慢の限界が訪れようとしていた、もういいやと諦めてその異常な眠気を受け入れようとした時。

謳が止まる。

瞬間にフワツと眠気が去り身体が軽くなる。先程までの眠気が嘘のように無くなり、横で寝ていた神父もムクリと起き上がった。

何なんだ一体。とドイルは内心毒づく、歌を歌っていた彼女を睨み付けるように見る。

こちらの視線に気付いた赤目金髪の女性は不思議そうな顔で視線をぶつけてきた、正直そんな反応をされてもドイルは困るだけである。

「お前……何者——」

だ。と言いつつ切ろうとしたところで、ドイルはその場で身体を後ろに仰け反らせた。

ヒュン！とドイルの眼前を煌めく何かが風を斬り通りすぎて行く。身体を反らしていなければその何かはドイルの顔を横に真つ二つにしていただろう。

その何かとは、どこからともなく現れた金髪の青年が持つ高そうな装飾剣の刃。

（避けただつ！？）

突然斬りかかった青年はドイルの反応の良さに驚きを隠せない。

一方ドイルは背中中に剣を背負っていないのについて手を伸ばしており、一瞬でそれを引っ込めると右足で思い切り踏み込んで前へ突進するように肘を突き出した。

その左の肘を青年は横へ間一髪といった様子だが避けて、左手に持った剣で首を狙う。

ギヤリツ！と派手に音を鳴らしながら左足でブレーキをかけ、体制を立て直したドイルは首目掛けてくる剣を青年の腕ごと右手で上に弾き、一瞬で懷に潜り込んで足を後ろから前へ払った。

「うっ……おあ……！」

ハイリスが使っていた体術を真似たドイルは、呻きながら勢いよく地面に叩きつけられた金髪の青年を見て

（少しやりすぎたか？）

と、冷や汗を垂らした。倒れて咳き込む青年へ心配そうにして赤目の女性が駆け寄ってきたのを見ていると何か悪い事をした気分になったのだ。

いや、でも、悪くないよな俺。と少し思い返す、何故斬りかかってきたのかは分からないが、ドイルは何もしていない……はずだからである。とりあえず、今のこの状況をどうしようか？

ドイルの頭はその事ばかりに気を取られていった。

＋＋＋

「よしっ」

パラパラと魔本のページをめくり、ハイリスは口を開く。

『引用の35ページ！鉄の弾丸！』

響く声で高らかにハイリスが言うのと開かれた魔本は輝いてそこから三筋程の文字の羅列が湧き出した、それはハイリスがかざしている右手の前に集中し、文字自体の形がゲニヤリとスライムのように歪んで弾丸の形を何個も形成する。

それは一斉に射出され、その先にある大岩に突き刺さった。

すう、一度息を吸う。

『鉄の弾丸！』

再び、ハイリスは大岩を狙い弾丸を射出した。しかし今回は先程と比べると弾丸の数は少ないようだ。

（中略詠唱では三十、完略詠唱では十二……けど威力はあんまり変わらない。ってことは結構私も成長したみたいだね）

今ハイリスがいるのは教会の裏にある空き地の様な所で、かなり大きな岩がゴロゴロと転がっているので魔法の鍛練に比較的ふさわしい。

何発も全力の鉄の弾丸を受けた大岩は砕けており、それを見て満足そうにハイリスはページをめくる。

『悠久の守り！』

そうして次は違う魔法を唱えた、古代文字が不規則に湧き出てハイリスを内側に入れて三角錐を象るとそのまま文字は壁となり他の文字と繋がった。

局地結界、と俗にそう呼ばれる魔法であり、かつてアニータを崩れる屋敷から守ったものでもある。

（まだ、まだいける）

ハイリスは息を大きく吸うと、魔力を魔本に注ぎ込む。バラバラと結界の壁が分解し、新たに魔本から文字が湧き出して分解された穴を埋めていく。

そうして、先程より数倍大きな結界を作ったハイリスは「ぶはあっ！」と、大きく息を吸った分勢い良く吐き出して、汗を拭う。

（……範囲を少し大きくできるようになった、でも……まだまだ、

鍛練は足りないな、もっと)

もっと、強くならないと。

せめて、自分を守るだけの時くらい『エンジェル・ダスト他力本願』に頼らなくても戦えるくらいに、強く……ならないと。

『あまり、エンジェル・ダストに頼らない方がいい。いざという時——それこそほんつとーに“譲れない”事があつた時以外にはな』

数日前にドイルはハイリスにそう言った、それは森の中にあつた村に立ち寄つた後の事である。

そのドイルの発言に、なんで？と疑問をぶつけると。

『……師匠が俺に言つた事なんだ、でも俺は正しいと思つてる。——禁法は確かに強い、だが……禁法ばかりに頼つて自身の鍛練を怠る者は——弱者だ。’——』

その言葉はマテリアル・ギアの事を指しているのだろうか？“師匠”の言葉を紡いだドイルは感慨深く息を吸い、続ける。

『つまり、師匠が結局言いたかつたのは“自分の力を信じる”。実際に禁法は強いけど、それ無しに強い人はもっと強い。それこそ、そんな人が禁法をも自分の物にしたら——その人はもう“最強”だろ？』

切り札は最後まで残す物。ハイリスはそれを言われた時に少し的外れなそんな言葉が浮かんできた。

確かに、エンジェル・ダストを使えば並の者には敗れはしないだろう。だが、その副作用を受けている時は？もしエンジェル・ダス

トが通用しなかったら？

前者はハイリスク、ハイリターンと言えば分かるだろう。大きな力には何かしらリスクは付き物だ、だが自身の努力で得た力のリスクは遥かに低い。

後者の場合は……エンジェル・ダストに頼りすぎているならばもう駄目かもしれないが、自分を信じていれば、自分を“信じられて”いるならば——まだ、勝機は見えるだろう。

簡単な話、自分自身が強くなればいけないというだけの事なのだ。それをハイリスは痛い程分かっている。

まだまだ自分は弱すぎる。ハイリスの場合、ドイルと初めて会った時は助けてもらってばかりであつたし、魔白と黒虚の時もそうだ。そうゆうわけで、ハイリスは暇があれば自身の鍛練をする事にしたのである。

三話、踊る子羊達（前書き）

今まで自分の中で揺らぎまくっていたアルプラの設定が形になってきたので、改訂版を書いています。

序章と一章を書き直しまして、今同時に書いている二章を繋げようと考えています。

ですが、書き溜めているものが多くなってきたので投稿しました、話の大筋は変わりませんが、若干設定が序章や一章と違う事があります。

改訂版にて完璧しますので、どうかそこら辺は考慮してください。

三話、踊る子羊達

「あれ？ドイルまだ帰ってない」

ハイリスが魔法の鍛練の為に部屋を出たのは、ドイルが工具箱を返しに行ったすぐ後の事だが、それから数十分経ってハイリスが部屋に戻るとドイルの姿が無い。

工具箱を返しに行つて……そのまま神父と雑談でもしているんだろう、と思つたハイリスは少し汗をかいたのでラフな格好に着替えてドイルを探しに教会内を練り歩いた。

しばらく探し歩くと、礼拝堂と思われる所から聞き慣れた声が聞こえてくる事に気付き、声のした方へハイリスは向かう。

「ドイルー、暇なら組手しよーっ……………何してんの？」

礼拝堂にひよつこりと顔を出しながら、見慣れた黒髪に向かつて口を開いたハイリス。だが、彼女はその後すぐに眉間へ皺を寄せた。礼拝堂を覗いたハイリスの目に真つ先に飛び込んできたのが、薄い小麦色の肌をした金髪美人の腕を力ずくで抑えている男……………その男の方が知り合いだったのだからそれは当然の反応だと言える。

「待て、ハイリスっ、違うぞっ！勘違いするな！これはこいつが殴りかかってくるから……………だからその魔本に向かう手を止める……………っ！」

必死な顔で腕をもがさせる金髪美人を抑えながらドイルは弁解するが

『鉄の弾丸!』

鉛色の杭は寸分変わらずドイルに向かい飛んできた。

＋＋＋

「……つまり、突然襲ってきた男を撃退したら……この人が殴りかかってきたと」

「まあ、殴るっていうか……なんか、ポカポカって表現がぴったりだったけどな」

腕を組みながら仁王立ちするハイリスの足下で正座するドイル。

気絶している金髪の青年は礼拝堂の椅子で寝かせており、女性の方は無言で彼を看病している。

結局、鉄の弾丸はギリギリかわせたドイルだが、ハイリスの追求からは逃れられなかったのだ。

「だからって、女の人に乱暴していいの？」

「乱暴なんかしてねえだろ！」

「あれは立派なセクハラ！セ・ク・ハ・ラ！わかる!？」

「向こうから仕掛けてきたんだぞ！俺のどこが悪いんだよ！ぶん殴らなかつただけまだマシだろ！」

「それは当たり前前の事でしよう！？そんな事してたら“鉄の弾丸”じゃ済ましてないからね！」

またいつものごとくギヤーギヤーと騒ぐ二人。本人達にとってはもはや日常茶飯事だが、横にいる神父はそんな事を知るわけがないので、口論する二人をどう収めようかアタフタしていた。

「あーもう！だったら！その女に聞いてみる！」

口論を続けていると、面倒臭くなってきたドイルが立ち上がり、勢いよく金髪美人を指差しながら叫ぶ。指を差すドイルに、依然仁王立ちで腕を組むハイリス。

その状態のまましばらく二人は睨み合っていたが、ハイリスの方が先に折れたのか腕組みを解き金髪美人の方へ歩いていく。

「すいませんバカが何かやらかしたみたいで。できれば、事情を聞かせてもらえませんか？」

金髪美人の近くまで行き頭を下げながらハイリスがそう言つと、金髪美人は小首を傾げさせながら疑問符を浮かべてくる。

「……………なんか喋れや」

無言の金髪美人に痺れを切らしたドイルがそう言った瞬間、ゴスツ！と、痛そうな音が礼拝堂に響く。ハイリスの手にあった魔本が真っ直ぐ彼の頭に直撃したからだ。

「どうしてあんたはいつもそうなのかなあ？」

投げた姿勢のまま呆れ顔で振り返り、ハイリスがそう言つと頭を

痛そうに押さえているドイルが

「こっちのセリフだよ……」と、悪態をつく。

ハイリスが後ろを向き、ドイルが頭を押さえているその瞬間、金髪の青年は瞼をカツと見開いて自身が着ていたマントをハイリス目掛けて投げつけ、更にベルトに仕込んであったナイフを抜き取ってハイリスに切りかかる。

その一瞬の出来事にハイリスはもちろん、離れた場所にいるドイルも驚きで身体を強張らせた。そのままナイフはハイリスの身体を切り裂くと思われた、が。

マントにより視界が制限されているハイリスは身体を捻らせて何とかそのナイフを避ける。そのままマントを強引に剥ぎ取って、位置的にはすぐ真横に居る青年の方を見ると、彼は金髪の女性が抱えていた自分の物であろう剣を鞘から抜き取って、いつの間にかすぐ近くに来て拳を握っているドイルへその剣を突き刺そうとしていた。

「すーっぷー!!」

そんな声と共に、パン！と軽快な音が響く、その一瞬後には沈黙が場を支配していた。

ドイルと青年。その二人の間に立つハイリスは、青年の剣は叩く様にして軌道を逸らし、ドイルに対しては手を広げながら突き出す事によって、彼自身で静止するよう仕向けていた。

そんな風に二人の衝突を止めたハイリスだが、青年の剣を叩いた方の手からポタリと血が一滴。量としてはそんなに多いものではないが、それを見たドイルは舌打ちをすると青年を鋭く睨んでからハ

イリスの魔本を拾いに行く。

（あの一瞬で……俺の剣の側面を——！？）

痛ーっ、と。あんまり痛くなさそうに手から垂れる血を舐めるハ
イリス、そんな彼女に悔しさや驚愕等の色んな感情が込められた視
線を送る青年は、先程ハイリスによって弾かれた剣を見ながら考
える。

刃の側面は見方によればただの板だ。その部分を正確に叩けば素
手でも軌道を逸らす事は出来る、だが、だからといって振るわれた
剣を簡単に弾けるわけが無い。

（あの黒髪には気絶させられて、この桃髪には剣を素手で防がれる
……くそっ！なんなんだこいつらは！）

ギリッ！と強く、青年は悔しさを噛み締め、綺麗な赤い眼で心配
そうにこちらを見ている女性の方へ振り返った。

一方

「なんであんな危ない事したんだよ、手がスッパリいつでもおかし
くないんだぞ」

「……身体が先に動いたんだからしょうがないでしょ？」

ドイルが拾い上げた魔本を渡しながら言うと、ハイリスは拗ねた
様に口を尖らせる。その言葉にドイルは大きく溜め息をつく

「早く、治療の魔法でも使えよ」と、手の傷を見ながら言った。

癒しの守り。ハイリスがそう小さく呟くと、魔本から出た文字が手のひらを覆う様に結界を形成し、それは手の傷を徐々に治癒させていく。

「何度が死線をくぐっているから反応が良くなったみたいけどな……今のはあいつの体制が悪かったから太刀筋が甘か——」

「分かったってば。それより、突然襲いかかってきた理由を聞かないと……ね？」

上手いこと言いくるめられ、また溜め息をつくドイル。だが、ハイリスの言うことは一理あるので大人しくハイリスに従う事にした。

ドイルとハイリスが金髪の二人組の方へ視線を向けると、無表情でこちらを見つめる女性が歩いてきている事に気付く。そんな彼女を止めようと青年が肩を掴むと、ピタリとその歩みを止め、何故？とでも言いたげに青年の方へ顔を向ける。

ドイルとハイリスは、そんな二人組に疑問符しか浮かばない。

「てか、瞳が赤い」

「今更かよ」

そんな時突然ハイリスが口を開く、間髪入れずドイルの突っ込みが入るが。

思えばよく見てなかったな、とハイリスは今更になって二人組の容姿を確認し始める。

薄い褐色の肌に腰程まですらりと伸びた綺麗な金髪、そして圧倒

的存在感を醸し出す赤い眼。ついでに……。

ハイリスは自分の胸をちらりと見て、溜め息。

青年の方は、女性と同じ金髪だがその髪は緩くウェーブがかつており、ドイルの二倍程長い。女性と違って白い肌で、見た者を射抜くような鋭く青い瞳。

それから、首から下は鎧を着込んでいたようだ。と言ってもそんなにゴツい物で無く、動きに制限がかからない程度の軽い物。

「ふーん、なんか二人共、顔が綺麗だよね」

真顔で突然そう口にしたハイリスに、驚きで目を見開かせる青年と一瞬ポカーンとしてから照れる女性。

横にいるドイルは、なんだコイツとでも言いたげな顔でハイリスを見守る。

「なんかさー、特別な事情があって逃げるお姫様とそれを守る騎士って感じがぴったりくるよね」

「ハイリス……お前って案外……ロマンチ」
「なに？」

どこか黒い笑顔をドイルに向けるハイリス。上っ面だけの笑みを浮かべる彼女にドイルは、また殴られそうだな、と口をつぐんだ。訝しげな目で、こちらを見つめてくるハイリスの視線に気付かない様な素振りをしながら何気無しに青年と女性の方を見たドイル。ふと、疑問が浮かぶ。

なんでこいつら、“いかにも図星です”みたいな顔をしてるんだ？

彼らは、驚愕、緊張、恐怖といった様々な感情が入り雑じった様な表情を浮かべて身を強張らせていた。

ハイリスの発言の後、この反応。そして、女性が放つ高貴な雰囲気、に青年が持つ装飾剣。これらを合わせても絶対という確証は無い……が、怪しい。

ハイリスもそれに気付いたのか、彼らを数秒見た後ドイルへ視線を投げつけてくる。ドイルはその視線にコクリと頷き、二人で口を揃えて

『凶星？』

その言葉に、ビクリと彼らが身体を震わせると、ハイリスとドイルの二人は顔を見合わせて

（何か……何か悪い予感がするんだけど）

（俺もだよ）

小声でそう呟きあった。その直後だ。

「なあ……んっ！……なんなんだ！」

青年がそう叫んだのは、怒り……いや、焦りを声に乗せ。

「目的はなんだ！パルを何故狙っている！？くそつたれが！ふざけるな！」

女性の腕を握り、ドイルとハイリスの二人から守る様に女性の前

に立つ。

「ちくしょうが！殺るなら来い！刺し違えてでも……っ！」

豹変した青年に二人が呆然としている間にも、どんどんとヒートアップしていく青年は再び剣を強く握り締めて、切っ先を二人に向けた。その行為に Doyle は身構え、ハイルスも魔法をいつでも使えるよう本へ力を集中させる。

その瞬間、初めて女性が口を開いた。

「ウル、待つて」

ウルと呼ばれた青年は女性の方へ振り返ると、唇を少し噛んで剣を下ろす。

「この二人は何も私達にしてはいない……皆が皆、敵なわけじゃない……」

「だがっ！……それならナインタールは、一体なんだっただ、パル」

剣を下ろした青年を見ると、二人とも脱力して事の成り行きを見守る。静かに、冷静に口を開く女性。そんな彼女の言葉に悲痛そうな顔で、青年は剣を鞘にしまいながらそう口にした。

「ナインタール？聞いた事あるような……」

ハイルスが思わずそう口にする。

「確か、ガラスディアモールから南に行った先にある街じゃなかつ

たか？中々豊かな街だと聞いた事があるな」

その疑問に答えたのはドイルだ。ガラスディアモールは、ハイリスが右目に眼帯を付ける事になった場所であり、知らぬ間に“テロリスト”と言う不名誉な称号を与えられた街だ。破壊行為については完全に冤罪なのだが。

その街には西のアクアラインと南のナイントールにそれぞれ続く街道があつて、アクアラインへ向けての西街道を歩いて行くと現在地の町にたどり着けるのだ。

「ああどうりで、聞き覚えがあつたわけだ」

納得したハイリスが口を開くと同時に、金髪の二人組は突然走り出す。

はあ？と、ドイルが眉間に皺を寄せたがその行為を止めようとはせず、やがて二人組は礼拝堂から姿を消した。

「やれやれ、なんだつたんだろうね？」

いつの間にかドイルの隣に立っていた神父が困った様な顔でそう口に出しているのを見てハイリスは驚く。

今まで何処に隠れていたんだ？

「全くいい迷惑だったな、俺達はなんもしてねえのに」

「……きつと事情があつたんだよ。深刻そうな顔してたし」

大きくため息を吐いて、かつ、舌打ちをしながら悪態をついたドイルに対して、二人組を弁解する様にハイリスはそう言うが顔にははつきりと疲れが見えている。

「とりあえず、私達も部屋に戻ろうか」

「も？」

「あの人達つて、同室になる二人組でしょ？なら、あの二人も部屋に戻るんじゃないかな。話、まだ聞いてないから聞かないと」

ああ、確かにそうだな。とドイルが納得すると、神父とはそこで別れ、二人で部屋に戻った。

だが、あの二人組の姿はそこには無い、それどころか荷物さえ無くなっている。

「逃げたな？あいつら」

ドイルがそう言う、さすがにハイリスも二人組を弁解出来なかった。

＋＋＋

悪夢だ。

右眼から黒い何かが這い出して、それは人の形を為す。それを私は、殺す。

人の形をしているそれは、人だ。私がいくら、言い訳をしようと人だ。あれは人じゃない、化け物だ！と私がいくら叫んでも、私の

中の誰かがあれば人だ、認めると叱責する。

殺そうとする私に、抵抗するように武器を持つ“人”。その武器を破壊、抵抗出来ない状況にして、殺す。

実際斬ったのは、私ではない。

それでも、それでも、私の中の誰かが口にするのだ。お前が殺した。

ああそうか、私は殺したのか。それを理解した瞬間、痛い、胸の中が痛い。死のうかと思ってしまうくらい、痛い。

気付けば、一人だった。まるで、いつかの様に。

うつん、今の私は一人じゃ……ない。はず。と、私は言うけれど、体の小さい私が目の前に現れて口を開く。

あなたが悪い子だから、一人なの。悪い子は、人と一緒にいちゃダメなのよ。

ああそうか、私は一人なのか。それを理解した瞬間、辛い、胸の中が辛い。考えるな、と頭の中を魔法で埋め尽くす。でも片隅で思ってしまう、辛い。

■い、■い。次は胸じゃない、心の奥。闇に隠れて見えない、何かに阻まれて聞こえない。

それでも叫んでいる、奥で、誰かが叫んでいる。

■い。この言葉の本質が、私には見えない、聞こえない。

何かを私は忘れてる。

＋＋＋

「ハイリス！起きろ！」

そんなドイルの言葉でハイリスは目を覚ます。強引に起こされたハイリスは寝ぼけ眼で窓から外を見て

「まだ夜じゃん、何考えてんの？」

そうぼやきながら、真つ暗な空に浮かぶ綺麗な月を眩しそうに見つめた。

「外の様子がおかしかった、大勢の人が教会に入ってきている——俺達の正体がバレたのかもな、いつでも逃げれる準備をするぞ」

早口で捲し立てるドイルの言葉に従い、荷物をまとめるハイリスだがハイリスが聞いていたのは最後の方だけで、何故荷物をまとめているのかをいまいち理解していない。

二人でそれぞれ大きなリュックサックに自分の荷物を詰め込んでいるが、その間部屋の中は無言。荷物は元から多くないので、支度はすぐに済む。

ドイルは剣を背負ってからリュックサックを肩にかけ、ハイリスはホルダーに魔本をしまいリュックサックを背負う。

「……やっぱり、ここから出るぞ」

そう言って部屋を出たドイルに続いてハイリスもそれを追った。

とりあえず最短ルートで外に出るつもりなのだろう。

ハイリスはドイルの横に並んで、まだ覚醒仕切って無い頭で現状を把握しようと考え込んだ。

「お前さっきうなされてたろ」

だが、ドイルの言葉に考えていた事は吹き飛ぶ。

「……そう、だった？」

なんとも齒切れが悪い、そんなハイリスを訝しげに見て

「ここ最近、毎晩うなされてるぞ、どうかし……」

「何でもないよ」

ピシヤリと言い放たれ、ドイルは何も言えなくなってしまった。

「ところで、一体何があつたの？」

素早く話題を変えられたので尚更何も言えない。ため息一つ、ドイルは仕方なく“もう一度”説明した。

「大勢の人が教会に入ってきた、もしかしたら俺達の事がバレたのかも知れん、だから逃げる」

「はあ……今何時？全く、時間を考えて欲しいよ」

そんな会話をしているうちに、やがて二人は昼間に一騒動あつた礼拝堂に出る。するとそこにはドイルの言う通り大勢の人間が集ま

っていた、その人達に見つからない様に物陰に隠れてからハイリスはふと気になった事をドイルに聞く。

「窓から逃げても良かったじゃん、なんでわざわざ見つかりに行くようなことを？」

そう言うハイリスの言う事はもっともで、逃げるだけならばどこからでも逃げられるのだ。むしろドイルは自ら出向く様な真似をした、わざわざそんな事をする必要はどこにも無いはず。

「気付かないのか？こいつらを見て、何か思わないか？……遠目だったから、確信が持てなかったがやっぱりこいつら——」

ドイルに言われ、初めて礼拝堂から溢れる程集まった人達をしっかりと観察して見たハイリスは彼らの共通点によく気付いた。それは、ちょっと見ればすぐに分かる事だった、何も特別な力なんていない。

「“意思”が、無い？」

言葉にしてみても、ハイリスはこの言い回しが彼らの状態を指すのに適切かどうか不安になったが、とりあえず間違い無く言える事がある。

それは、人を動かす絶対的なものが欠落しているということ。目で、というより感覚で分かるのだ。この者達からは意思が感じられないと。

ピリッ、と。ハイリスは右眼に痺れる様な違和感を感じた。

「おい、神父。なんなんだこいつらは」

すぐ近くに神父を見つけたドイルは彼の肩を掴んで喋りかけたが、返事はない。小さく舌打ちをしてドイルは神父から離れ、ハイリスの近くに戻る。

「ドイル、なんなのこれ……」

「あー、君たち」

突然、聞こえてくる謎の声。ハイリスは慌てて声のした方へ顔を向けた。

ドイルは顔を向けるだけで終わらず剣まで抜いている。

『誰だ!』

二人揃えて叫ぶと、笑い声が代わりに返ってきた。それに腹が立ったのもあるが、同時にぞくつと悪寒を感じたドイルは威嚇のために剣を振ろうと――。

「おいおい、周りまで巻き込む気か？まあ別に構わんけどねえ」

声は後ろから聞こえてくる。

驚きつつもドイルとハイリスは振り返るが、そこには“意思”の無い人が立っているだけ。

「ああ、そっぴや、お前達にとっては初対面だっけか、ごめんごめん」

今度は前から!?!二人がまた振り返ると、ようやく“意思”を持

つ人が視界に写る。

その男に対して最初に感じた感覚は、二人共同じだった。不気味。暗い中でも、月の光を受けて輝くピアス。それは右眉を象る様に連なっていて、更には左耳を縁取る様にも連なってる。

それだけでも十分派手なのに、髪の色が月明かりでオレンジと分かれると、更に派手な印象を受ける。

「なんだお前は」

その派手な男から嫌な雰囲気を感じたドイルは、敵意剥き出しで剣を突きつけ、噛み付く様に口を開いた。

だがそれに一片の恐れも見せず、男は近づいてくる。

ハイリスもその男を警戒するように魔本をホルダーから取り出す。何故か、右眼もその男に少し反応している様に、感じられた。

「自己紹介といこうか、黒髪、桃髪」

緩やかな動きで右手を男は上げ、ハイリスに向けて手のひらを開く。

「虚像のダンサー、以後『虚像^{ダンサー}』と呼んでくれ」

パシッ、そんな音がした瞬間、ハイリスの眼帯が空気に溶ける様に消えて、エンジェル・ダストが発動する。

四話、憂鬱な夜の道

耳を震わせる“余波”。それは強い風となり、辺り一面に吹き荒れた。

すぐ近くでそれを全身に浴びる事となったドイルは、思わず反射的に顔を腕で守る。

（何が起きた！？）

ドクン、と。心臓が、いや、マテリアル・ギアが大きく鳴動した。気のせいか、剣からも同じような反応を感じる。

男がハイリスに向けて手をかざし、その一瞬後、エンジェル・ダストが解放された。何故？

「ぐっ……！何！？」

当の本人も分からない様子だ、ハイリスは右眼を手で押さえるがそこから溢れる金の光は抑える事が出来ない。指の隙間から強く漏れ出ている。

だが、驚いているのはドイルとハイリスの二人だけではないらしい。何かを仕掛けた派手な男——『ダンサー虚像』、彼でさえも呆然とした顔で動きを止めていた。

何かを仕掛けた派手な男——『ダンサー虚像』、彼でさえも呆然とした顔で動きを止めていた。

「……………魔天裂光？——何故桃髪が？それにあの眼帯は何だ、

魔天裂光の存在に全く気付けなかった」

かざしていた右手を下げ、ブツブツと小さな声で何事かを呟き始めた虚像。^{ダンサー}一方、ハイリスはエンジェル・ダストを抑え込もうと眼帯を探すが、見つからない。

「てめえ！何をした！」

そう叫ぶと同時に剣を振るい、“雲切り”を放つドイル。空気を切り裂き、真空の刃を作り出し放つ“雲切り”は目には見えないはずだが、虚像は軽くそれを避ける。

「まあ、いいか。一人黙らしてからじっくり聞こうと思ってたんだがなあ」

頭をポリポリかきながら、また小さく呟く虚像。その余裕にドイルは少なからず屈辱を感じた。

「お前達、金髪で赤い瞳をした美人さんを見ていないか？」

もう一度ドイルは虚像に対して仕掛けようと考えたが、その前に虚像が先に口を開いたせいでその考えは消えてしまう。理由は驚いたから、という簡単なものだ。

ハイリスも驚いた顔で左目をちらりと動かしてドイルを見るが、ドイルは虚像を睨んだまま警戒を解かない。

「それを聞いてどうする」

また噛み付くように言ったドイルに、虚像は面倒臭そうにため息を吐いて

「“リーディング”を連れてこりゃあ良かった」

そう呟くと、踵を返してドイルとハイリスから離れていく。

「待て！さっきから何なんだお前は！」

強く剣を握りしめて、ドイルは三度噛み付いた。

もういい加減うんざりだ、とでも言いたげに虚像は振り返る。

「逆に聞こう、黒髪。お前、その剣技……誰に教わった？」

藪から棒に。突然意味不明な事を聞いてくる虚像。

「それに、桃髪。何故お前はエンジェル・ダストを持っている？」

ダンサー
虚像の質問は続く。

「お前達、『死神』とどういう関係だ？死神の剣技に死神が保有していたはずの魔天裂光……。ああそうだ、ハインケルンの所にいた時には持ってたなかったらう？」

虚像がそう言い切った瞬間、ドイルの顔色は豹変した。

ペラペラと機関銃の様に紡がれた言葉達の中に、ドイルにとっては聞き捨てならない単語があったのだ。

「お前っ！師匠の事知ってるのか！？」

今までより更に眉間に皺を寄せて叫び、今にも飛びかかってきそうな勢いのドイルを見て虚像は大声で笑いだす。

なにがおかしい！ドイルがそう言おうとする前に

「くはははっ！師匠？お前、まさかあいつの弟子とでも言う気か？」

そう言いながら心底可笑しそうに虚像は笑う。

その様子にドイルは開こうとした口を閉じ、強く歯を噛み締める。

「なんか企んでやがるな、あいつめ。……お前達、名前を教えろよ。こつちが名乗ったんだ、礼儀だろ？」

ひとしきり笑い終えた虚像はそう言って、ドイルを見た。

「ドイル・ターニア」

威嚇する様に言ったドイルを一瞥し、次はハイリスを見る。

「……ハイリス・クローシア」

ハイリスが警戒しながらも名乗ったのを確認し、頭の中で二人の名前を反芻させた虚像は踵を返してドイルとハイリスに背を向けた。右手を宙に掲げ、顔だけを二人の方へ向けながら虚像は再び口を開く。

「よし、覚えておこう、ドイルにハイリス。俺は虚像のダンサー、スキルバインド『魔力管制』の一員とでも言うておこうか。

まあ、意味はいずれ分かるだろう」

パチン！虚像が掲げていた右の指を鳴らすと、礼拝堂にいた意思なき人達は全員地面に崩れ落ちる。

突然の出来事に驚きながらも倒れた一人に慌ててドイルは駆け寄り口元に耳を近づけた、どうやら息はしているらしい、死んではない様だ。

ほとんどの人の胸が上下している事から、死人は見た限りではないと分かる。その事実にはつと息を吐く。

「じゃあな」

だが気付けば、虚像の姿は何処にも無かった。ドイルとハイリスの心に疑問を残し、虚像は消える。

二人が見た彼の姿は、本当に……………彼の“実像”だったのだろうか。

＋＋＋

「あいつ、ハインケルンの事知ってた。それどころか、あの時の私の事も」

ぼそり、とハイリスが呟いても、ドイルは気力の無い返事をするだけだった。

虚像、そして彼が何らかの方法で“操っていた”のだろう人達。彼らの狙いは自分達ではない様なので、この夜の道をスクーターで走る必要は無いのだが

どうも教会が居心地悪く感じ、あのまま抜け出してしまった。

夜の為、少し冷える。ハイリスは一応厚着をしたが、元々温暖な気候のデスクラインでは必要無いだろうと薄っぺらい物しか持って

いなかったため、スクーターのスピードはあまり上げる事が出来ない。

ふと、空を仰げば、満天の夜空に星が輝いている。なんか和むなあ、と心の中で呟いた。気のせいかな、先程研ぎすまられた神経が丸くなっていく。

「なあ、結局、眼帯はどうやって戻したんだ？」

空を見上げながらチンタラと運転していると、先程まで黙り込んでいたドイルが突然口を開いた。

ああ、これ？と。右眼の眼帯を撫でながら

「なんかね、私の中のエンジェル・ダストを……こう、包むような……感じ？」

なんとも抽象的な返事をする。

曖昧だな。曖昧だね。と、矢継ぎ早に互いが口にして、少し二人は笑った、

やっぱり、一人じゃないよ。

「なあ、ハイリス？お前さ……」

「なに？」

笑い終え、一瞬沈黙が流れると、ドイルが何かを言い辛そうにしている。

早く言いなよ、とハイリスが急かすと意を決した様に口を開く。

「お前さ、ガラスディアモールで領主を倒……殺した事、気にしてるだろ？」

ドイルの口から出た言葉は、少なくともハイリスが色々と予想していたものとは全くなかけ離れていた。

え？そう驚いた様にハイリスが言つと、それを聞いてか聞かずか「あれは、人じゃなかった。魔力の塊だよ。だからこそ、人間を斬れないこの剣でも斬れたんだ。あの時使った“魂狩り”も、人以外を斬るって所は変わらないんだよ」

それに、とドイルは続け

「今の俺は、“人を殺せない”。『約束』なんだ」

それだけ言い終わると、ドイルは口を閉じる。ハイリスの答えを待っているのか、それとも、ただ言っておきたいだけだったのか——それはドイル自身にも分からなかった。

「今の——って事はさ、昔は違うんでしょ？まあ、どれくらい昔かは分からないけどさ」

ドイルからは、ハイリスの背中しか見えない為、彼女の表情を見る事が叶わない。

「ドイルは、人を殺した事がある？」

黙って聞いていよう、彼女自身、今は返事を求めている。ドイルはそう思って、何も口に出さない。

「私は多分、あれが初めて。トドメはドイルがさしたけどさ、そんなの関係ない、私は彼を殺した……そう思ってる」

空を見上げ、星空を見れば、言いたい言葉が次々と出てくる気がして

「私思うんだ、別にドイルを悪く言うわけじゃないよ？」

「人って言うのはさ、形なんて無い、なんて言うか……意志？そう言う、むしろ形の無いものだと思う。いや、私達人間だけじゃなくて他の生き物達もかな。」

皆が皆、何か強い想いを持っていて、それを強い意志で型どつてる。ハインケルンだって、何か強い想いがあつて人売りをしたのかもしれない。ガラスディアモールの領主だって、何かが彼を突き動かしていた。それは私欲かもしれないし、他人を想つての事かも知れない。そんなの、彼ら自身にしか分からない。

でも、だからと言って彼らを許せるわけじゃない。こんなの、利己的かも知れないけど、私は許せなかった。それは、後悔してない。

私が後悔しているのは、いや、罪悪感を感じてるのは……領主の想いを。彼の想いを消してしまった事なんだと思う。私自身よく分からないけど……。

他人の意志を、自分の意志の為に踏みこむ。私がしたのはさ、そんな、自己中心的な行為。

まあ、こんな御託を並べても、ただの言い訳に過ぎないんだけどね。自分自身に言い訳してるだけ」

ドイルからは、ハイリスの表情が見えない。けれど、今の彼女は

困った様に笑顔を浮かべていると思う。そんな確信が、何故があった。

「たった今、考えが纏まったよ。今まではこんがらがってた」

また、表情は変わった。

多分、今は、重しが取れたような、すっきりした顔。

「って、そう言えばさ、ドイルの師匠って何者なの？」

「は？」

思わず素っ頓狂な声を出すドイル。話が横に逸れすぎだろ、と言おうとする前に

「私がこんだけ喋ったんだから、ドイルだって暴露話くらいしなさい！」

そう強く言われて、仕方ないな……と、ため息を吐く。まあ、いずれ自分から言うたろ。

「俺は、人を殺そうとした事がある、師匠に会う……ほんの一瞬前だ」

なんだ、一回くらいしてると思った。とハイリスが口を挟む。

「別に、お前程人を殺す事に抵抗はない。けどな、俺が約束を破れない事を良いことに師匠が……な」

「へえ、なんで約束破れないの？」

ハイリスがそう言うと、ピタリと動きを止めるドイル。どうしたの？とハイリスは聞こうとするが、やめておく。

「まあ、それは別の話。師匠の事を言うけど、あの人に会ったのは戦争が終わって三年後くらい。それから、この剣をもらって……そして、マテリアル・ギアを刻まれた」

懐かしそうにドイルは自分の左胸……歯車の刺青がある部分を撫でる様に触る。

「んで、剣術とか色々な事を、俺に教育して……。一年程前に突然消えた」

寂しそうだ。ハイリスはドイルに対してそう感じた。思えば彼にそう感じた事は今までに無い、初めての事だった。だが、同時に思う。

「結局、師匠さんは何者？」

あ、悪い。そう言っただイルは考え込む。

「そうだな、戦争時代に……かなり有名だったんだよ、『死神』って二つ名で呼ばれてな、何度か聞いた事あるだろ？まあ、あんまり詳しい事は俺もよく分からな……」

ドイルが言葉を途中で切ると、慣性を二人に感じさせながらスクーターは動きを止める。

それと同時に、はあ、とドイルはため息を吐いた。

「全く、面倒事は俺達に引き寄せられてんのか？それとも俺達から進んで関わっているのか？どっちなんかね」

「両方じゃない？」

軽く金属音を立て、剣を抜き。パチンと、ホルダーから魔本を取り出す。

『さて、やりますか』

二人合わせてそう言つと、スクーターから降り、勢い良く走り出した。

＋＋＋

最悪な一日だ、それも現在進行形で。

チツ、と大きく舌打ちをして、ウルティム・イーサネットは剣を抜いた。

高価な装飾がされており、見た目は儀式剣とまでいなくても、とても斬るための剣には見えない。

だがこれはれっきとした名剣である、『彼女』を守る為に腕利きの職人が打った刃。

そもそも、その剣を抜く羽目になった時点でもう不幸だ。とことん運勢が悪いらしい。

自分も、彼女も。——とくに最近は。

今日一日の不幸は、“あの”黒髪と桃髪の二人組に会った時から始まったに違いない。

ウルティム・イーサネット——彼は、彼女に近付いた怪しい黒髪から彼女を守る為、そいつを撃退しようと攻撃を仕掛けたが反撃を受けて不覚にも気を失ってしまう。

その後、気付けば黒髪の仲間らしき桃色の髪に大きな眼帯を右眼に着けた少女が自分の近くで分厚い本——どうやら魔法使いの様だから魔本だ——を手に持って立っているではないか。

そしてその横には、自分を心配そうに見下ろす彼女の姿がある。

彼女が抱えているのは自分の剣。

くそつ、なんて情けないんだ。

どうやら自分は寝かされているらしく、薄目を開けて周りを見渡した事が良かったのか、彼女を危険に犯す“だろう”二人は自分が起きた事には気付いていない。

どうする？下手に動けば——そう考えていると、天から好機が降ってきた。奴らに隙が生まれたのだ。今しか無い……！

結局、その好機を活かす事は出来ず、拳げ句の果てには彼女に制止をされる。

そして彼女に従い黙っていると、奴らは自分達の状況を的確に言い当てた、白々しくもまるで適当に思った事を言ったかの様な口振りだ。確信した、こいつらは敵だ。

彼の考えは、正直ドイルとハイリスからすれば誤解も良いところである。

二人からしてみれば、ものの見事に勘違いされているとしか言い様がない。

簡単に言っなれば、冤罪だった。

彼がそこまで神経質になったのには深い事情があるのだが――。
そんな彼が今、剣を向けている相手は最近この辺りを中心に活動している山賊達。

事の発端は、彼と彼女がドイルとハイリスに会った町から定期的に出ている大鐘の街『クロノス・チャペル』行きの馬車に乗りしばらくして、突然馬車が止まった事だ。

「中の奴は全員外に出ろ！金目の物と武器は横に置け！」

すると、そう叫びながら数人の男が馬車内に入ってきて無理矢理他の乗客達を外に引つ張り出し始めたではないか。

仕方なく彼もそれに続いて大人しく“剣を持つて”彼女の手を掴みながら外に出ると、十人程のゴロツキが各々武器を持ちニヤニヤと笑みを浮かべている。

それを見て、彼女に危険が迫るだろうと判断した彼は剣を躊躇無く抜いて構えたのだ。

しかし、さすがに十人を相手にするのは無理があった。

またまた情けなくも、後ろから奇襲を受けた彼の身体は地面に這いつくばっている。

何かで殴られたのか、後頭部がヤケに痛み、意識も視界もがぼんやりとしてはつきりと前が見えない。

「頭領、街道のど真ん中では目立ちますぜ」

「そうだな、ここにいる全員を……縛って林に連れてけ」

だが辛うじて山賊達の会話を聞き取る事はできた、顎に鉄のコルセットの様な物を着けた細長い男と他の山賊達より一回り大きく筋肉の塊の様な――左腕が肩下辺りから無い――隻腕の男……その二人の会話だ。

その会話のすぐ後に頭領と呼ばれた隻腕の男が、彼女と自分も含めた乗客達を指差し、そのまま指先を街道のすぐ側に隣接している鬱蒼とした林に向けているのを霞んだ視界で見た。

そうして、縛る為の縄が無かったのか縛られる事は無かったが、反抗をすれば“見せしめ”にされた彼の二の舞だと思っている乗客達は誰一人反抗する事はせず林に追い込まれていく。

馬車の荷物を全て運び出し、今度は乗客の身に付けている物を剥ぎ取るつもりなのか数人で乗客達を囲み出して、ついではかりに女と男で半分に分れさせた。

数人いた女達――心配そうにこちらを見る彼女を含めた――を、舐める様な視線で上から下まで見て山賊達は下卑た笑みを浮かべる。その間、彼は這いつくばる事以外何も出来ず悔しさを噛みしめるしか出来無い。

「ふん、まあこれだけ女が居れば暫くは楽しめるだろ」

だが、その言葉を聞いて彼は、腹の底から溢れ出した激昂を糧にふらつく身体へ強く鞭を打って立ち上がり、剣を構えて山賊達を睨み付ける。

「ぶざけるなよ貴様ら！パルに手を出して見ろ！ぶち殺して……」

バキヤツ！――そんな嫌な音が派手に響き、彼の身体は吹き飛んで木に叩きつけられた。

ひっ、と誰かの喉が震える。

自慢の拳で彼の頬をぶん殴った隻腕の男は、木にもたれてぐったりと身体から力を抜く彼を見て

「ぶち殺す？そう言おうとしたのか？——やって見るよ、ゴミ」

鼻で笑い、見下した瞳で罵った。

ちくしょう、ちくしょう！後ろから不意打ちをしておいて、お前達の方がゴミだろうが！

そう叫びたいが、痛みと——何より疲労がそれを不可能にさせていた。

慌てて彼女は駆け寄ってくると目に涙を浮かべ彼の頭を心配そうに撫でる。

彼は心配するなと口に出したかったが、声は掠れて出なかった。

「ぶち殺しはしないけど、ぶち半殺しにはしてやるよ」

山賊に囲まれ恐怖に顔を歪める乗客達、とくに女性達が絶望の顔を浮かべた時——

彼の頭を撫でる彼女の背後に、山賊が二人迫った時——

そんな、少年の声が辺りに響いて、いつの間にか二人の少年少女が、彼女に迫る山賊二人の前に立っていた。

少年は右手に剣を持ち、少女は左手に魔本を持ち。

『外道は寝とけ！』

二人合わせてそう言う

少年が持つにしては大きい剣を掬い上げる様に、ここに居る者達では見えない速さで振るって一人を下から真つ二つにして

少女はもう一人の腹に体重をのせた右肘をぶち込んで、そのまま右足を軸にした回転蹴りで女性とは思えない程、大人の男を吹き飛ばす。

一人は何故か服だけが真つ二つになり、斬られた衝撃で少し宙に浮き、その一瞬後に闇を切り裂く様な悲鳴を上げて地面に落ちると、崩れ

腹に二度、強烈な衝撃を食らったもう一人の方は呻き声しか出ず事が叶わず、地面を転がると泡を吹いて痙攣し、そのまま気絶した。

「なんだてめえらはっ!!」

隻腕の男が二人の仲間を一瞬で倒した少年少女に怒声を浴びせるが子供が聞けばすぐに泣き出す様な迫力に、まだ幼さが残る二人は全く動じない。

「黙れよ三下、底が知れるぞ」

「少なくとも、あなた達の味方じゃない」

迷いの無い背中を彼には、男達には強気な瞳を見せて

二人は、はつきりそう言い放った。まるで、山賊達全員の標的が自分達に集中する事を望む様に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0491h/>

旅路のアルプラ

2010年10月20日03時57分発行